

明治四拾五年三月發行

校友會雜誌

第拾號

山口縣立萩中學校校友會

表紙題字は松陰先生
手寫稿本中より選び
て擴大撮影せるもの
なり
編者白す

山口縣立
萩中學校
校友會雜誌第拾號目次

口繪

○展覽會出品優等書畫 其一 其二

會報

○團隊長途競走○山根代議士の演說○本會各部長の選舉○同委員の互選○修學旅行○一日行軍○藤田氏の來校○會長訓話○陸上大運動會○會長訓話○十年勤績表彰會○松陰先生追慕式○會員計報○書道部記事○書道部記事○劍道部記事○柔道部記事○連合武道競技會○辯論部記事○漕艇部記事○野球部記事○庭球部記事○惠贈書目○四拾參年度會費決算書○

本校記事

○卒業證書授與式○校長諭告○河野大尉の來校○聖駕奉迎○遙拜式○送迎彙錄○

文苑

目次

四十四頁

○涙松 戸塚 端
○將來の覺悟 西林 鴻介
○豫習の必要 山根 正直
○前號所載「運動を擇ぶべし」の記者に與ふ

○海上生活の趣味 中村 章
○濱寺に遊ぶ 浮里 宜也
○夏休中の一記事 大津 正一
○拜輦私記 厚東四郎次

○As The Pen Runs. 特別會員 安藤 紀一
○The Hunting of Hares. 4th Year T. Kashiwamura.
○Dangerous Moment at Nyo-i Water-Fall. 5th Year U. Watanabe.
○The Pine Tree. 5th Jun Nagamura.

講壇

○七生説略解 特別會員 藤井 百輔
○松陰先生の最後 特別會員 松本 喜一

來信一束

八十七頁

三十九頁

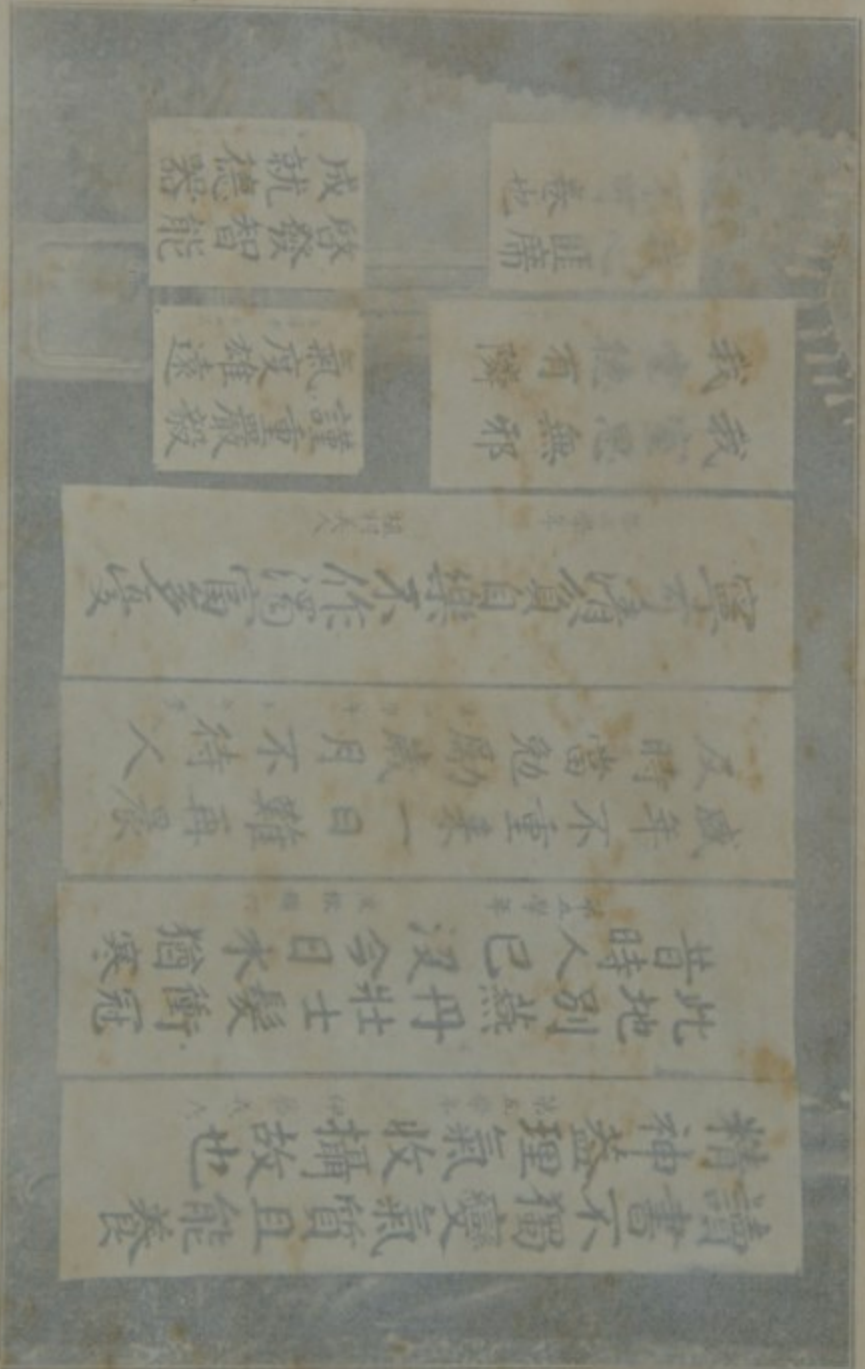
○會友田中貢君よりの來翰 ○同安藤芳彦君よりの來翰

附錄……………九十一頁

○本校沿革略 ○職員表 ○學級數及生徒數表 ○武學貸費生表 ○卒業生一覽



(一 共) 畫書等優品出會覽展



- (1) 五學年 藤 義彦
- (2) 同 藤 義彦
- (3) 四學年 藤 義彦
- (4) 三學年 藤 義彦
- (5) 同 藤 義彦
- (6) 同 藤 義彦
- (7) 同 藤 義彦
- (8) 同 藤 義彦
- (9) 同 藤 義彦
- (10) 同 藤 義彦
- (11) 同 藤 義彦
- (12) 同 藤 義彦
- (13) 同 藤 義彦
- (14) 同 藤 義彦
- (15) 同 藤 義彦
- (16) 同 藤 義彦
- (17) 同 藤 義彦
- (18) 同 藤 義彦
- (19) 同 藤 義彦
- (20) 同 藤 義彦

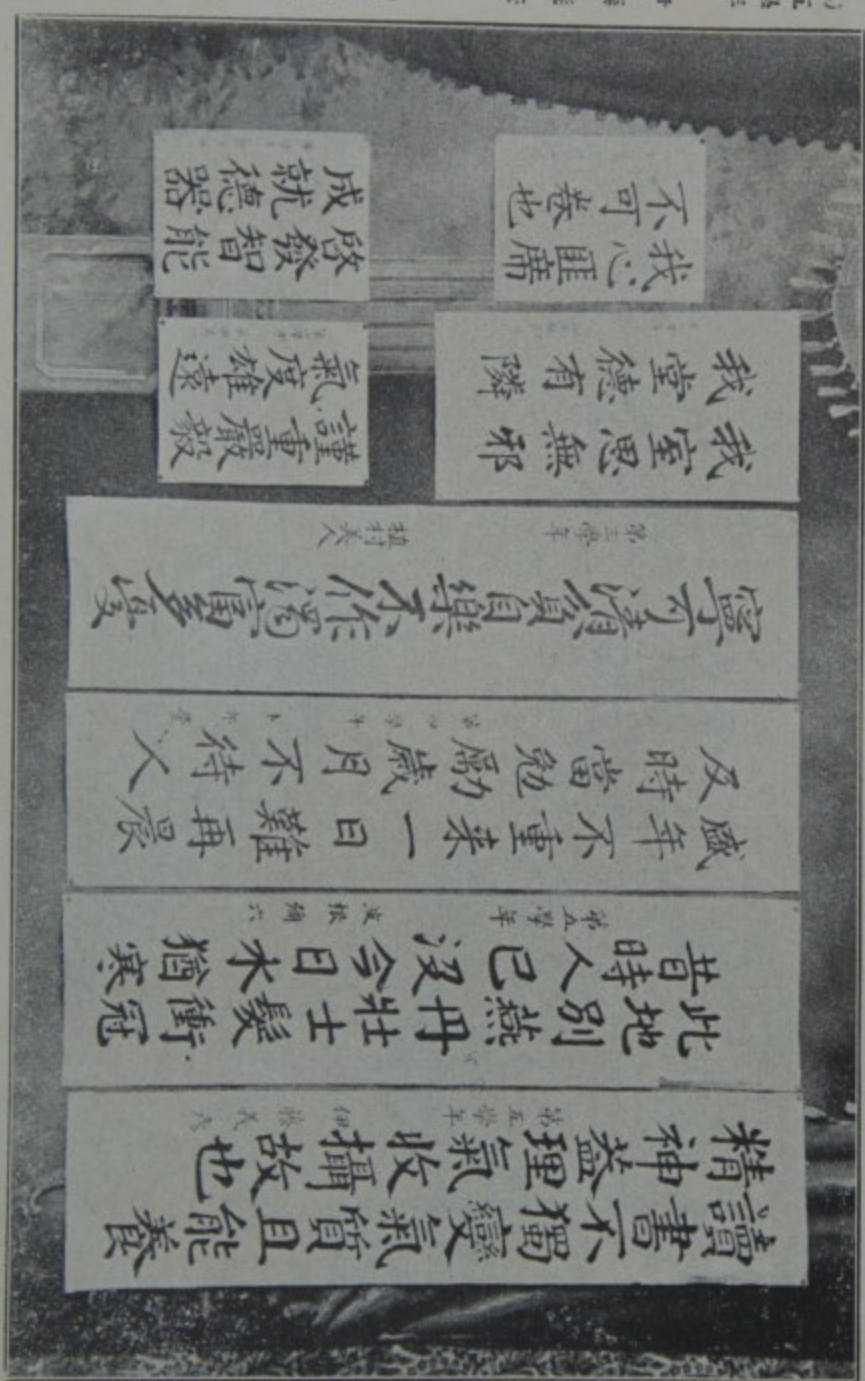
(照 參 事 記 報 會)

目次
 ○會友田中實君よりの來翰 ○同安藤芳彦君よりの來翰

附錄……………九十一頁

○本校沿革略 ○職員表 ○學級數及生徒數表 ○武學貸費生表 ○卒業生一覽

(一其) 畫書等優品出會覽展



讀書不獨變氣質且能養精神蓋理氣收攝故也
第五學年 伊藤義彦 撰

此地別燕丹壯士髮衝冠
 昔時人已沒今日水猶寒
第五學年 波根綱六 撰

盛年不重来一日難再晨
 及時當勉勵歲月不待人

寧可清貧自樂不作富貴憂
第三學年 植村美人 撰

我室思無邪
 我室德有隣
 謹重嚴毅
 氣度雄遠

我心匪席
 不可卷也
 啓發智能
 成就德器

- (1) 五學年 伊藤義彦
- (2) 同 波根綱六
- (3) 四學年 卜部 豊
- (4) 三學年 植村美人
- (5) 二學年 三上勝象
- (6) 一學年 藏田正一
- (7) 同 磯部千尋
- (8) 同 須子英一

(照參事記報會)



(1) 五學年 石田四月
(2) 一學年 須子英一
(3) 四學年 阿部朝香
(4) 五學年 秋本一郎
(5) 三學年 永松元治
(6) 四學年 卜部豊

回

(共二)

山根代議士の演説

會

報 (自明治四十四年一月至同年十二月)

團隊長途競走

二月四日、本會は、團隊長途競走を大井村に行ふ。決勝點を、高倉荒神祠下、本校を距る二里二十町許の處に定め、各隊、五分を隔て、校門を出て、豫め指定せる徑路を通過し、決勝點に向ひて進む。途中には、各處に見張を置き、其通過を検す。各隊共一人の故障を生ずるもの無く、打揃ひて到着せしは、平生鍛練せし體力の強健を證し得て十分なり。歸途各中隊選手の競走を行ふ、最壯快を極めたり。勝負の様左の如し。

- 第壹着一時十二分 第三中隊第壹小隊(第四發)
- 第貳着一時十五分三十秒 第三中隊第貳小隊(第七發)
- 第参着一時十六分 第三中隊第参小隊(第九發)
- 第肆着一時十八分 第三中隊第肆小隊(第九發)

會報

- 第五着一時十九分三十秒 第三中隊第貳小隊(第三發)
- 第六着一時二十一分 第三中隊第参小隊(第五發)
- 第七着一時二十五分 第三中隊第肆小隊(第六發)
- 第八着一時三十二分 第三中隊第伍小隊(第八發)
- 第九着一時三十四分 第三中隊第陸小隊(第八發)

- 中隊選手の優劣次の如し
- 第壹中隊柴田 壽一(三年)
- 第貳中隊藤原 政一(五年)
- 第参中隊堀尾 嘉一(二年)
- 第肆中隊堀尾 三郎(五年)
- 第伍中隊河口 百合長(五年)
- 第陸中隊西林 鴻介(三年)
- 第柒中隊篠田 直武(四年)
- 第捌中隊福田 忍(四年)
- 第玖中隊 止 第三中隊厚東剛四郎(五年)

山根代議士の演説

四月十三日、午前十一時より、朝鮮總督府衛生顧問

代議士山根正次氏の演説あり。氏は先朝鮮の歴史風土人情より説起し、日韓合併の顛末に及び、伊藤山縣桂曾彌寺内其他當局諸氏の盡力の模様を語り、其原因を日清日露の兩役に在りとなし、終に之を天皇陛下の廣大なる御威徳に歸し、更に従軍戦死者の功勞、廢兵院の状況等を語り、中間東郷乃木兩大將の人格、旅順閉塞隊の勇敢なる行動、防府町一等卒林徳三氏の壯烈なる最期の状況等を述べ、戦地より收拾し來りし帽子薬袋等の無数の彈痕を留むるもの、廢兵の寫眞、乃木式義手の寫眞等を示し、戦死者廢兵諸氏の功勞の忘却すべからざること、廢兵諸氏を慰問すべき事等を述べ、終に健全なる精神は健全なる身體に宿るとの古訓を引き、將來國家に貢献すべき義務を有する青年は、最衛生に留意せざるべからずとの意を、縷々二時間に涉りて演説せられたり。廢兵の状況を述べらるゝ時の如き、氏自身も轉た感想に堪へざるものあり、涕涙の臉を傳ふを見、生等亦落涙を禁ずること能はざりき。

本會各部長の選舉

- | | |
|-----|--------------------------|
| 漕艇部 | 3 數藤 直衛 2 益田 兼施 1 吉田 稔 |
| | 5 陶村 政一 5 上野 實造 5 厚東 四郎次 |
| | 5 有倉 誠 4 堀 信一 4 篠田 直武 |
| 書道部 | 3 松浦 時行 2 三好 市郎 1 岡崎 虎熊 |
| | 5 守重 哲成 5 原 禎造 5 渡邊 梅吉 |
| | 5 伊藤 義彦 5 大津 正一 5 長宗 純 |
| | 4 宮國 武頼 4 柳屋 良輔 3 永松 元治 |
| | 3 後藤 琢一 2 三上 勝象 2 井本 明治 |
| | 2 松本 正人 1 原 眞作 1 磯部 千尋 |
| | 1 進藤 常雄 |
| 畫道部 | 5 田村眞一郎 5 波根 彌六 5 下村 福次 |
| | 5 秋本 一郎 5 内山 芳忠 5 石田 四月 |
| | 4 三上 孝之 4 卜部 豐 3 飯田 治郎 |
| | 3 松村 秀之 2 田總 時敏 2 加藤萬壽夫 |
| | 2 栗屋 穰 1 英 潤三 1 益田 兼英 |
| | 1 池田 末治 |
| 雜誌部 | 5 原 禎造 5 渡邊 梅吉 5 大津 正一 |
| | 5 平島 公平 4 上岡讓熙 知 4 増野 雅治 |
| | 3 山下 眞一 3 小川 義雄 2 柴田 省三 |
| | 2 下井 干城 2 松原 淨二 1 吉田 操 |

四月十九日、本會各部長の選舉行はれ、左の如く決定せり。

- | | | | |
|-----|-----------|-----|--------|
| 劍道部 | 山本百合熊先生 | 柔道部 | 中村正治先生 |
| 野球部 | 丸本庄太郎先生 | 庭球部 | 田中市郎先生 |
| 漕艇部 | 野坂 元定先生 | 游泳部 | 相島直一先生 |
| 辯論部 | 松本 喜一先生 | 書道部 | 安藤紀一先生 |
| 畫道部 | 田總百合之助先生 | 雜誌部 | 藤井百輔先生 |
| 褒賞掛 | 藤原 甚吉先生 同 | | 高木九一先生 |

同各部委員の互選

五月一日、各部委員の互選を行ふ、結果左の如し。

- (右肩の數字は學年を示す)
- | | |
|-----|-------------------------|
| 劍道部 | 5 内藤 千里 5 黒瀬 知一 4 河内山隆輔 |
| | 福永隆太郎 4 堀田 恭輔 4 片山 平作 |
| 柔道部 | 3 幸月富士昌 |
| | 5 陶村 政一 5 伊佐小次郎 5 山田 專一 |
| | 5 梯並 修三 4 口羽 忠介 3 赤崎哲三郎 |
| 野球部 | 5 伊佐小次郎 5 守重 哲成 5 村上 正文 |
| | 5 山田 專一 4 長岡 正人 4 井町 照久 |
| 庭球部 | 5 秋丸 哲夫 5 奥田 準一 5 内山 芳忠 |
| | 5 岡 正 4 原田 勝二 4 原田 景三 |

修學旅行

五月四日、五年生諸氏は、金子鈴木相島三先生に引率せられ、修學旅行に出發し、吳廣島岩國各地を巡覽し、七日午後三時、無事歸來せり。當時の紀行文一篇を得たれば、左に附載す。

修學旅行日記

五月四日。午前四時半、余等旅行隊は金谷天神祠前に集合し、三隊に分れ、金子鈴木相島三先生に引率せられて出發す、折しも雨ふつ／＼と降り出でしが、勇みに勇む余等一行には雨何かあらん。明木を過ぎ、一升谷を越え、佐々並に晝食す。雨外套に透り、冷氣體を襲ふ。晝食を終へ、ひたすら道を急ぎて、一の坂を走り下り、遂に山口町に入り、直ちに二時二十五分發の軌道車に乗り小郡に到り、待つこと少時にして、余等が乗るべき汽車は着せり。一同勇みて乗り込む。此時衣物悉く濡れ、愈々冷氣を覺ゆ。窓外の景色は降雨のために見ることが得ず。三田尻驛を過ぐる頃雨稍歇む、富海海の絶景を眺め盡して、茫漠たる鹽田の中を通過するとき雨復至り、しきりに車窓を打つ。大島を見る頃には日すでに暮れぬ。かくして何時の間にか、余等は廣島驛にありき。終日徒行の勞は余等を驅りて、車中に一睡の夢を結ばしめしなり。余等は知らぬ道を右に左に導

かれて、やがて余等が旅舎なる鐵砲町の山縣屋といふに着きぬ、時は九時頃なりき、是より余等は濡れたる衣服を乾し、樂しく明日の行程など語る中に、何時の間にか世間は静まり、雨の屋根をうつ音のみ聞ゆ。

五日。午前七時起床。一行は雨を肩して廣島を巡覽す、廣島は太田川の三角洲上にあり、淺野氏の舊城下たり。廣島縣廳、廣島城は市の中央にあり。廣島城は第五師團の在る所にして、明治二十七年夏、征清の役起るや、八月より翌年六月まで、陛下には此の城内に大本營を置かせ給へり。國泰寺、佛護寺、明星院、不動院等の寺院あり。有名なる饒津神社前には二葉公園あり。神社は淺野家の創建にして、祖先淺野長政を祀る。二葉山腹よりは全市を下瞰すべし。又泉邸と云ふは風趣に富む所なりと聞く。市中最も繁華なる市街を大手町とす。三井銀行支店、日本銀行出張所、郵便局などの大廈高樓軒をつらねたり。控訴院は小町に、高等師範學校は國泰寺村にあり。各所巡覽の後、余等は自由散步を許され、各自思ひ思ひの所を視、かくして後西練兵場に集合す。西練兵場は廣島城前の大廣場にして、其の四圍は紀念碑官衙等にて圍まれたり。低く黒く長き數棟は病院と知られ、右手の建物は階交社なり。又征清征露兩役の紀念碑あり、北清事變のも見ゆ。今前方の大廣場には、備重兵の練兵最中なり。余等は列をなし、肅々として城中に入る。左の建物は地方幼年學校、砲兵聯隊の營舎なり。鐵釘の澤山打たれたる大黒門を入りてしばらく休憩し、備重兵中尉の案内にて大本營を拜觀す。二階に上りて、先づ當時陛下の玉座ありし室に導かる。この室には陛下の御眞影奉安しあれば、余等は最敬禮を行ひたり、此の時

案内せられたり。先づ目に入りしは赤色の大造船臺なり。其上に上れば、岡山縣方面まで眺めらる、由、此方のドックの中には軍艦明石の修繕中なるあり、其の側に潜水水雷艇二隻ありき。佐久間大尉の事など思ひ出て、其の艇の引き入れられて、鐵窓の碎かれしは、或は此のドック中にはあらざりしかなど思廻らし愈々感に打たれたり。他に二つのドックあるを見る、花崗岩にて立派に築き上げられたり。聞く、以後は造船臺上にては造船せず、此のドックの中にて建造せらるべく、然るときは從來の如き危険なく、安全に進水なし得べしと、かくして色々の工場中を通過して歸る。今まで耳裂けむばかりなりし鐵槌の音は全く止み、余等は、唯青服の職工の群の幾萬とも知れず、各自の家に歸るを見るのみ。停車場に歸りし頃は空腹に堪へざりき。廣島驛にてしばらく休み、宮島へと向ふ。やがて日は暮れぬ。左手の島上に燈火列をなし、海上漁火點々たるを見る。嚴島なるべき事察せらる。宮島驛に下り、歩行する事一町、連絡船にて嚴島に渡る。海上心地極めてよく、半時ならずして嚴島に上陸す。嚴島には、すでに野坂元定先生の配意により、旅舎も宮居近き所に定めあり、且先生の嚴父君は、御老體にもかゝはず棧橋まで迎へ給ひぬ。其の厚情は余等の忘るゝ能はざる所なり。華やかなる町を通り、安崎旅舎に着く、時に九時前なりき。此時、七八百許の他の中學生此地に來りあり、故に余等は注意に注意して行動せり。各自散歩の都度、繪葉書宮島細工など買ふ。聞く宮島細工は土地の人、少時より之を作ることを練習し、中には小學生にして、すでに立派なるものを造るものあり、年々多額の製品を産すと。かくして、余等は此の別天地に、明日の樂し

に於ける余等の感想は無量にして、筆紙の得て記する所にあらずるなり。中尉は極めて嚴肅なる態度にて、此大本營の來歴、陛下の極めて御質素にましませし事、日本魂の失ふ可らざる所以等を語られたり。玉座は實に質素極れるものにして、前方に錦の覆ある机二臺あり。一臺の方には、其上に菊の御紋章を高蒔繪にしたる御火鉢あり、御椅子は梨地に菊の高蒔繪紫の天鵝絨を張れるものなり。其後には無地金屏風あり、前方の壁には鏡かゝれり。其より御湯殿を拜觀し、陛下の戦利品陳列室に導かる。中尉は一々叮嚀に説明せられたり。觀了りて、余等は厚く中尉に謝して去り、廣島停車場にと急ぐ。場内に於て晝食し、三時頃出發突に向ふ。字品の方を眺めては立ちよる時間なきを惜む。先づ海田に着す、海田は海田灣に臨み、山陽本線と吳支線との會點たり。海田を過ぐれば、數箇のトンネルあり。海の景色頗るよく、島陰には驅逐艦の遊戈するあり。吳の遠からざるを知る。やがて余等の眼前にあらはれしものは、我國海軍の精銳にして、御國を守る浮べる城ぞかし。余等は其偉大なる形とその光榮ある歴史を思ひ、轉た崇敬の念を禁じ能はざりしなり。間もなく汽車は吳驛に着しぬ。一行は鎮守府前の橋上に休む。已にして海兵團内の病院、集合所などを觀て後、各先生の一通りならぬ盡力の結果、遂に工廠觀覽の許可を得たるにより、ひた走りて走りて工廠に到る、到ればすでに終業時に迫り、僅に數分を餘すのみ。余等は暫時海岸に立ち、港内の軍艦を見る、赤色の大艦はこれ先般通水せし薩摩艦なり。此方の岸に聚がれたるは赤城なり。余等は我海軍大發展の様に今更ながら驚かざるを得ざりき。時すでに四時を過ぎたれども、特に一通り工廠内の一部に

みを夢みつゝ此第二日を暮せり。
六日、朝早く起き出て、海岸の絶景を眺む。前方に二隻の獨乙軍艦碇泊し居たり。此島は南北二里半、東西三十町にして、嚴島神社は島の西北岸嚴島町の南部なる御笠濱に在り。創建の年月詳ならず。八時頃、余等は野坂氏より特に附けられたる二人の案内者に導かれ、二隊に分れて參拜す。百四十八間の長蛇屈曲蜿蜒し、燈籠限りなく、掛連ねらる。夏月海水満つる時は、水廊床に上る由、故に板と板との間一二寸の間隙を存せり。神殿の前方に舞臺あり。有名なる鳥居は其の前方二三町の海中に立てり。赤色にして高さ五丈餘、根付きの松にてつくられ、額には嚴島神社と記されたり。其より寶物館に案内せらる。甲冑刀劍書畫古器等、僅の時間に見盡すべからず、又公園に案内せらる。青松白砂の間に立ちて浮殿を望めば、白帆は靜に水面に映じて實に清き景色なり。園中にミカドホテルあり。清溪其の前を流れ、岸には楓の綠葉輕く風に動きつゝあり、秋の風景思ひやらる。余等は山上なる、清盛が經を埋めたりと云ふ所まで上りて下る。右方に陶晴賢と毛利元就との古戰場を觀、五重塔千疊敷に行く。千疊敷には無數の杓子うちつけられたるあり。中に外國人もありいと珍らしく感じぬ。已に巡覽を終了して、自由に散歩したる後、又汽船に乗り、宮島驛に渡り、汽車にて岩國驛に着す。岩國は吉川氏の城下にして、城址は横山村にあり。岩國川に架せられたる錦帯橋は構造の奇なるを以て有名なり。其地の産品に岩國縮あり。電車麻里布に通し、交通甚便なり。岩國を過ぎて柳井橋を以て有名なる柳井津に到る。大鳥郡を左に見る。其の久賀村には郡役所あり、又商船學校あり。余等が

友の其校に在學するあるを思へば何となく懐し。室積を過ぎ、徳山驛に着す。徳山亦岩國と等しく舊城下にして、門司中津に直航の便あり。前面の徳山灣は水深くして大船を泊すべし。海軍煉炭場あり、高き煙突空に聳ゆ。石炭丘の如く堆積せらる、此の石炭はこれ大嶺の無煙炭なり。三田尻を過ぎ小郡を経て、山口に着せしは五時頃なりき。十時まで自由散歩を許可せられ、各自散歩に出づ。七日。全員元氣旺盛、七時山口を發し、佐々並に晝食し、櫻の茶屋の舊道を經、一升谷を越え、明木村に下り、トンネル口の茶屋に休む。同窓諸氏三五來迎ふ。金谷天神社前に達すれば、校長以下諸先生既に此にあり。校長より慰勞の辭ありて、一同解散せしは六時頃なりき。
(長宗、原)

一日行軍

五月十六日、午前八時出發、教職生徒全部越ヶ濱に行軍し、午後一時集合、歸校の途に就く。此日、本願寺別院にて、新法主光明氏の歸敬式あり、市街は善男女の往來織るが如くなりき。

藤田氏の來校

七月七日、藤田平太郎氏は、西村禮作氏を伴ひて來校し、校内を巡覽し、校長室にて少時談話の後辭し去らる。此日、同氏は、運動獎勵の主意を以て、本會基金の内へ、金二百圓を寄贈せられたり。

き。只惜む、薄暮冥々たる時、選手競走の勝敗の決せられしとを。競技全く終り、萩中學校萬歳を三唱して散會す、時に日已に西山に没し、月輪東天に懸れり。當日の主なる競技及び其優勝者左の如し。

- 第二十三回 早駟千米突(姓名の頭に附せる)
 - 第一着³ 山中尙夫 二着¹ 笠井義助 三着² 金生子一 四着² 藤井直章
- 第四十回 特別障害物
 - 第一着⁴ 卜部 豊 二着³ 三島威一 三着⁵ 坪井三介 四着⁵ 田村眞一郎 五着⁴ 郡司又一
- 第六十一回 早駟千米突
 - 第一着³ 堀尾嘉一 二着⁴ 中村 章 三着⁴ 豊田延雄 四着⁴ 宮國武輔 五着⁴ 羽鳥 陳
- 第七十二回 特別障害物
 - 第一着³ 堀尾嘉一 二着⁵ 坪井三介 三着⁵ 日野二郎 四着⁵ 内藤千里 五着⁵ 柿並修三
- 第八十一回 選手競走
 - 第一着 第一中隊選手 1 山田正雄 2 三好市郎 3 石津 浩 4 阿武茂雄 5 下村福次
 - 第二着 第三中隊選手 1 笠井義助 2 中島一郎

會長訓話

十月三日、午前七時半、新任先生紹介式の序を以て、會長は、一同に注意すべき事ありとて、ベイスボール、テニス等の運動の、絶對的に排斥すべきにあらざるは勿論なれど、さりとて、餘りに之に耽るは、學課の進歩を害する恐あれば、適度に之を爲さざるべからざる旨を説話せられたり。

陸上大運動會

十月十八日、紀念式終りて、例に依り、陸上大運動會を開く。前日來の降雨の爲、其準備を妨げられしにか、はらず、上級諸氏の努力、下級諸氏の援助により、瞬間にして用意萬端整へり。午前十時三十分、烟花一發中空に轟くや、茲に愈々競技は始まれり。本年は、競技に大なる選擇を加へ、障害物に困難を益し、音楽堂及び競技用品置場を埒外に移したるなど、例年と異なると甚多し。各競技者は、元氣旺盛、紀律嚴肅、眞に我校風を發揮せり。多くの競技中最も勇壯痛快なりしは、相撲障害物及び中隊選手競走なり

- 3 堀尾嘉一 4 中村 章 5 秋九哲夫
- 3 第三着 第二中隊選手 2 黒瀬貞盈 2 西林鴻介
- 3 上田保則 4 篠田直武 5 豊田延雄

會長訓話

十月二十三日放課後、一同を講堂に會し、會長より、次の如き訓話ありたり。過日の運動會は、諸子が熱心なる盡力により、略々遺憾なく行はれ、運動の種類も、昨年に比して、大に改良せられ、單に觀者の喜悅を買ふとを以て目的とするが如き如何はしきものなかりしは、大に満足する所なり。運動會競技の種類は、體力の健強を比較するを以て精神とし、觀者をして、覺えず腕を扼せしむるものならざるべからず。今後益々注意せん事を望む。との旨を述べ、其より、インターナショナル、オリンピック、ゲームの状況を述べ、種々競技運動の精神を講話せられたり。

十年勤績表彰會

十一月三日、拜賀式終り、藤原教諭伊藤書記の十年勤績表彰式を舉行し、本會よりは、記念品として、蒔繪膳拾枚宛を呈したり。當日來賓としては、田中春風

岡田判事野北中佐田門愿一菊屋法學士白石郡視學松島明倫小學校長花村防長新聞通信員阿部萩時報記者其他十數氏出席せられ、村上會長の表彰文朗讀卒業生總代山本教諭の祝文朗讀あり、十二時、式を終る。

表彰文

校教諭藤原甚吉君以數理之學奉職十年于茲諸生之承教荷恩者已多其功益顯望益重我校友會據規照例卜天長節吉辰備禮于堂以表彰君之功績夫教育者國家百年之大計而其方固非一朝夕所究明也不見夫耕者乎耕之深然後所收穀必豐不見夫築者乎築之堅然後所置礎必安而農之於田致力不久則所耕不得深工之於土致力不久則所築不得堅故見堅與深之功唯在致力之久而已矣土田其然誰謂教育之事獨不然耶竊觀世之教人者其學不爲不博其志不爲不高然其視學校如逆旅朝而來莫而去一以躬之故決其進退者不可勝數宜矣其於所以教之之方不遑精究也夫所究不精則所發明不卓欲用之育天下之英才畫百年之長計此易異於不深其耕而望穀之豐不堅其築而期礎之安乎哉若吾藤原君則不然其居職也一以其志與學而致致力於究明十年如一日此不獨吾校之幸抑亦所資以靖獻國家洵非鮮可謂有功于勳者矣是吾曹所以爲行表彰之禮也爰謹列燕言且祝君之健康因以泥金畫漆淺方盆十事爲贈以表微誠

山口縣立萩中學校校友會長 村上 俊江
明治四十四年十一月三日

松陰先生追慕式

十一月二十一日、午前十一時より、例に依り、講堂にて、松陰先生追慕式を舉行す。式場正面に、松陰先生の肖像を飾り、左側机には、先生の著書數部を陳列し、後方壁間には、先生遺墨の摺物數幅を掲げ、先生を想起するの料となし、一同敬拜の後、松本教諭の講演あり、終りて、安藤教諭は、先生の著

山口縣立萩中學校校友會長 村上 俊江

書遺墨につき、簡短なる説明を與へられて、式を終へ、午後零時三十分より、松陰神社に參拜せり。松本先生講演の要旨は、先生の原稿を請受け、講演欄に收め置きたれば、諸君の熟讀玩味せられんとを請ふ。

會員訃報

一月二十一日、會員一年級佐々木道君病氣の爲死亡せらる。五月二十九日午前七時、元本校教員にして、本會特別會員なりし細川安助先生、腦溢血の爲死去せられたる由、同三十日、訃報到る。痛悼に堪へざるなり。

書道部記事

我書道部にては、例に依り、本校開校記念日たる十月十八日をトして、選書展覽會を開けり。この選書展覽會は、左の規定によりて、生徒各人の書を徴し、その内賞品を與ふべきもの、及び賞を與へざれども、有望と認めらるゝものを選抜して陳列し、公衆の縦覽に供したるなり。「規定」○生徒各一人必ず一點を出すべきこと。○紙は第三學年以上は、唐紙半切縦

同

校書記伊藤義光君以財務守其職十年于茲其執事也直而敏而公精而明惟敏矣故期會之所屬君善堪之弗敢或違惟公矣故秩序之所規制君善遵之弗敢或愆惟明矣故簿錄之所相牽連君善理之弗敢或紊是以歲時縣官之來檢其簿其務當爲縣內第一嗚呼若君可謂篤于職者矣世之大小吏儉其行直者則有之矣然多失於迂鈍不及事其心和者則有之矣然多失於酌情枉法姑息一時其應精者則有之矣然多失於事端紛雜不能明示其顛末至其當理材之事者是失之多爲最甚也由是觀之則有所自安則篤篤則久孔子亦曰會計當而已矣願君之篤于是職十年之久學學如一日則其平生所愛可知已豈容弗表彰之手哉爰方佳辰大會校友于堂謹述君之功績祝君之健康因以泥金畫漆淺方盆十事爲贈以輪微誠

山口縣立萩中學校校友會長 村上 俊江
明治四十四年十一月三日

に書す。第二學年は、唐紙四分の一同上。第一學年は美濃紙同上。

○會場は普通三箇處(南部教室)を用ゐる。○展覽時間は、十月十七日、午後第一時より四時まで、十月十八日、午前第十時より午後第四時までとす、○賞を受くべきものは、第一等六名、第二等三十六名、第三等七十四名とす。生徒の筆跡の外に、古今名士の遺墨を陳列せしは、我等學生のため、又一般縦覽人のために益する所大なりき。陳列品左の如し。

○石川丈山の草書、唐の杜審言が早春の詩一聯淑氣催黃鳥晴光轉綠蘋の句○賴杏坪の行書大字耿介拔俗之標瀟灑出塵之想の語○長三洲の行書宋の樂雷發が烏々の歌(以上校醫有福氏所藏)○漢の未央宮東閣の瓦にて作れりといふ古硯(校友篠田直武君所藏)○舊長藩明倫館の策問文四通同館諸生の即題宿題文稿三冊同館用の墨(以上秋町綿貫謙輔氏所藏)○釋無幻の楷行草篆隸及び章草諸體を書き分けたる法帖(本校安藤教諭所藏)○學生必須漢字構成異同辨一卷六書略說書訓十則卷菱湖の書法一斑(以上本校安藤教諭

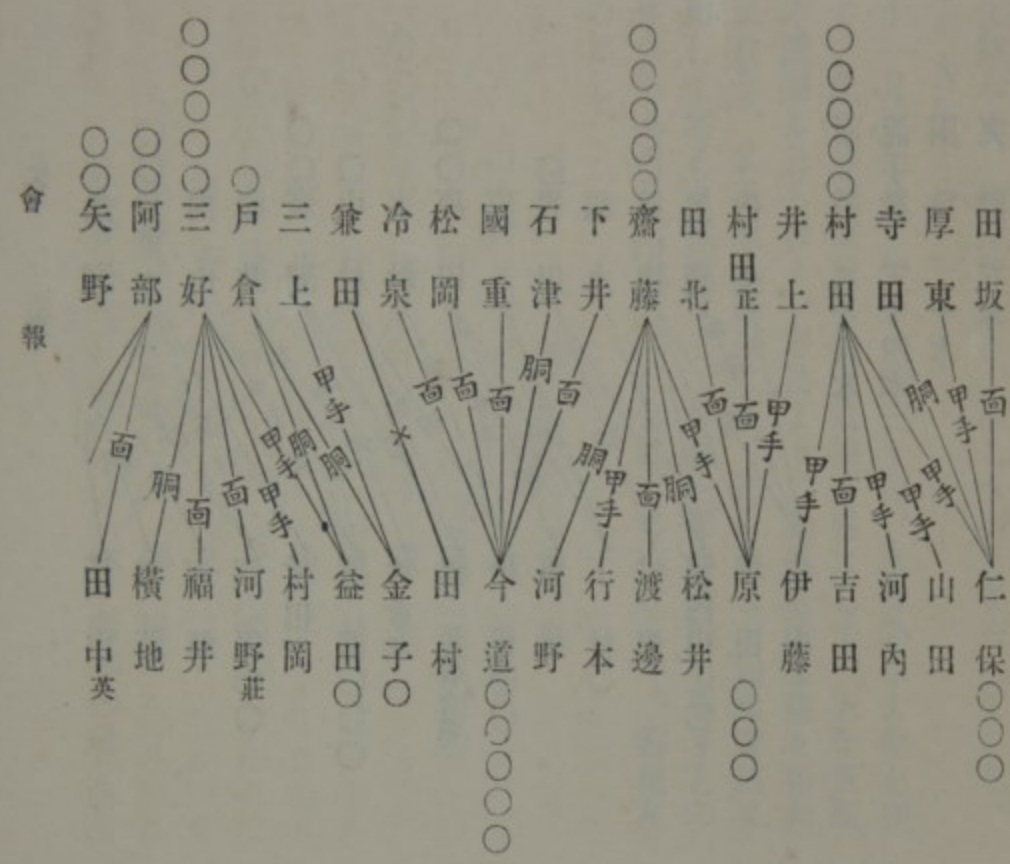
編述) ○明治維新志士の遺墨帖(萩圖書館所藏)此の如く有志諸氏の本部の爲に、種々有益品を貸與することを惜まれざりしは、深く感謝すべき所なり。又綿貫謙輔氏は、本書道部に對して、顔真卿多寶塔碑帖を贈與せられたり。氏は嘗て、本校の前身たる山口中學校萩分校の主幹として、子弟の教育に盡力せられ、本校とは縁故淺からざる人なり。爰に記して君の好意を謝す。尙當日の状況を記せば、會場の前の廊下には、美しく萬國旗を飾り、第一年生の手に成りし一大綠門、巍然として其前に立ち、笑を湛へて來觀者を歓迎するもの、如し。會場は、本部の委員交代に、これを監督すること、定められたり、縦覽の第一日たる十七日は、朝來雨天なりしかば、來觀者極めて僅少にして、稍々遺憾なりしも、翌十八日は、好天氣にして且つ本校陸上大運動會の當日なりしかば、來觀者頗る多く、陸續として絶えざりき。

(S.O.生)

書道部記事

十月十八日、我書道部は、書道部と共に、展覺會を

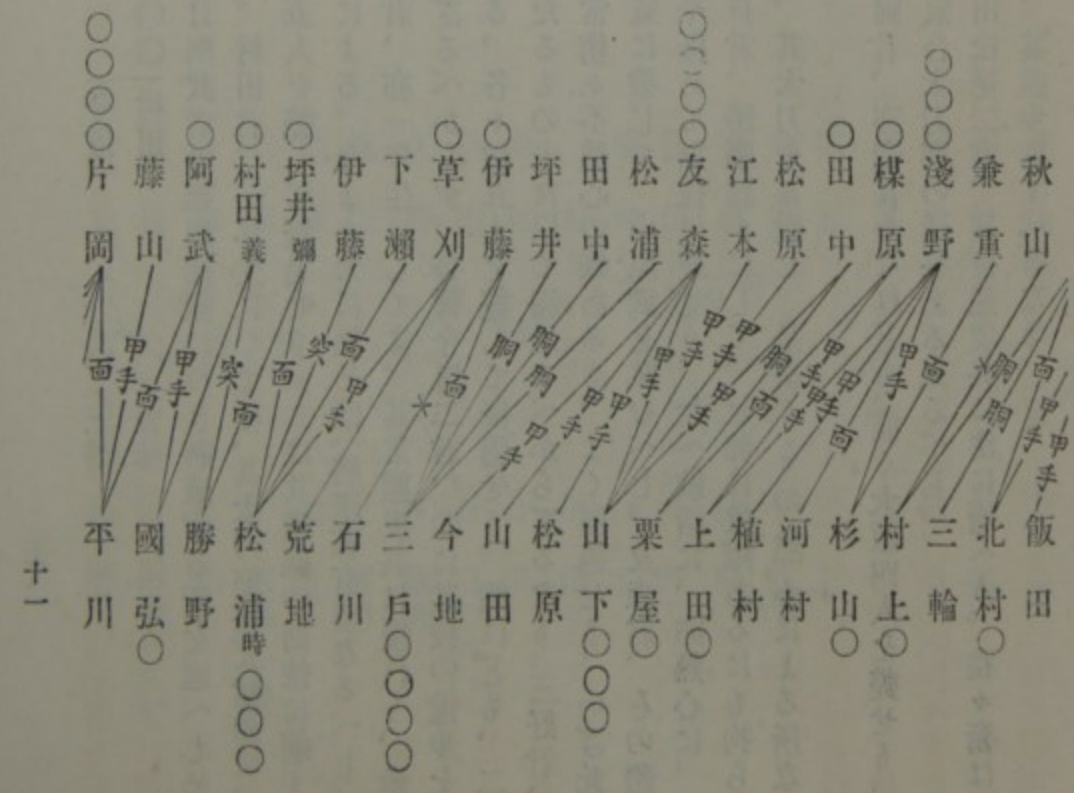
は此に在りとぞ感ぜられける。其番組左の如し。

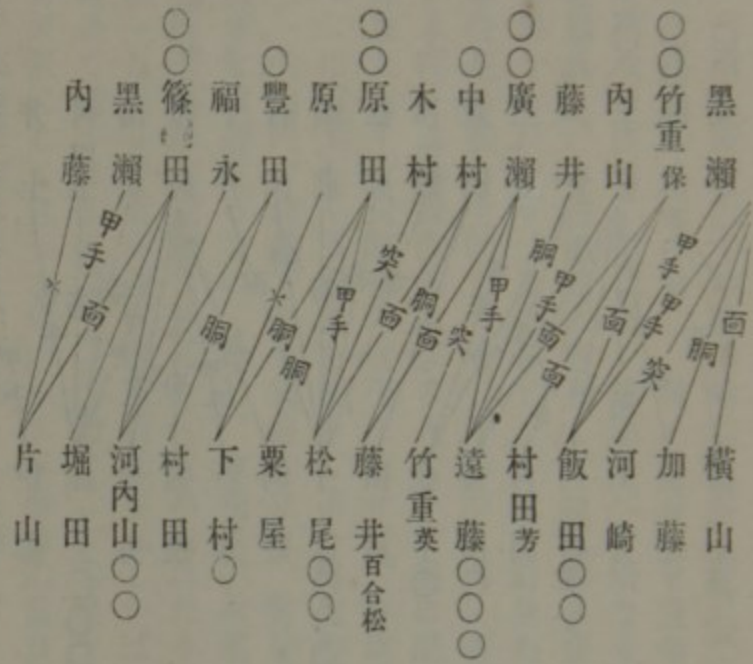


開催せり。前日は、午後より、一般の觀覽を許しし、降雨の爲、來觀者僅少なりしは遺憾なりき。翌日は、觀者織るが如く、或はその淡麗を稱し、或はその織美を叫ぶ、特に、校醫有福氏所藏の景文筆前赤壁圖、及び文晁筆童子掃門圖、椿村磯部氏所藏十二善神圖、田總教諭所藏寬齋筆山水幅等の参考品は、觀者を益すること少からざりしが如し。加之、田總教諭の筆になれたる觀音像及び絹本二枚の花弁は、共に人目を引きたり。又生徒の出品數の、去年より増加し、その作の優秀なるもの多きを見るを得たるは、實に斯道のために慶賀すべきなり。(H.i)

劍道部記事

五月二十日、午後一時より、本部春季大會を開きたり。會長以下諸先生の臨場ありて、觀衆の多き、殆ど場に滿ち、演武者の百名を超えたる、開校以來の大盛況といふべし。板垣教師の審判の下に試合は始れり。道場は只エーヤーの聲と竹刀の音とのみ響き渡りて、その嚴肅なる、かほどに多き觀衆も何處に在るかと思はるゝばかりにて、げにも武士道の精華



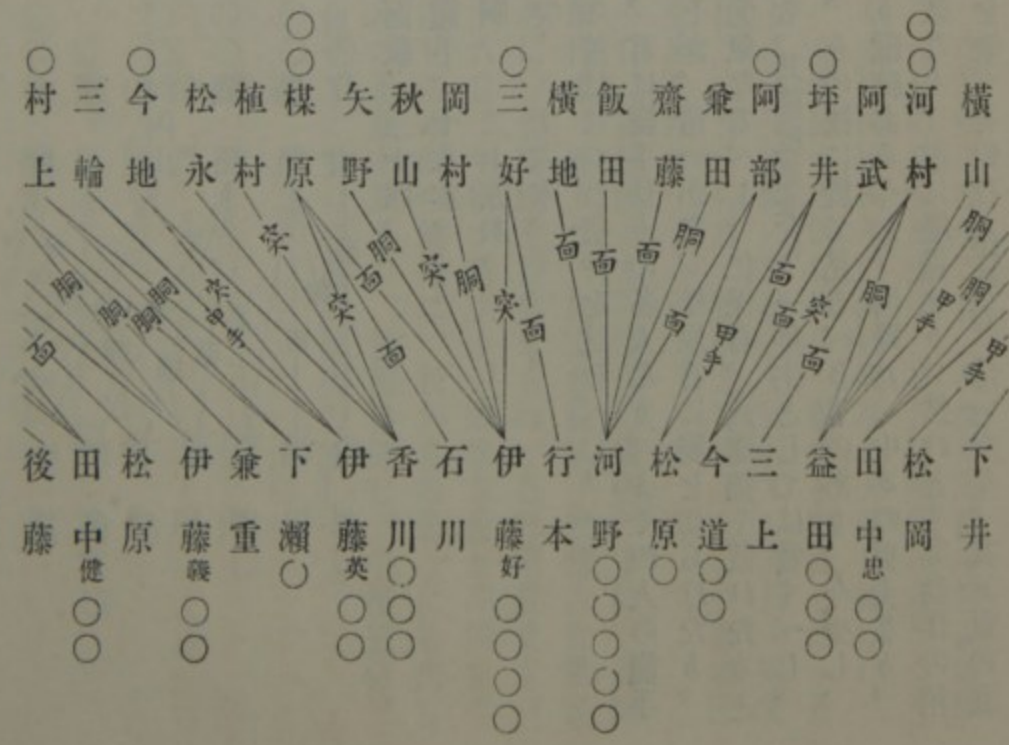


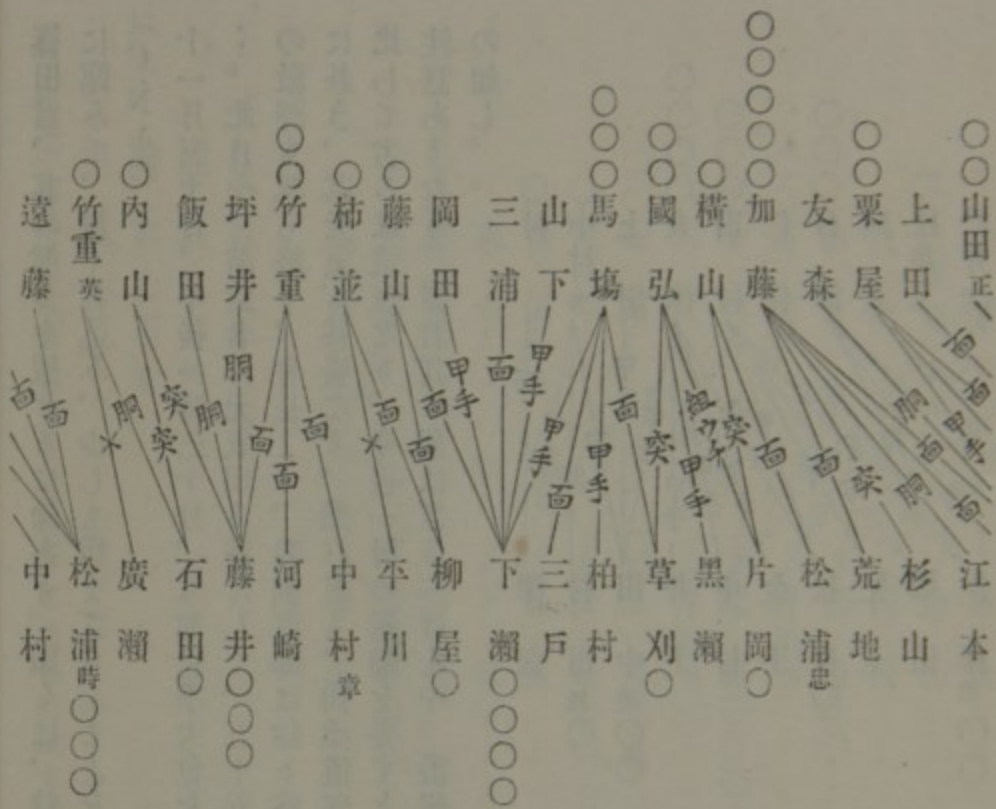
面數 二十八本
 籠手數 三十四本
 胴數 二十本
 突數 五本

右番組中優秀なる者に三本勝負をなさしめたり、

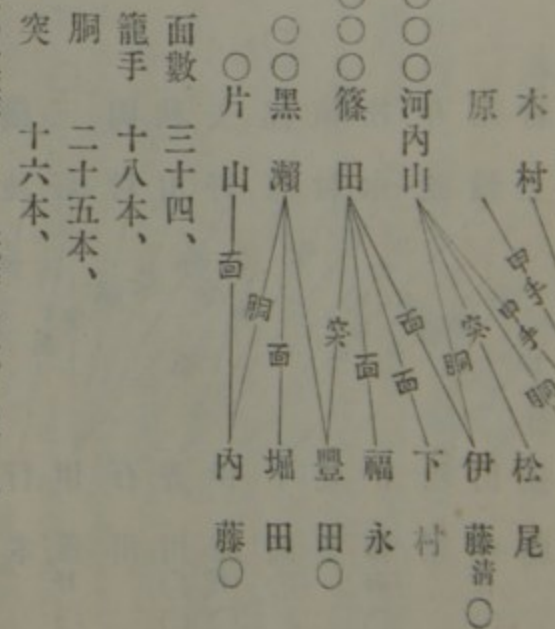
(今道) 三好 齋藤
 當日演武者の態度技倆につき聊感ずる所を述べしめよ。村田君、一年生にしては、其太刀筋甚だ猛烈に、敵五人を斃して優退せり、こは其體軀の斯技に適するによる。今より大に勉めば、將來甚有望なるべし。原君、亦一年生にしては、其業態度共に優れり、奮はざるべからず。齋藤今道二君、共に其技の進歩を見る、各々敵五人を斃して優退せり。然れども、二君たるもの未だ以て満足すべからざるなり。三好君、平常稍々不熱心の嫌あるも、よく優退せり。いよ此元氣に乗じて、中原武を試むべし。友森君、その體格や極めて斯技に適せり。奮へ敏活に、亦熱心に。三好君、體軀矮小にして、足部に故障あるにも拘らず、其太刀や甚鋭し、是全くその熱心による所なり。

篠田君、其の進歩や感ずるに餘あり。願くは、試合に臨みて、鋭く打込み、少しも緩まざらんことを。
 (C.N.生)
 十一月三十日、午後一時三十分、本部秋季大會を開く。此日や、演武者の元氣頗る盛にして、五十五組の激闘も忽ち終り、會長より、我劍道部は益々盛大に赴き、其元氣も甚盛なり。然れども、尙柔道部に比して劣るは遺憾なり。今後一層の奮勵を要すとの注意ありたり。諸君其れ奮はざるべけんや。番組左の如し。





右勝負の模様につき概評を試むべし。
 大津君、君は籠手切りの名人なり。よく四人の籠手を取りしが、惜いかな、松原君に胸を切られたり。今少し元氣なるべし。仁保君、武運拙く敗れたりといへども、其態度業共に、一年生としては賞すべし。益田君、その技に於て見るべきものあり、今少し、平常より鍛練あるべし。河野君、中々の勇士なり。向ふ所敵なく、遂に優退せり。然れども其動作の少々敏活を缺くを恨む。伊藤君、惜いかな、其元氣の衰

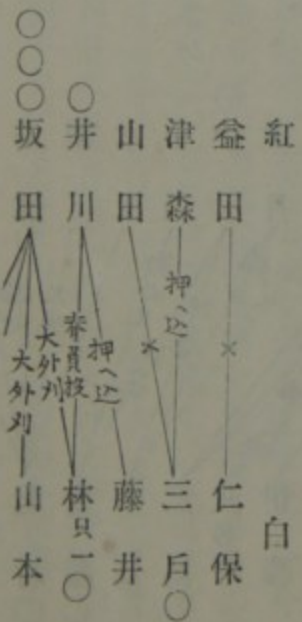


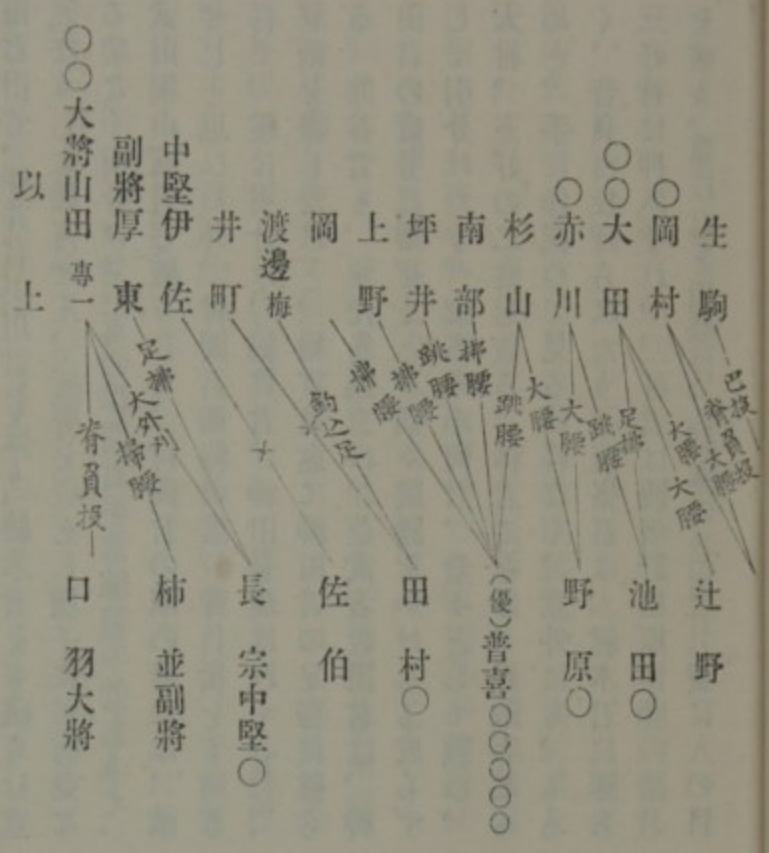
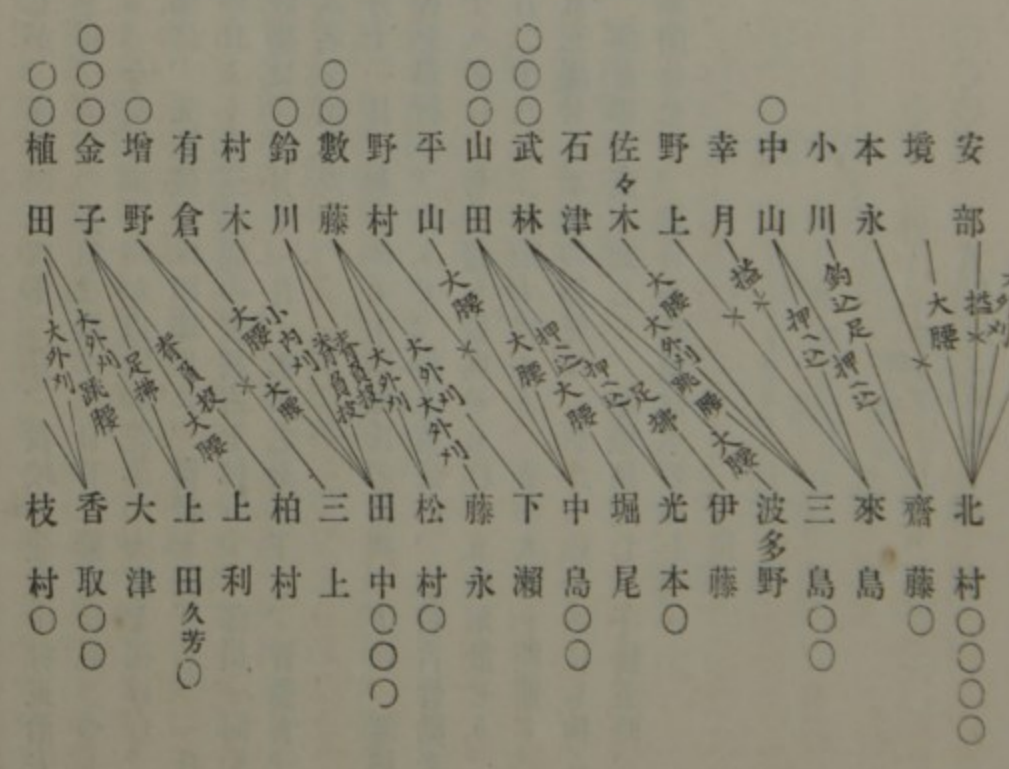
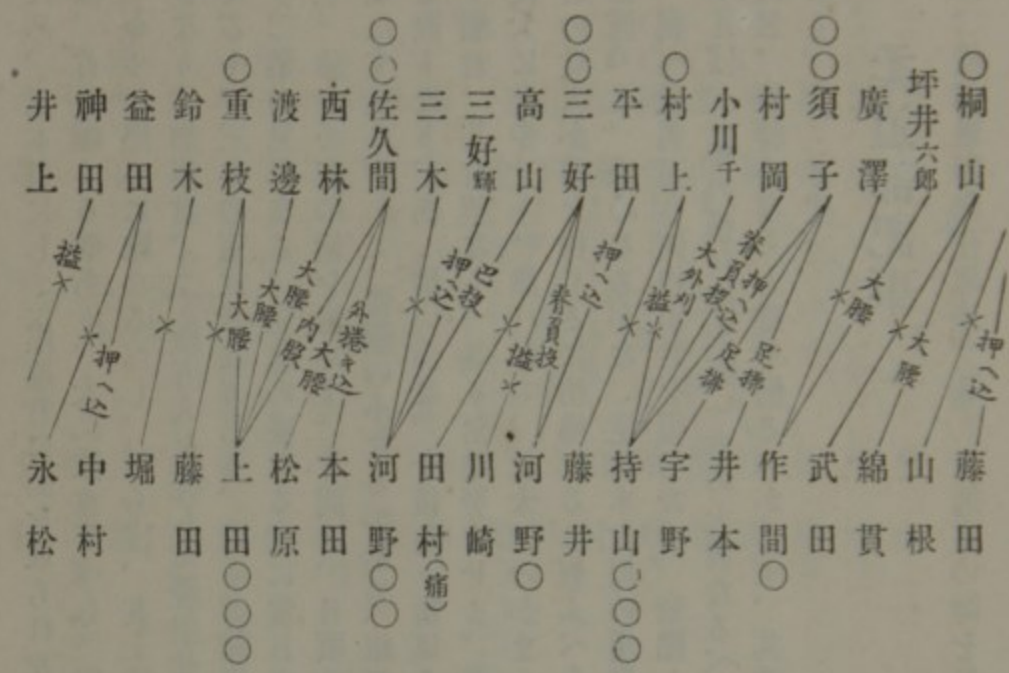
へしたため、五本目にして、榎原君に面を取られたり。君には、首を傾くる癖あり、大に注意すべし。田中健君、今少し熱心に勵まるべし、然らば、其上達期すべきなり、加藤君、よく敵五人を斃して優退せり。其敵たるや、三年の荒武者なりしも、而も其態度の落付き、業の見事なる、元氣の盛なる實に當日の花なりき。勝つて兜の緒を締めよ。片岡君、日頃の熱精を現はす能はずして、體軀の小なるが爲め、組打にて敗を取りたり、あゝ惜いかな。今後益々奮はるべし。下瀬君、甚有望なり。益々奮勵努力せよ。藤井君、技大に進歩せり。然れども、其太刀のかまへ方の、古の貴人が笏を持てるに彷彿たるは厭ふべきなり。松浦時君、感心なるかな、遠藤木村原の勇將を斃し、剩へ驍名高き河内山君を惱したり。奮勵して已まずんば、二年の後には天晴一方の大將たるべし。河内山君、軀幹小なりと雖も侮るべからず、其業亦敏活なり。(C.N.生)

柔道部記事

本部は、横田教師轉任以來、久しく適當の師を得ざ

りしが、明治四十四年二月、我校の先輩中村正治先生を得、部員の意氣又振ひ、日日に隆盛に赴きつゝあり。今左に四十四年以降の記事の大略を掲げむ。本部は、先輩佐々木四郎氏に、監督を囑托し、一月十四日より、三週間の寒稽古を執行す。部員一同元氣旺盛に、二月十一日、無事之を終了し、皆勤者三十八名を出したり。
 二月十一日、初段佐々木四郎氏の審判の下に、進級試合を舉行す。終りて、村上會長は、寒稽古皆勤者三十八名に、皆勤證を授與せられ、五時解散せり。五月二十八日、午前十時より、春季大會を開催す。元氣充溢せる本部の健兒は、折からの暑さにも拘らず、渾身の勇氣を鼓して、奮戦格闘し、午後五時、無事閉會せり。當日の勝負は次の如し。





演武者、一般に元氣盛なりしは賞すべけれど、禮儀を粗略せし觀ありしは惜むべし。武道は禮を本とす。禮儀なき武道試合は、その本體を缺くものなり。本體を失する試合は眞の試合に非ざるなり。諸君よ。願くは、今少し禮儀に注意せられんことを。又總じ

て、試合に懼るゝの傾向あり。これ勿論未だ試合に慣れざるの結果ならむも、亦一つには、あまりに重きを勝負の上に置き過ぎし結果ならむ。宜しく、正々堂々、武道は武道としてこれを學ぶべし。決して卑屈野鄙に陥るべからず。諸君、今少し、各個につき批評を試みることを許せ。

普喜嘉重君、君は、跳腰拂腰共によくその要領を得たり。たゞ君が技の未だ敏ならざるを恨むのみ。奮勵一番せよ。

金子生一君、君の技、今日しかと拜見せり。勉めて已まずんば、當に妙境に入るべし。尙一層の勉勵を請ふ。北村健一君、君よく大敵を破る。實に痛快と謂ふべし。惜むらくは、稍々滑稽を弄する傾あり。武道は宜しく眞面目なるべし。

坂田義亮君、君は將來有望の士なり。君今にしてこれを廢せば、君は我柔道部を無視するものなり。如何となれば、君は技敏に體強く、本部將來の盛運に關係することあるべければなり。(M.S.生)

十一月廿六日(日曜) 秋季大會を舉行す。日頃鍛へし手腕を見するは此の時ぞと、勇みに勇む健兒の意

氣、將に天を衝かんとする慨ありき。村上會長、中村部長、その他諸先生の臨席ありて、九時半より開會す。拍手の聲に迎へられて、紅軍よりは田總君、白軍よりは笠井君出て、互に攻め、且つ防ぎ、遂に引分となれるに始まり、數組の勝負ありて、紅軍の倉田君出て、坪井君中川君を破り、綾木君をも破らむ意氣なりしも如何せん、疲勞を覺えし様子にて有効なる業なく引分け。白軍の作間君平常練習の効ありて、武田桐山兩君を破りしも、村岡君の剛の者には、敵せじと思ひの外、村岡君獨特の業。背負投をも防ぎ得て、遂に引分け、綿貫君、神田君現はれて、互に、秘術を盡したれど、綿貫君遂に神田君の足掃に破らる。熊谷君も、また卷込まれ、荒武者坂田君は、神田君の疲勞に乗せんと、偶々跳腰をかけしも成らずして引分けたり。紅軍の小河君、堂々として戦ひ、大村、三好の二君を破る。林君こそは、好敵手ならめと、手に汗握つて見る間程なく、意外にも、もろく、背負ひ投げられたり。五峯君は、村木君に勝ち三好君に押込まれ、三好君は波多野松原伊藤の諸君を破り、重枝君と引分け。紅軍の益田君、實に人の目

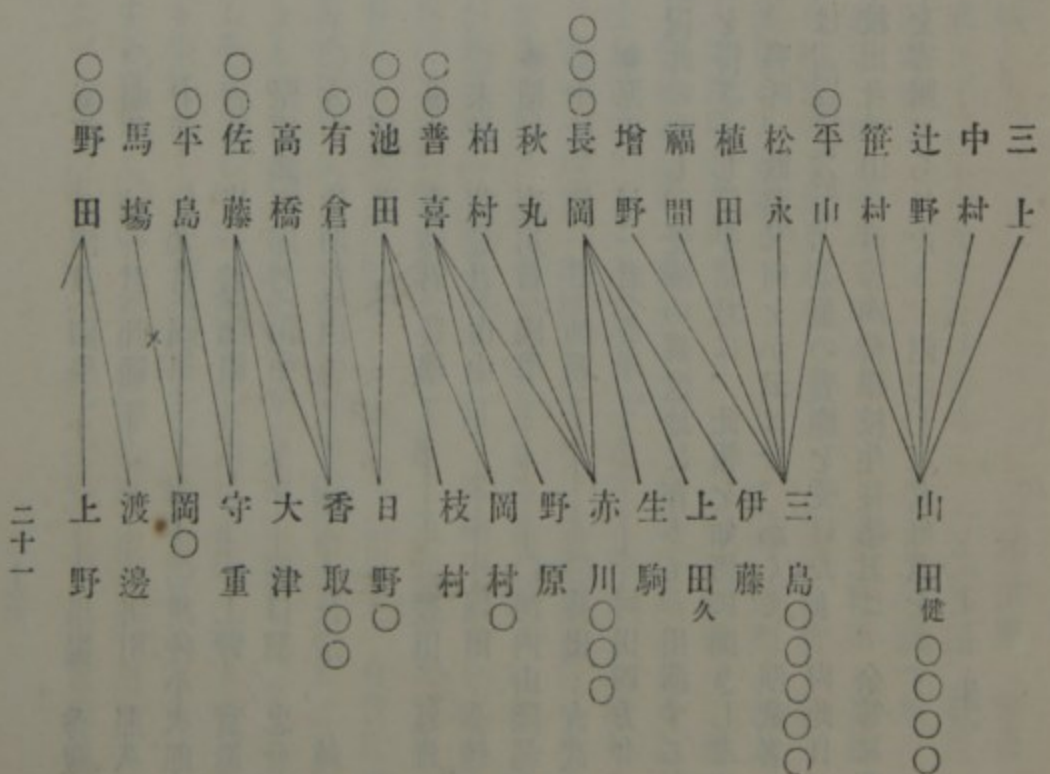
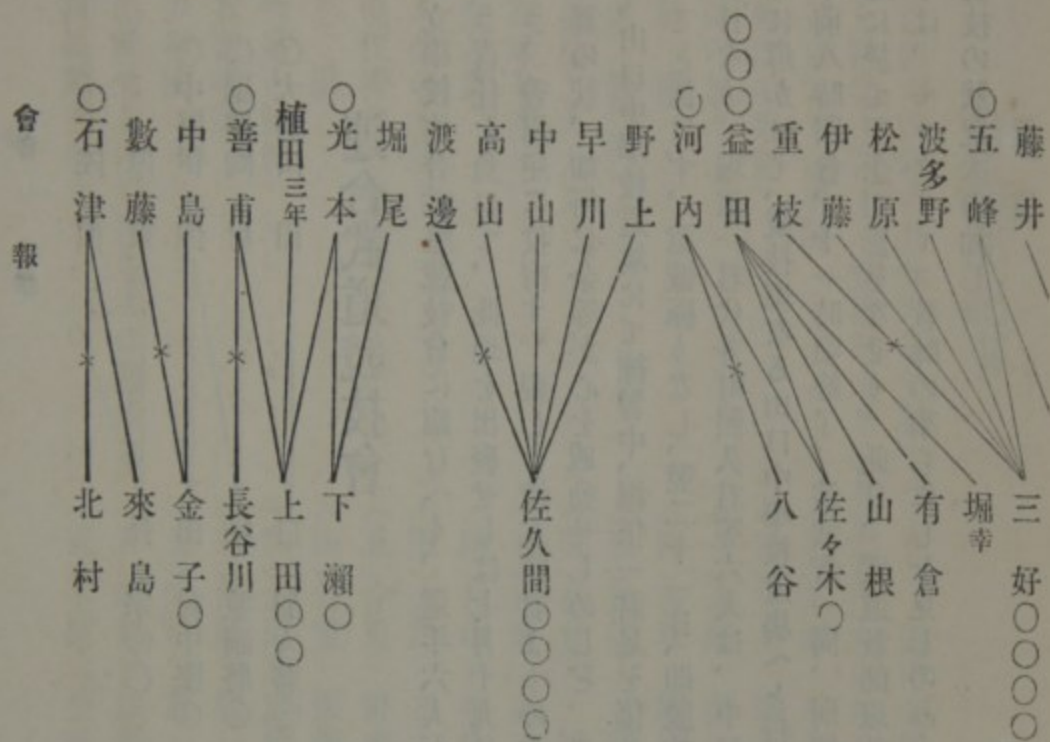
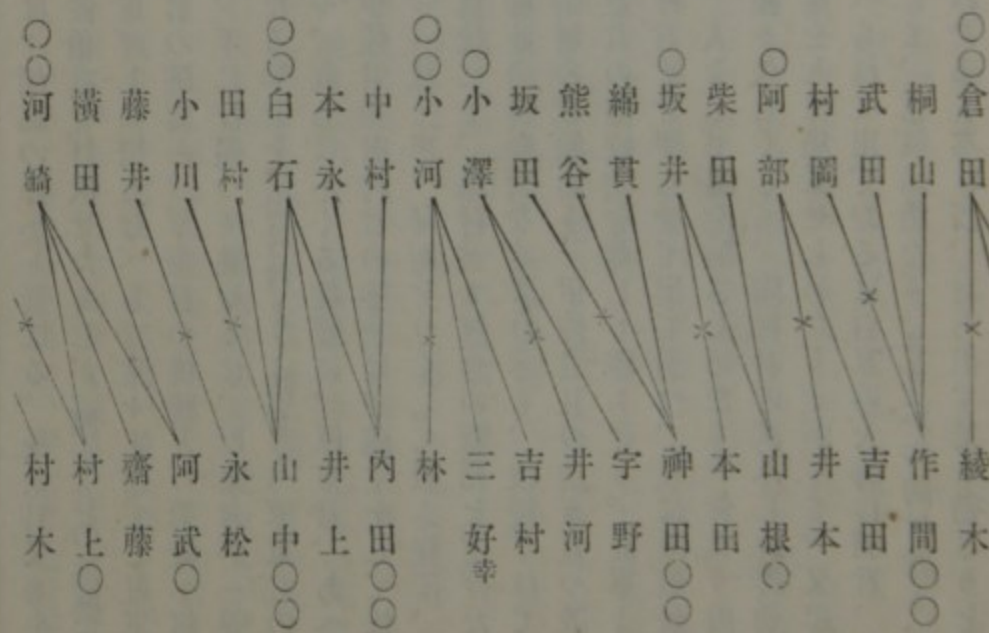
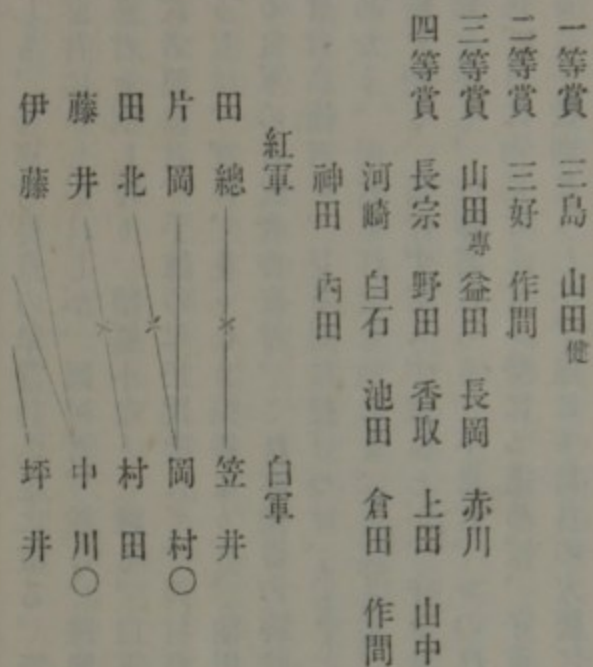
破り得しも、普喜君得意の早業釣込足に破る。野原君亦普喜君にひしがれしが、岡村君、遂に、跳腰にて、普喜君を倒したり。體軀小なりと雖も、白軍好箇の若武者池田君、手練の早業跳腰にて、岡村君を破りたりしは、實に、花々しき振舞なりき、池田君に對する紅軍の若武者香取君、これ亦獨得の跳腰にて、有倉君高橋君を、見る間に投げつけ、人をして、驚かしめたり。兩君それ之を勉めよ。佐藤守重兩君、互に秘術を盡し、負けず劣らず戦ひしが、守重君の大外掛効を奏し、佐藤君破らる。平島君、おのれ佐藤君の仇、目に物見せんでふ勢にて進めば、守重君憤戦すること數刻なりしが、遂に平島君の大腰にかかつて倒る。岡君、勇める平島君をも物ともせず、内股かけて打ち伏す。馬場君は、力も體も共に備る、新進の若武者たれば、さすがの岡君ももてあまして引分け。野田君對渡邊君は、何れ劣らぬ好箇の取組みなりしが、勝は野田君に歸したり。生駒君と並び稱せらるる冒險業の上野君も、野田君の背負投げに敗る、沈着剛毅なる長宗君の大腰野田君を破れば佐伯君代る。何れ劣らぬ體軀にて、互に秘術を盡して

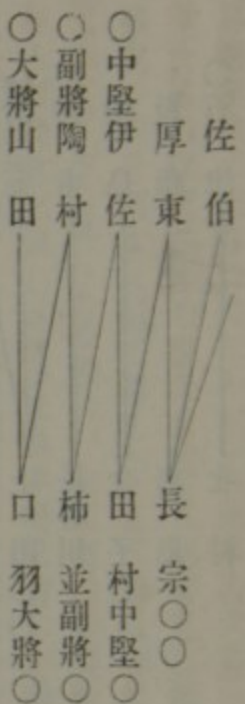
を驚かし、堀幸君を、大腰にて打ち倒し、有倉君山根君とも奮戦し、打ち勝ちたれども稍々疲れたる様子にて、遂に、佐々木君の卷込みに破れたり。白軍の作間君、劈頭第一、大敵野上君を倒し、早川中山兩君を破り、高山君亦跳腰にて倒されたり。渡邊君と對するや、さすがの作間君、元氣漸く衰へて見え、遂に引分となる。白軍の北村君、平素練習の熱心なるに似ず、今日、石津君と引分となりしは如何。尙、禮節は、君の一層注意せざる可らざる所なるべし。白軍の硬將軍山田君、奮戦激闘し、三上、中村、辻野、笹村の諸君を破りしが、平山君と對するに至り、如何なるはづみにか、もろくも破れたるは惜むべし。次いで三島君出て、平山君を背負ひ投げ、松永君を破り、勇氣數倍す。植田君も亦其獨得の跳腰に破らる。此の度こそは、味方の爲めに斃れて後止まんと勇み出でたる福岡、増野兩君必死と戦ひしが、その甲斐なく、遂に無慘の最後を遂げて、三島君は優退の名譽を得たり。次に、長岡君、意氣揚々と、伊藤上田君を倒し、連りて生駒君を破りしが、遂に赤川君に破られたり。得意の赤川君、秋丸、柏村兩君は

戦ふ様は、胡蝶の舞かと疑はる。長宗君又もや、大腰もて佐伯君を打伏せたりしが、厚東君の跳腰にて、最後を遂げしは惜しむべし。堂々と出でし紅軍の中堅田村君の跳腰と、厚東君の跳腰との業較べ何れ勝たんと、手に汗握つて眺むるに、厚東君が一聲呼びてかけたる早業を、田村君よく防ぎて、厚東君の足をかへすや、直ちにかくる跳腰に、厚東君、あへなく敗る。伊佐君對田村君の勝負は、満堂をして快と呼びしめ、一往一來、秘術をつくして戦ふ程に、伊佐君の背負投にて、田村君も無念の戦死を遂げたり。白軍の柿並君體軀大ならざれども、技優ぐれて、さすがに副將の威嚴あり。伊佐君且つ防ぎ且つ戦ひしが、柿並君の襟絞効を奏して勝ちけり。紅軍よりも副將陶村君身を躍らせて出て對ひ、互に激戦奮闘する状は、人をして目を醒さしめたり。骨鳴り肉躍るの活劇稍々久しくして、陶村君の試みし跳腰効を奏し、満堂をして喝采せしめたり。かくて、又起る拍手に迎へられて出てたるは白軍の大將口羽君、體軀長大にして、意氣昂然たり。さすがの陶村君も、今は稍々疲れたるとなれば、討ち出す業も効なきを如何

せん。見事跳腰にて破られぬ。やがて、兩軍の大將一禮して立上れば、満堂拍手の響大に起る。兩將互に組合ふや、龍虎の勇を競ふに似て勇しかりき。皆人勝は何れに歸すべきかと見てある程に、山田君の背負投げ勇ましく、口羽君を倒しければ、拍手喝采暫しが程は鳴りも止まざりき。村上會長の訓話、中村部長の批評、賞品授與あつて、午後四時半終了せり。(H.N.生)

當日の優勝者並に取組み左の如し。





連合武道競技會

縣立學校連合武道競技會に臨むべく、選手六人が、重き責任を負ひて、此地を出發せしは七月十九日なりき、香川屋に投宿す。親しき校友諸君よりの激勵鼓舞の狀、如何に余等が心を感動せしめしぞ、二十日、山口中學校道場にて練習中、堀信一君足を傷め立つこと能はず、遺憾極りなし、翌二十一日、即競技會當日なり。堀信一君代井町照久君等六人は、中村教師に導かれて、競技場なる山口中學校道場へと行く。午前八時開會、十一時頃終了。演武者一同、同校々庭に於て記念撮影をなせり。此日、武道教師以外には、モンクローフ教師の來られしを見しのみ。其競技の狀況次の如し。

柔道

- 磯部 清君(國學) — x — 馬場 秀藏
- 福住 禎一君(師範) — 井町 照久
- 中寺 兼次君(國學) — 伊佐小次郎
- 吉崎 岩一君(師範) — 上野 實造
- 堅田鴻四郎君(山中) — 口羽 忠介
- 大中 儉助君(山中) — 長宗 純

劍道

- 藤中 嘉祐君(農學) — 豐田 延雄
 - 末村 英雄君(山中) — 堀田 恭輔
 - 植村 慶川君(國學) — 河内山隆輔
 - 中松 修一君(師範) — 篠田 直武
 - 原田 早一君(農學) — 村田四方介
- 狀況此の如し、受験の爲遠地に在りて、出演することを得ざりし選手諸君は、此報を如何に聞きしならむ。嗚呼、敗將又何をか云はむ。かくて、演武者一同は、同校に於て、茶菓の饗應を受けたり。尙此日、本校出身の山口高等商業學校生徒諸君は、余等に菓子を寄贈せられたり。附記して其好意を謝す。

(J・n・生)

辯論部記事

明治四十四年六月廿六日午前十時より、第拾九回例會を講堂に開く。登壇辯士及び其演題は左の如し。

- 智恵よりは勇氣 (三) 下瀬 一郎
- 西洋の東郷 (四) 三上 孝之
- 師の恩 (一) 清瀬 勘一
- 氣節 (四) 香取 敬造
- 忍 耐(英) (五) 長宗 純
- 自然と人力 (五) 有倉 誠
- 和船を漕げ (五) 辻野 喜一
- 文と武 (四) 片山 平作
- 人生の本務 (五) 大津 正一
- 現代青年の覺悟 (五) 守重 哲成
- 忍 耐 (四) 竹重 保衛
- 物質と精神 (四) 上岡讓熙雄
- 英語暗誦 (二) 山崎 起一
- 少年國 (五) 陶村 政一
- 愚視せられて怒る者は愚者也 (五) 南部 法電
- 防長勤王史 (五) 平島 公平

熱と才

- 磨かざば玉の光は添はざらん (五) 伊藤 義彦
- 田舎論 (五) 吉田 耕造
- 残花一輪を讀んで感あり (四) 植田 瑞穂
- 短艇部の不振を悲む (四) 柏村 稔三
- 僥倖心と冒險心 (四) 福岡 義雄
- 人間到處有青山 (五) 福田 忍

松本部長の開會の辭に次いで、演壇は熱心なるわが辯士を送迎すること實に二十有三名の多きに達したり。就中、長宗、山崎の二氏は、英語部に於ける蓼々たる曉星として光を放てるもの也、吾人は校友諸子が外國語に於ける興味の一回減少するを嘆ずると共に二氏が勞を多とする者也、只夫れ二氏共に其練習に於て未だ遺憾なしといふべからず。有倉氏は其着想に於て、大津氏は論旨の穩健なるに於て見るべきものあり。片山氏は蓋し老練の士か、「文と武」てふ平凡にして寧ろ陳腐なる題目を捉へ來りて言々句々生氣あり、能く聴衆をして傾聽せしめたるは多とするに足る。但し其の修辭の點に於て、更に大に養ふべきものあるを記せざるべからず。守重氏は其

素質に於て發展の未來を有するもの、努めて止まらずんば堂に上るの日、蓋し遠きに非ざるべきか。陶村氏に於ては吾人は其着想をとるもの也。南部、黒瀬二氏は共にわが部に於ける辯士の錚々たる者、但し南部氏は情の人にして、黒瀬氏は理智の人なるが如し。前者は明快の辯をもて説くところ趣味津々、例へば清泉の湧くに似たるも、理路の整然たらざるものあるは惜むべし。後者は流暢の辯もて論ずるところ論理整然たるも、例へば平野を行くが如く、單調に失するものあるは憾みなしとせざる也。最後に立てるは福田氏也。其論ずるところ氏が得意の()國家的殖民論也。論旨概ね肯綮にあたる。倦怠の氣漸く堂に満ちたる時に當りて、更に聽衆をして傾聽せしめたるは、さすがにわが部一方の雄たるを失はず。部長再び壇に上りて講評あり。閉會を宣せしは正に五時三十分、當日。受賞者左の如し。

- 二等 片山 平作
- 三等 黒瀬 知一 長宗 純 大津 正一
- 福田 忍 上岡讓熙 下瀬 一郎
- 有倉 誠

第廿回例會は十二月二日(土)午後一時より講堂に開かる。

- | | | |
|------------|----------|----|
| 開會の辭 | 部 | 長 |
| 洛西の一奇才高杉晋作 | (三) 杉山 | 顯正 |
| 膨脹國民の抱負 | (五) 守重 | 哲成 |
| 細事に注意せよ(英) | (二) 岩武 | 了 |
| 偶感 | (四) 竹重 | 保衛 |
| 常識と非常識 | (五) 廣瀬 | 五郎 |
| 歐亞戰爭 | (四) 上岡讓熙 | 瑞穂 |
| 芋蟲論 | (四) 植田 | 瑞穂 |
| 偉人と地勢氣候 | (三) 下瀬 | 一郎 |
| 眞の朋友 | (四) 森重 | 幡雄 |
| 馬車馬 | (五) 有倉 | 誠 |
| 風雲兒 | (四) 枝村 | 英介 |
| 硬骨將軍張勳 | (五) 原 | 禎造 |
| 豐徳二公を論ず | (三) 藤井 | 武 |
| 殖民論 | (四) 柏村 | 稔三 |
| 海事思想 | (五) 吉田 | 耕造 |
| 事物は心膽の現也 | (四) 片山 | 平作 |
| やせがまん | (四) 福岡 | 義雄 |

賞品授與

會部部長

例によりて部長開會を宣するや、先づ壇に立てるは杉山氏也。洛西の一奇才と題して高杉晋作を語る。態度の悠々として迫らざる、辯舌の流暢なる、處女演説としては蓋し成功せるにちかしと謂つべし。守重氏のいさゝか朗讀的に傾きたるは惜しむべく、岩武氏が外國語に於ける唯一の辯士として登壇せるは吾人の大に多とする所なると共に、吾人は又たわが部に於ける外國語の萎微振はざるを悲しまざるを得ず。岩武氏は今漸く二學年、而も其發音に於て侮るべからざるものあり。努めて止まらずんば進境見るべきものあるを疑はず。竹重氏の態度はいかにするも吾人の賛同しえざる所也。『偶感』と題してとりとめもなき空想を語る。辯論は當に舌の練習のみに非ざるは、吾人を俟て始めて知るべきに非ざる也。吾人は君の爲めに先人の言を呈して反省の料とせん。可ならんか。

"Many people talk, not because they have any thing to say, but the mere love of talking. Talking

should be an exercise of the brain, rather than of the tongue. Talkativeness, the love of talking for talking's sake, is almost fatal to success."

廣瀬氏は常識の要を説き、上岡氏は歐亞戰爭てふ題下に東洋人の奮勵を促す。植田氏は由來慷慨の士也先きに『殘花一輪』を讀みて著者市川少尉に滿腔の同情を表し、今また芋蟲論と題して現代青年が徒らに豪傑の形式を模して其精神を學ばず、さながら芋蟲の蠶に似て非なるが如しと説く。下瀬氏は偉人と地勢氣候との關係を述べ、森重氏は眞友の何たるかを説くこと縷々數千言、有倉氏は成功の秘訣は馬車馬的奮闘にありとし、勇往邁進の要を説く。其引用せるカーライルが "The drop, by continually falling, bores its passage through the hardest rock. The lusty torrent rushes over it with hideous uproar and leaves no trace behind." の言の如きは、其日其日のレッスンが直ちに氏が藥籠中のもとなりて巧に活用せられたるもの、吾人の學は當に此の如くならざるべからず。枝村氏は風雲兒高杉東行を論ぜんとせしもの、而もわが部の一奇才杉山氏に先んぜら

れたるを嘆じて壇を下る。この日氏が快辯に接する能ざりしは吾人の憾み多しとする所也。將軍張動のために萬丈の氣焰を揚げしものを原氏となす、氏が觀察の敏なるのみならず、其流暢の辯は例へば水の流るゝが如く、而も言々生氣あり。滿堂肅として氏の説に聽けるは蓋し氏が能辯の士たるを語るもの也。藤井氏の快辯は能く聽衆の情氣を打破するに足り、喝采時に堂を動かすの概ありしは又た氏が凡手ならざるを示して餘ありと謂ふべし。柏村氏は由來能辯の士、先きに短艇部の不振を悲しむや、徒らに情に走りて論旨穩健を缺きしが、今や『殖民論』に於て條理整然傾聽に値するものあるを見る。吉田氏は海軍思想の普及を要とし、片山氏は事物は心膽の反映なるを説きて精神修養の要を叫ぶ。共に吾人の賛同する所也。この日の最後を飾るべく壇に立てるは福岡氏也。滿場の拍手しばし鳴をしばしめざりしは氏が本部の花形なるがためか、『ヤセガマン』と題して瘦我慢の要を説き、音吐朗々抑揚巧みに述べ立つる所一段の進境を見る。其諧謔百出、解頤の妙に至ては凡手の企て及ぶべからざる所也。たゞ強ひて滑稽を弄

するが如きに至ては吾人斷じて反對せざるを得ず。蓋し九俛の功を一養に虧くとは夫れ或は氏の謂か、惜むべし。會長の賞品授與に次いで、部長再び登壇、講評あり、英語部の不振を嘆じて校友の奮勵を切望し、閉會を告げしは五時を過ぐるこゝ十五分、當日受賞者左の如し。

- 一等 原 禎造
- 二等 柏村 稔三 藤井 武
- 三等 有倉 誠 杉山 顯正 岩武 了

漕艇部記事

明治四十四年五月二十七日、吾校は、世界戦史の一頁に、帝國海軍々人が、名譽ある戦勝の武勳を飾れる日本海々戦記念日をトし、春季競漕會を流れ清き玉江川の下流に舉行しぬ。開會に先たち、村上會長一場の演説を試みらる。時を費すこと約三十分、やがて一發の號砲開會を報ず。折から初夏の天地は名残りなく晴れ渡りて、風清らかに塵もなく、油の如き水上には、先を争ふ漕手の英姿勇ましく、唼唼たる樂聲、轟然たる煙花、共に健兒の意氣を助けぬ。一回回仕

日野二郎。堀 信一。松浦時行。植田源熊。
三好一郎。

第二中隊(指月)
陶村政一。上野實造。笹村繁。河内山隆介。
郡司又一。

第三中隊(椿)
内藤千里。厚東四郎次。伊藤清忠、ト部豊。
堀尾嘉一。

合は益々佳境に入り、競争愈々激甚を極むれば、漕手が妙技は遺憾なく發揮せられ、歡興更に湧くを覺えしむ。かくて、二十有餘回のゲームを終れば、來賓競漕及び待ちに待ちたる中隊選手競漕は來りぬ。いづれも粹を抜きたる選手の面々、必勝の色明かに眉宇の間に溢るゝも頼母しく、やがて、一發の發砲と共に三艘の小艇ブイを離ると見るや、各應援隊は各々色旗を揮ひて號叫し、塔の如き觀衆は絶えず拍手の雨を降らしぬ。折しも、日は既に西の山に沈み、殘光長く、玉と飛ぶ白波に輝き、舷々相摩す。三艇の櫓の音壯絶快絶血湧き肉躍るの感あらしめたり。かくて、九分二十五秒にて常盤先着し、次で九分四十秒にて椿決勝線に入れば、九分五十四秒にて指月又相續いてこれに入り、昨秋覇を唱へし三中の選手は、運や拙かりけむ、無慘の敗辱を被り、遂に一中健兒に月桂冠を得られぬ。右終りて部長野坂先生の發聲にて萬歳を三唱し、同先生より茶菓の饗應あり松青く水清き邊、暮色蒼然たる裡に散會せり。當日各中隊選手の氏名左の如し。(E.K.生)

待ちに待ちたる本會秋季大競漕會は、遂に九月三十日、竹本橋附近にて舉行せられぬ。これよりさき、漕艇部委員と部長との間に協議の行はるゝ事前後數回にして、議未だ決せず、爲めに日を閲する事旬餘。我校五百の健兒、すこぶる脾肉の嘆に堪へざりしが、今や鍊りに鍊りたる手腕を表はす時は來れり。此の日や、天氣晴朗ならず、風起り、雨さへ降らむとする有様なり。されど我等は元氣満々たり。岩をも碎かんずる意氣ごみ、何ぞ風雨を顧みむ。九時四十五分、般々たる號砲の響くや、第一回の競漕は開かれたり。唼唼たる船聲と唼唼たる音樂と相和し、折々煙火の音の、天を崩し谷を動かして轟くあり、壯快

言はん方なし。興益々酣にして、天候益々險惡に、遂に一陣の疾風は、驟雨を伴ひ來れり。吾等健兒なほ屈せず。この沛然たる雨中に、風と戦ひて、競漕を續けし有様は、勇ましなど言ふもなかなか愚かなり。かかる事數次、天も今や吾等が意志に屈しけむ、何時しか夢の如く暗れ渡り、風さへをさまり吾等を稱揚するもの、如し。見物人やうやく夥し。回を重ね番をつみ、遂に各中隊の選手競漕とはなりぬ。この競漕には、各選手よく努力したりしが、第一中隊の選手の活動ぶり殊に花々しく、はるかに他の中隊の船を抜きて、遂に月桂冠を得たり。これにて本會は終を告げぬ。時に五時半なりき。一中隊選手の姓名左の如し。

第二十六回中隊選手競漕(二週)九分七秒

第一中(松浦時行 坪井三介 三好市郎)
隊選手(植田源熊 日野二郎)

(T.K.生記)

野球部記事

五月廿四日、午後三時より、我校グラウンドに於て、

を得しも、野田君三壘を盗まんとして冒險に過ぎ、渡邊君一壘に據りしも、續く都守君凡死して、高原君、渡邊君のスタンディングは、二中勢の爲めに甚だ惜しむ。

第三回、井町君三壘にバントして一壘に走り、山田君四球に出て、之に續き、守重君、右翼に好打して、井町、山田兩君生還、之れにて同點となる。

一中勢の得意思ふ可し。此より、一中勢意氣大に昂り、應援團亦漸く色めき初む。其より、柿並君セコンドオーバを打ちて一壘に走り、村上君之に續きしも、原田君(勝)インフィールドフライに死し、守重君亦三壘を襲ひて斃れ、石津君凡死して、二中勢之に代る。木村君二壘に好打して、一壘に據りしも、伊佐君三壘に平凡グラウンダーを打つて死し、八谷君の遊撃オーバにて、木村君一擧三壘に突進せしも、岡君三振し、野田君四球に出でしも、木村君餘りに焦心して三壘に死せしは残念。

第四回、原田君(景)三振せしも、岡村君四球を利して進み、井町君左翼に好打して、走者一壘二壘に據る。山田君の遊撃を失せしむる間に、岡村君本

野坂先生審判の下に、第一中隊第二中隊の第一回野球戦を行ふ。此の日、二中軍は、伊佐君捕手となり渡邊君ボックスに立ち、陣容を整へ、健闘力めたれども、武運や拙なかりけむ、仕合の結果は、十一對五にて、一中軍の勝利に歸したり。今左に、其の梗概を報ぜんに、

第一回、一中軍先づ攻撃し、守重君遊撃を突いて、一壘に入り、柿並君、遊撃にフライを打つて得られ守重君、三壘を窺ひて、此所に死し、二死となる。村上君、一壘にゴロを送つて、一壘に入りしも、遂に、原田君(勝)の三振にて、壘上の人と成り終んぬ。二中勢代り、渡邊君出て、先づ凡死し、都守君、漸く、一壘に入りしも、續く木村君三振に斃れて、双方得點なし。

第二回、石津君先づ凡死、原田君(景)岡村君何れも一壘に斃れ、次に、二中軍代りて、伊佐君三振せしも、八谷、岡兩君四球に出て、野田君又々四球に出て、満塁となり、二中勢、甚だ、有利の狀態にあり。岩本君、三振し、續く高原君四球に出て、八谷君先づ生還、續いて岡君又生還、二點

壘に突入し、守重君三壘にグラウンダーを送つて山田君生還す。已にして、井町君三壘に死し、村上君三振して、柿並君二壘を盗みしも、爲す所無くて止む。二中軍代り、岩本君遊撃を突いて生きしも、高原君三振して斃れ、渡邊君死球に出て二壘にあり。岩本君本壘を窺ふ事頻繁。都守君の一壘ゴロにて、岩本君生還。渡邊君三壘を襲へば三壘手之をフアンブルして渡邊君生還。これにて兩軍再び同點となる。二中軍應援狂喜して措かず、上衣を脱して之を振り、塵烟擧つて運動場爲に暗し。やがて、都守君凡死し、木村君一壘に生きしも、伊佐君三壘手にフライを得られて止む。

第五回、原田君(勝)遊撃を襲ひて、走壘捕手の失にて生還。石津君ゴロにて一壘に進みしも、原田君(景)岡村君共に三振して止む。二中軍、八谷、岡、野田三君、四球にて進み満塁。二中勢正に渾身の勇を振ひて起つ時、岩本君先づ三振し、高原君三壘目掛けて満身の勇を鼓し、バットも折れよと一撃すれば、八谷君本壘に突入生還せしも、己れ一步の差にて、一壘上の露と消えしは、立派なる

犠牲球にて、正に功一級。渡邊君四球に出てしても岡君冒險に過ぎて、可惜好機を逸せしこそ恨みなれ。

第六回、先づ井町君、山田君、遊撃を襲ひ、三壘手左翼手の失にて生還、應援軍の歡呼耳も聳せん計りにて、孰れも熱して火の如し。其より、守重君三壘手の失にて、一擧二壘に進み、柿並君三振し村上君、原田君(勝)共に遊撃、二壘の好打に生還せしも、守重君三壘を襲ひて刺され、石津君は死球にて、原田君(景)は一壘好打にて、岡村君は四球にて孰れも壘に據りしも、岡村君自失し、一壘に刺されて止む。一中軍徒らに好機を逸し、應援彌次る事頻りなり。二中軍代りしも、都守君、木村君、伊佐君續いて斃れ、得る所なくして終る。

第七回、山田君、先づ三壘打に斃れ、守重君左翼に痛快のヒットを飛ばして、一壘に生さしも、石津君の失にて、守重君三壘に死し、柿並君僅かに本壘を得て、石津君、又、二壘上に斃る。二中勢代り、八谷君先づ三壘にバントを送つて刺され、岡君亦一壘に斃れ、野田君四球に出てしても、岩本君

此の時、兩軍の應援喧々囂々、運動場裡、砂塵騰々、恰も、黒雲起りて百雷一時の觀あり。然るに是より先き、八谷君餘りに急いで一壘上の露と消え、續く岩本君三振して、正に間一髪といふの時、伊佐君本壘三壘間に挾撃せられて、可惜好機を逸せしこそ、正に二中軍百世の恨事なれ、時に午後五時半當日兩軍の成績左の如し。

第一軍重、並上、田津、田村、町山	(勝)	打擊數三十八
中守柿村原石原岡井山	(景)	得點十一
L.B. II.B. S.S. L.F. III.B. R.F. C.F. C. P.		三振六(渡邊)
		四球一
第二軍邊、守村、伊佐、谷、野、原、本		打擊數二十八
中渡都木伊八岡野高岩		得點五
P. R.F. III.B. C. C.F. L.F. II.B. I.B. S.S.		三振十一(山田)
		四球十一
		死球一

(A.N.生)

五月廿五日松陰神社祭禮の當日、午後二時半より、野坂先生審判の下に、第二中隊對第三中隊試合は開

三振し、二中勢頓に振はず、應援隊聲を囁らして聲援す。

第八回、原田君(景)四球にて一壘に進み、岡村君之に續きしも、原田君三壘に走つて刺され、井町君、山田君一壘を踏まずして止む。二中軍亦振はず。渡邊君四球に出て、都守君一壘に走りしも、木村君先づ三振し、高原君インフィールドフライに斃れ津守君亦二壘に刺さる。

第九回、一中勢最後の奮闘能く力め、守重君三壘打に死せしも、柿並君遊撃を襲ひ、原田君(勝)の犠牲球に生さ、石津君亦遊撃を襲ひて進み、原田君(景)の左翼安打に生還せしも、岡村君平凡フライを二壘手に得られ、井町君亦投手に熱球を止められて終る。次に二中勢代りて攻む。今度の一戦實は二中軍勝敗の分るる所なれば勇士の面々、孰れも決心面に現はれ殊死力闘、必勝を期して攻撃せんとし、一中勢亦堂々陣形を整へて守備堅固。正に二龍青潭に戦はんとするの概あり。先づ、伊佐君二壘を襲ひて一壘に走り、八谷君右翼に飛ばせて之れに續き、岡君、野田君、孰れも四球を利用して裕然入壘す。

始められぬ。二中隊は昨日の敗北を憤り、今日こそは、あつばれ大勝を得んものと、活氣物々グラウンダに集りぬ。拍手の裡にボックスに現はれたる渡邊君CFグラウンダーに出て、遂に生還す、三中隊の秋丸君生還、次いで岡田君ホームイン、中村君の熱球にて厚東君生還、二中一三中四の得點にて第一戦は終りぬ。二戦に於ては、二中隊益田君生還せしのみにて、二中隊一點、三中隊得點なし。次いで第三戦に移るや、木村君の痛快なるLFオーバーのため、渡邊君遂に生還、續いて、伊佐君の犠牲球にて岩本君ホームイン、野田君RFフライにて木村君生還、時に觀衆囂然として、兩軍意氣衝天の概あり。高原益田二君の生還にて、二中隊五點、三中隊〇にて終る。高原君IIに熱球を飛ばせて、渡邊木村兩君生還、次いで、伊佐君CFに大フライを飛ばせ、CFのエラーにて、一擧にして二壘を得、高原君生還、八谷君のRFグラウンダーにて伊佐君生還、野田八谷兩君はスタンディングに終る。三中隊は秋丸ト部兩君生還し、二中隊四點、三中隊は二點を得。第五戦にては、二中隊側は木村君の生還にて事止み、三中隊阿武君CF

に痛打し、中村君^{IIIB}に送り込んで後生還、秋丸君^{LF}ヒットにて倒れ、而して阿武君生還、次いで厚東君^{LF}フライにてト部君生還、時に二中隊十二點對三中隊の九點にて、二中隊益々盛運なりき。第六戦は共に得點なし。競技は第七戦に進みぬ。木村君^{CF}ヒットにて^{IIIB}に斃れ、高原君^{SS}グラウンダーにて壘に入り^{IIIB}間に挟撃されしも遂に生還す。三中隊にては、阿武君三振し、秋丸君好打して^{IB}にありしが、ト部村上兩君の戦死にて、事此に終る。第八戦共に得る所なし。愈々最後の決戦とはなりぬ。三中隊の野次連大いに應援に務む。高原君痛快なる^{LF}オーバートを飛ばせ、續いて伊佐君^{SS}グラウンダーにて^{IB}に入る。野田君斃れたるが、高原君ために生還す。益田君^{IIIB}フライを打ち、得られて戦死し、八谷君三振凡死して終る。さて三中隊勢如何。河野君^{IIIB}グラウンダーにて入壘、中村君^Pフライにて斃れ、阿武君は好打して走り、秋丸君^{FA}ブルヒットにて戦死す。此に於て、三中隊援軍甚だ顔色なく、二中隊勢は、安堵の色微かに現はる。時にト部君^{SS}グラウンダーを打ちてフルベースとなる。村上君^{IIIB}グラウンダーを

送りて、河野君生還。ついで岡田君、四球に出てくるため阿武君生還す。厚東君^{LF}に痛快なるフライを飛ばせたるためト部村上兩君生還、援軍狂號して運動場爲に震ふ。河野君戦死して競技終を告ぐ。戦運拙くして、再び思はぬ敗北に歸したる二中隊こそ實に哀れの極みなれ。時正に五時四十分。當日兩軍のメンバー及び成績左の如し。(T.M.生)

- (中二) 岩伊八野木渡高岡益 35 1 9 7 3 15
 (中) 本佐谷田村邊原 田 打死四三盜得
 P C IB HB IIB S.S LF C.F R.F
 (中三) 長中村阿岡ト秋河厚 數球球振壘點
 (中) 岡村上武田部丸野東 40 2 4 5 2 16

昨今、世間野球の可否を論ずる諺し。然れども、今此の稿を構へて、其の可否を論ずるは既に古し。野球は今や全國に普及して、寒村僻地に至るも尙バットの響を聞かざるなきの盛大となりて、我校にも亦野球部の設けあり。設備のある上からは、大に務めて、其の發達進歩を計るが順當なるべきに、一向其の振はざる所以のものは何ぞや。野球は爲可らずと

して、野球部は設置せられしにはあらざる可し。精神修養の爲め、身體錬磨の爲めに設けられたるや論なし。然るに、我校野球部が徹々として振はず、徒らに因循するは何故か。記憶せよ。古來世界に覇を稱へたる富強國は、孰れも運動熱心の國民を有せし事を。ギリシャの隆盛時は又運動の盛大なる時代なりき。「健全なる精神は健全なる身體に宿る」てふ實例は、能く彼に依りて證せられたり。實に彼は、熱心なる運動國民を失ふと同時に、又國力を失ひたり諸君、諸君が果して國家を愛し、萩中を思ふの情切なるものあらば、宜しく薬と相談の糞勉強は止めて寧ろ運動の人となれ。運動は實に一種の成功策なり。成功を望む者は必ず運動を試みる可し。運動は勉強よりは遙かに重大なり。身體羸弱にして成功を望むは、猶家を建つるに基礎を固めずして、直ちに堅固なる家屋を建てんとするが如くにして、愚も亦甚し。運動を盛大ならしむるは又一種の愛校策なり。運動の盛大ならざる學校は必ず因循の徒の巢窟なり。多數の不良學生を生ずる學校は、大半運動を重視せざる學校なり。幸に、我々が此の選に洩れたるは慶す

可し。是に於て、我等は、奮勵一番、益々運動の發展進歩に努力し、此の比類なき校風を墜さざる様、務めざる可らず。而して、野球が、近時長足の進歩を爲して、殆ど、我國技となれるは最も喜ぶ可き事なりとす。(A.N.生)

五月二十六日午後三時四十分、野坂先生審判の下に、第一中隊對第三中隊試合は開始せられたり。三中先づ攻めて得點なく、一中之に代りて、僅かに一點を得。二回、三中の英士枕を並べて斃るれば、一中得たりと之に乗じ、岡村君を真先に、井町君山田君續いて生還、三點を加ふ。三中代り、慄悍なる中村君死球に出て、瞬時に三壘を奪ひ、阿武君のタイムリーヒットに生還すれば、三中の意氣頓に昂り、秋丸君ト部君續いてホームを踏み、一舉三點を收む。四回、一中一點を收むれば、中村君再び死球に出て、見事二壘を盗み、阿武君一壘に生きたるに、中村君突如三壘を奪ひ、兩者相續いて生還するに及び、仕合は愈々佳境に入り、彌次連は砂塵を蹴立てて狂號し、意氣衝天の慨ありしも、後援續かず、見す見す好機を逸しぬるぞ哀れなる。五回、一中の石津君、原

田君(景)の快打に生還。(この時三中の投手村上君肩を痛めて。阿武君之に代はる)次いで、井町君よく本壘に走り、山田君三壘に斃れたるも、守重君柿並君村上君原田君(勝)相續いて生還し、一擧七點を收む。三中力を盡して、これが恢復に力めたれども、大勢既に定り、如何ともすること能はず。六回及び八回に、各一點を得たるのみ。これに反し、一中は、六回に四點、九回更に五點を加へければ、遂に二十三對七にて、三中大敗に終り、名譽の優勝旗は再び一中健兒の頭上に靡きぬ、時に六時二十五分。三中が五回目に投手を變更したるは、敗運既に到れるもの、三中の爲に深く惜む所なり。試合終りて、審判官は、一二のシートに就き注意せられ、兩軍共得點の多數なりしは、エラーの續出に由因せるものなることを説かれ、かくて兩軍交互に萬歳を三唱し、部長丸本先生は、吾校野球部の健兒は技元より尊ぶべけれど、精神修養はそが骨髓にして、三軍の戰士が矢折れ力盡きて後止みたるは、是即ち技術の上のみ走らざる男子の精神的行爲なりきと賞せらる。これにて春季の野球を終り、戰士一同、茶菓を喫して散會す。

を現さんと、意氣頗る高く、午前八時「コート」に集む。九時、秋山(周中教諭)、河村(大學生)二氏の審判の下に「ゲーム」を始めたり。永松君。堀尾君は、前日十三里徒歩の疲労も、物の數とせず、能く、敵を敗ること二組、我軍意氣頗る昂る。しかるに。中堅守重君等、敗退するに至り、上田君等能く敵を敗る能はず。大將秋丸君等、奮ひ戦ひたれども、割合に「エラー」多く。我軍の敗に歸したり。第二日、萩中對岩中の定めなりしも、岩中選手諸君の中に下痢を病まるゝものありて、試合中止となり。遺憾ながら、前日の恥辱を雪ぐ能はず、他校の奮戦を傍觀するのみなりき。

十一月四日放課後、秋季庭球大會を、第一「コート」に舉行す。田中部長、内山君、秋丸君審判の任に當らる。紅軍山田組、白軍厚東組の勝負に始りしが白軍稍々奮はず、會々微風起りて、勇士の苦闘一方ならず。已に十數組の勝敗を見るに至りしが、特筆すべきものなかりき。已にして紅軍陶村組現るゝに至り、戦漸く激しく、陶村組速りに猛球を送る、しかれども、白軍村上組も亦さるものにて、容易に其の

當日兩軍のメンバー及成績左の如し。(E.K.生)

黄一	山井守柿石村岡原原	47	0	5	4	1	23
(中)	田町重並津上村田田	愛	勝	景			
							打死四三盜得
	P C I B I B B S.S. L.F. C.F. R.F.						數球球振壘點
青三	阿中村秋岡長ト厚遠	17	3	7	14	3	7
(中)	武村上丸岡部東藤				(山)		

庭球部記事

明治四十四年七月二十二、二十三の兩日を以て、縣立各中學校組合立周陽中學校の聯合庭球大會を、周陽中學校の「グラウンド」に舉行せり。我庭球部選手左の如し。

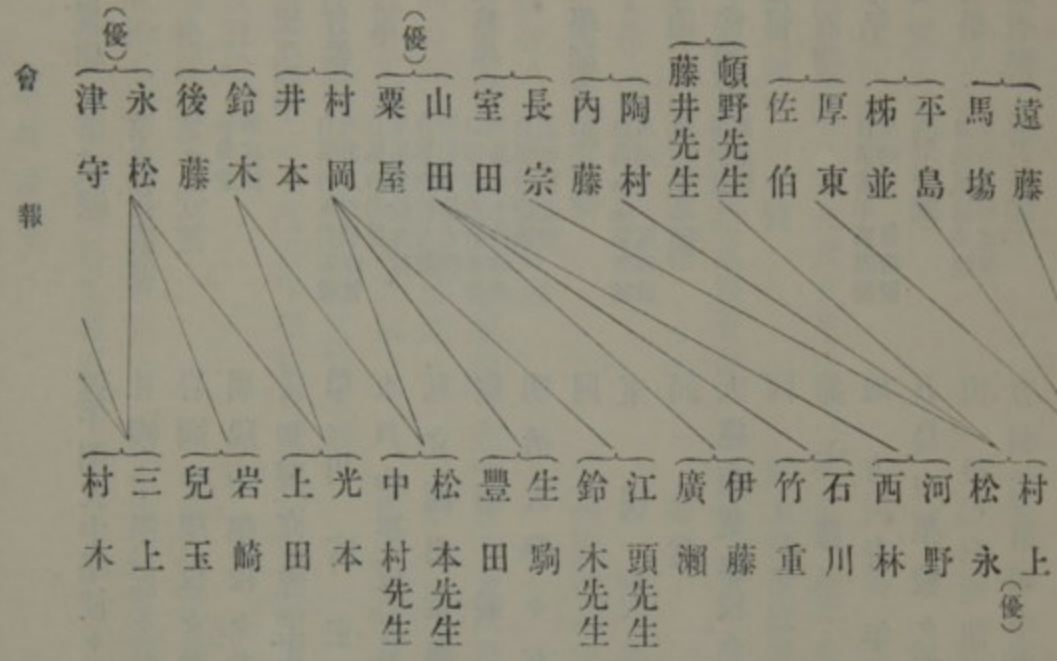
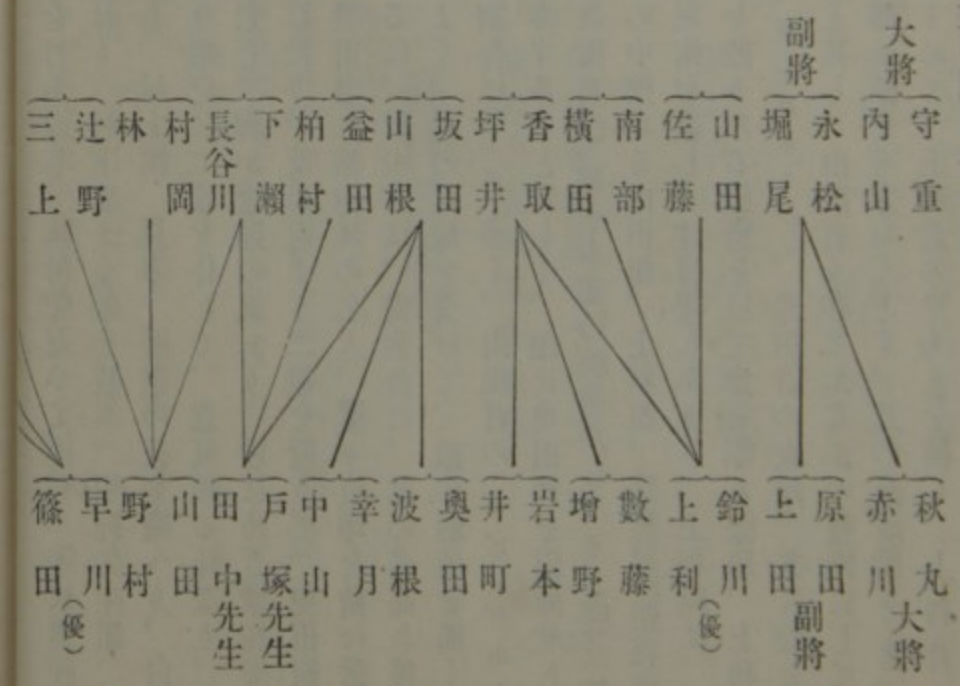
〔秋丸〕 〔上田〕 〔守重〕 〔永松〕 〔原田〕
〔赤川〕 〔内山〕 〔石津〕 〔堀尾〕

初日第一回、萩中對周中にして、各々、平素の腕前

直球を打ち返し、陶村組返つて困じ、遂に退陣するに至れり。村上組よく敵を敗り。頓野先生組、遂に力屈し、村上組、見事、優退の榮を擔へり、白軍戸塚先生組已に二雄を仆して、意氣頗る旺なり。坂田組と對し、聊か逡巡の風あり。遂に防ぎ兼ねて退陣せられたり。坂田組よく二組を敗りて、奥田組に對す。奥田君は鐵砲球の名人、屢々直球を敵に送る。しかるに、坂田君は、寄宿舎に、其の名高き後衛なり。よく、其の猛球を受けて、敵の弱所を衝く、波根君割合に「ミス」多く、山根君の「ロビングホール」効を奏すること甚しく、遂に奥田組を退陣せしめたり。坂田君は、將來本部の驍將たらんこと疑ひ無し。兩軍の中堅たる山田組、上利組、悠然、陣頭に現れ、互に秘術を盡し、は目覺しかりき。上利組は、已に二組を敗りたる餘勢を以て意氣頗る激昂、上利君の「カッチングボール」、鈴川君の直球、共に効を奏すること甚し。山田君も亦なかなかの後衛にして、其の猛球は楯をも穿たんとす。其の直球屢々「ネット」をかすめて、上利君の足もとを衝く、上利君よく「ロビングホール」を以て打ち返し、佐藏君又直球を

打し、戦愈々激かりしが、山田組の「ミス」案外にて、惜い哉、遂に敗軍せり。さて、愈々兩副將永松組、原田組の出陣とはなれり。人々拳を握つて、暫し黙然たりしが、審判官「ブレイ」の聲と共に、拍手は四隅に起れり。永松君の「サーブ」實に静かにして、原田君猛球を以て之を打ち返せば、永松君之を「ロビングホール」にて、上田君に送る。球力なくして、堀尾君能く「スマッシング」を以て、敵陣に打ち込む。かくて、原田組遂に敵せず、悄然退陣せり。白軍大將秋丸組一撃のもとに、敵を敗らんと、悠々「ラケット」を採つて出陣すれば、衆固唾を呑んで駄視す。秋丸君の「サーブ」より開覺せらる。初め永松君の球頗る緩にして、秋丸君稍々張合抜けたる様子なりしが、漸く激しく、時々前衛の虚を衝きて、敵を逡巡せしむ。赤川君の前衛は「神様」と呼ばれて、其の鬼神出沒の妙技實に感嘆の外なし。しかるに、永松君は「ロビングホール」は、秋丸君之を如何ともする能はず。遂に、當日の月桂冠を永松組に與へて退陣せり。當日は、特別會員の参加ありて、甚だ盛大を極めたり。

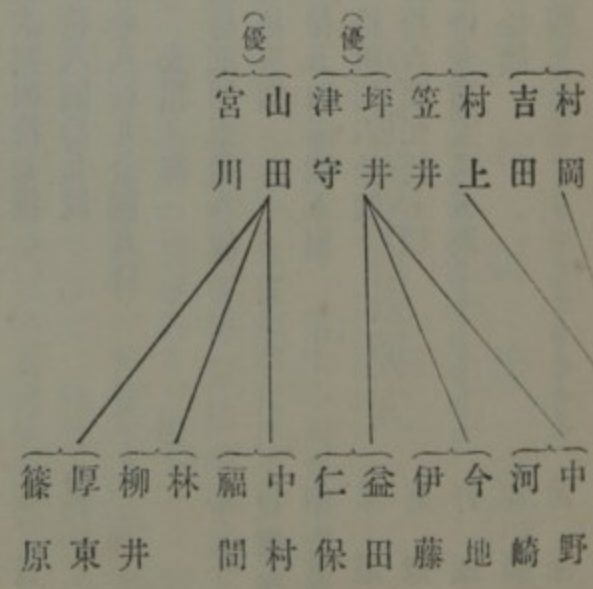
番組並に勝負次の如し。



本會は左記書籍雑誌の惠贈を辱くせり記して謝意を表す

修道 第參號 廣島修道中學校琢章會
 校友會雜誌 第參拾七號 下關商業學校々友會
 同 第拾六號 德中中學校々友會
 同 第貳拾四號 中津中學校々友會

惠贈書目



校友會雜誌 第貳號	逗子開成中學校々友會
同 第拾貳號	札幌中學校々友會
同 第拾壹號	岩國中學校々友會
同 第貳號	周陽中學校々友會
同行啓紀念號	愛知縣立第二中學校
一校友會雜誌 自第百九拾五號	早川富正君
知道月報 自第百拾四號	水戸中學校々友會
時習 自第百拾參號	私立德山女學校
慶應義塾學報 自第百拾七號	慶應義塾
學叢 自第百拾七號	明治大學々友會
明治大學創立記念號	同 東洋大學
修身 自第八卷第壹號	同 大連商業學校々友會
同窓會通 第拾九號	同 鈴木藤三郎君
乾燥富國論 自第貳年第四號	地方青年 至同 第六號
石田城 自第貳拾貳號	淺草文學 自第貳拾貳號
多々良學校 第七號	

躬行會雜誌 第五十六號	躬行會
球陽 第貳拾號	沖繩中學校々友會
校友會發展史	東京高等師範學校
明治四十三年度萩中學校校友會費收支決算書	
收入ノ部	生徒會費
一金七百拾九圓四拾錢	職員會費
一金百貳圓四拾九錢	雜收
一金六拾八圓拾九錢	合計金八百九拾圓八錢
合計金八百九拾圓八錢	支出ノ部
基金蓄積費	短艇新造同上
短艇新造同上	劍道部費
柔道部費	庭球部費
庭球部費	野球部費
野球部費	短艇部費
短艇部費	游泳部費
游泳部費	

本校記事

(自明治四十四年一月至同 年十二月)

卒業證書授與式

三月二十四日午前十時、第十一回卒業證書授與式を講堂に舉行せらる。來賓知事代理生田縣屬野北歩兵中佐神代同少佐岡田判事菊屋法學士以下數十氏臨席。先づ校長舉式の挨拶あり、繼ぎて、卒業生四十七名に卒業證書を授與し、又優等者精勤者等に賞品賞狀を授與せられ、了りて、校長の訓辭、生田屬の知事告辭代讀、岡田判事の祝辭演說等あり、生徒總代として、原禎造君祝辭を朗讀し、藤村良作君卒業生總代として、答辭を述べられ、十一時三十分、式全く終り、來賓並に卒業生に、茶菓を饗せらる。其より、更に、校長以下各教職員卒業生諸君は、寄宿舎食堂に、午餐會を催され、生田屬菊屋法學士花村防長新聞通信員亦列席せらる。席上、村上校長モンクリーフ教師菊屋生田兩氏松本藤原安藤各教諭卒業生上野藤村松井諸君の簡單なる卓上演說あり、午後

一金百拾圓六拾壹錢	雜誌部費
一金五圓拾七錢	辯論部費
一金八圓五拾錢五厘	書道部費
一金七圓四拾九錢	圖書部費
一金六拾九圓八十九錢五厘	運動會費
一金拾六圓九拾五錢	同上役員慰勞會費
一金百貳拾五圓參拾貳錢五厘	褒賞部費
一金七拾參圓四拾九錢	雜費
一金七拾六圓參拾七錢	臨時部費
一金五圓六拾四錢	剩餘金基金編入
合計金八百九拾圓八錢	
明治四十三年度萩中學校々友會基本金決算書	
一金四百四拾八圓六拾參錢	前年度繰越金
一金六拾貳圓五拾九錢五厘	本年度實收高
合計金五百拾壹圓貳拾貳錢五厘	
明治四十三年度萩中學校々友會短艇新造蓄積費	
決算書	
一金參拾圓	前年度繰越金
一金五拾五圓九拾貳錢五厘	本年度實收高
合計金八拾五圓九拾貳錢五厘	

二時頃散會せり。當日卒業諸君の姓名は、卒業生一覽に載せあれば、此に掲げず。賞品賞状を受領せるは左の諸氏なり。

特別賞(英語辭典)入學以來長勤績 同精勤
採行甲 成績甲

○五年二組 松井 隆美

一等賞(半紙武東)一學年間長勤績 同精勤
採行甲 成績甲(第三席以上)

○四年一組 長宗純一○同二組 原禎造○三年二組 柏村稔三○二年一組 下瀬一郎○同二組

幸月富士昌○同三組 光本照夫○一年一組 柴田省三 齋藤八郎○同二組 片岡勝資

二等賞(半紙壹東)一學年間長勤績 同精勤
採行甲 成績甲(第五席以上)

○三年一組 鈴木清○二年二組 野上猛三郎 ○同三組 小川義雄 一年三組 松原淨二

同 (半紙壹東)伍長勤績(五年生入學以來)採行甲 成績甲

○五年一組 藤村良作 廣兼來藏○四年二組 黒瀬知一○三年一組 卜部 豊 増野雅治○一年一組 加藤萬壽夫

同 (半紙壹東)伍長勤績(五年生入學以來)採行甲 成績甲

○五年一組 伊藤 香 兼谷善二 藤原政一 飯尾三郎 齋藤武文○同二組 寺戸 篤 大谷雄

同 (半紙壹東)伍長勤績(五年生入學以來)採行甲 成績甲

藤山二郎 原田勝次 岡田節藏○同二組 守永喜平 原田景三 山田雪三 伊藤胤一 馬場秀藏 白石英男 口羽忠介 椿 武忠 山本良輔 柳屋良輔 村上愛二郎 堀 信一○二年一組 松浦時行 後藤琢一 岡村禎祐 河内清行 岡田一郎 宇野忠夫 伊藤英二 境 三輔 山下真一 榎原孝一 岡村喜一 田中健藏 植村美人○同二組 藤田保忠 普喜嘉重 吉村慎吾 早川 馨 三輪一輔 鈴木 勉 杉山顯正 伊藤實三 本永三郎 小澤亮一 下瀬茂雄○同三組 飯田治郎 秋山節一 村上次郎 井上圭介 兼田幸作 三宅十六 持山太兵衛 勝野秀信 永松元治 中村百合藏 富田 穰 山根正直 今地延一 阿武政一○一年一組 三木定治 河野匡四郎 上田保次郎 松原與七郎 三好市郎 飯田剛一 河崎貞義 藤井信次 五峰作一 林代次郎 伊藤通利 山本五陸 小河千里 神田貢 村岡語朗 馬庭長一 後藤樹三 山根忠熊 田總時俊 郷田周隆 山本勝清 井上 光○同二組 竹原純一 松井三雄 林 只一 三上勝

介 波佐間久 栗栖 靜 西山彦三 桑原義輔
○四年一組 伊藤義彦 渡邊梅吉 秋本一郎 陶村政一○同二組 伊佐小次郎 平島公平 大津正一○三年一組 河崎松之助 馬場健一 長岡正人○同二組 口羽忠介 堀 勘市 堀野圓 介 柳屋良輔 竹重英治○二年一組 後藤琢一 石津 渚 山下真一 植田源熊 山田健三○同二組 横田國香 三輪一輔 長谷川濟 小澤亮一○同三組 善市陽一 山根正直 阿武政一○一年一組 後藤樹三 小河千里 金子武馬○同二組 三上勝象 村岡淺一 田村尹夫 武田弦介○同三組 兒玉才三 山本虎吉 下井干城 西林鴻介 田坂耕三 三等賞(賞状) 精勤
○五年一組 上野義清 椋木史朗 兼谷善二 伊藤道顯○同二組 山崎秀輔 河口百合長 小枝義雄 津田 等 大谷雄介○四年一組 片山平作 奥田準一 渡邊梅吉 下村福次 秋本一郎 ○同二組 杉山守輔 厚東四郎次 田村真一郎 村田四方介 高橋保勝○三年一組 上利祥介

象 松岡六雄 田村尹夫 武田弦介 岡崎虎熊 國重隆一 吉賀正一 中村忠道 高山 實 石津 漣 大谷直弼 竹内基雄 大津藤一 田北浩一 阿武 耕 山本忠之 綿貫秀雄 村岡淺一○同三組 八木榮一 中山靜太 坪井六郎 藤井四郎 田坂耕三 増野兼寛 山本虎吉 西林鴻介 岡村信一 來島真介 坂田義亮 兒玉才三 今道三吉 齋藤哲夫 國重爲人 井本明治 杉山良一 倉田正一 村田達男 佐久間正次

校長諭告

四月二十二日、午前十一時より、一同を講堂に會し左の各件を口達せられたり。
一、從來修學旅行は、四五兩學年に於て舉行せしが、今後は、改めて、五學年に於て、一回之を舉行する事とす。積金は、二十錢を減じて十五錢とす。現在の五學年は、昨年四學年の時に於て既に舉行したれども、本年に限り、特に之を行ふも差支なし。但全級四分の三以上の希望者あるにあらざれば行はず。

二、風紀頹敗の虞は、常に下宿者に多し。故に、今回嚴に下宿を取調べ、不都合と認むるものは、斷然之を改めしめ、適當なりと認むる者に、責任を以て、十分取締をなすべく誓約せしむべし。

三、墮落者は、猶傳染病のごとし。一人の墮落は、他の多くに感染する恐れあれば、かゝる嫌疑ある者は、今後遠慮なく適當の處置を取るべし。諸子の十分注意せむことを望む。

河野大尉の來校

十一月六日、陸軍砲兵大尉河野三郎氏來校、十一時より、一場の講演をなせり。先づ日露戰爭當時の實況より説起し、精神教育の必要に關し、實例を引き續々説話せられたり。氏は菽學校の卒業生にして士官候補生となり、陸軍大學を卒へ、現に參謀本部に出勤せらる。

聖駕奉迎

十一月八日、午前六時より、一同此地を出發して、三田尻に向ふ。詳細は、安藤教諭の手に成れる流麗なる紀行文一篇を得て、文苑欄に載せ置きたれば、此には、之を略す。

遙拜式

聖上陛下、三田尻御發軔、還幸あらせらるゝに由り、十一月十七日、午前第八時を以て、遙拜式を講堂に行はる。式了りて、校長は、先日、三田尻に、聖駕を奉迎するにつきては、幼年生には聊か無理ならんと思へる行軍を敢てしたるにも拘はらず、往復とも、一人の落後するものなく、無事奉迎を終へたるは、余の満足する所なり。是諸子が平日體力の養成を忽にせざる効果の事實に發現せると同時に、皇室崇敬の國民的精神の旺盛なるが致す所なること論なし。

諸子は、今後益々體力學藝を養成するとともに、愈々此精神を發揚せざるべからず。之なくば、我國家は何に由りてか、其勢力と其光榮とを永久に保持することを得んやとの意を述べ、更に、清國現時革命軍奮起の情況を述べ、其國勢の振はざるは、國民に愛國心乏しきが故なることを續々訓諭せられたり。

送迎彙録

一月二十三日、中村教諭の紹介式を行はる。教諭は本校第五回の卒業生にして、其後、體操學校を卒業

し、講道館柔道初段の免狀を得られ、千葉縣立佐倉中學校教諭より、本校に轉任せられたるなり。

三月十七日、細川教員菊池教諭の告別式を行はる。細川教員は家事の都合に由り、菊池教諭は上海東亞同文書院の招聘に應ぜらるゝが爲に、辭職願出でられ許可せられたるなり。

四月十一日午前八時より、例に因り、始業式並に新入學生の入學式を行はれ、終りて、山田江頭兩教諭の紹介式を行はる。山田教諭は、嘗て本校の前身なる菽學校に奉職せられたる事ありしが、今回、岡山開谷學校より、再び本校に來任せられ、江頭教諭は、東京私立正則中學校を卒業し、青山學院英語専門科を出て、本校英語科教授を受持たるべく來任せられたるなり。

四月十四日、午前八時より、野坂教諭板垣劍道部教師の紹介式を行はる。野坂教諭は、本縣立岩國中學校の出身にして、更に神宮皇學館本科の業を卒へ、國語科教師として來任せられたるなり。

八月三十一日、板垣劍道部教師辭任につき、古川生駒氏劍道指南を囑托せらる。

九月七日、放課後、高木教諭廣島縣忠海中學校に轉

任せらるゝにつき、告別式を行はる。

十月三日、午前七時半より、粟屋教諭の紹介式を行はる。教諭は本校第二回の卒業生にして、其後、私立國學院大學師範部國語漢文科を卒業し、今回、高木教諭の後を承けて、千葉縣大多喜中學校より轉任せられたるなり。

十一月七日、午後一時より、野坂教諭の告別式を行はる。先生は、一年志願兵として、本年入營せらるゝにつき、辭任せられたるに由る。

同十三日、午前九時より、下瀬教員の紹介式を行はれたり。

十二月二十三日、午前十一時より、鈴木教諭の告別式を行はる。教諭は、郷里に近き築館中學校の招聘に應ぜらるゝが爲なりと聞く。

江戸に送らるゝ途中淡路島を見て 松 陰

わかれつゝ、又もあはぢの島ぞとは 知らてや人のよそにすぐらん 報效抱素志。籌略嘆菲才。菲才或致敗。素志遂不摧

文苑

涙松

第一學年 戸塚 端

己が故郷は、如何なる寒村僻地なりとも、其懐しさは、尙、便利なる都會、愉快なる勝地佳境にも勝るものなり。故に、旅に在りては、其故郷ほど思はるるものなく、故郷を出づるとき、故郷に歸りしときなどは、其感慨實に無量なり。

世の中まさに覺醒せんとする幕末の頃、身を君國に捧げ、忠義の爲に盡瘁せる王政維新の先登者吉田松陰先生の雄々しくして然も大膽なる其言動は、天下幾多の志士の氣を鼓舞獎勵せしが、天は何故か之に好運を與へず、遂に捕はれの身となられたり。かくて、江戸に送られんとし、懐しき故郷萩の城下を出て、愈々萩の見えずなる大谷郷の涙松の下を過ぎられしに、さすがの先生も懐郷の念にたへず、しばし駕籠を止めて、遙に萩の市街を望み、

歸らじと、思ひ定めし旅なれば

ひとしほぬるゝなみた松かな

と詠ぜられたり。をりしも、山風哀れをこめてさと吹き渡り、並居る人々袖をぬらさぬはなかりきとぞ。此松蔭は、獨り松陰先生のみならず、萩を故郷とする者は、誰しも皆、出づるときは、名残り惜しさに涙を垂

れ、歸るものは、懐しさにえたへて、又袖をぬらせりといふ。嗚呼、かくの如く、喜び悲みの涙にぬらされし涙松。彼は今尙鬱々蒼々と生ひ茂り、吹き荒む北風に、過去の悲劇を語るなり。

將來の覺悟

第二學年 西 林 鴻 介

我が大日本帝國は、日清日露の兩戰役後、世界一等國中に列せしと雖も、諸種の事情は尙憐れなる状態にあり。故に國家の一分子たる吾人は大なる覺悟を要す。大いに努力奮勵して、國威の發揚に務むべきなり。夫れ宇宙は廣漠たり。吾人の智識は之に比して頗る淺薄なり。されば、豫め數年乃至數十年の星霜を定め、之を修學に費して智徳を修養し、大いに將來成業の基礎を作らざるべからず。彼の些細なる家屋も、其基礎充分に鞏固ならざれば、以て堅固なるものを得べからず、夫れ此の如し、况や、吾人將來の國家を作る基礎たるに於てをや。是に於てか、吾人は悟る所あり。此の基礎を堅固に作らざれば他日複雑なる活動社會に出て、如何に活動せんと欲すとも、其志を成すことを得べからずと。然らば、此の基礎を鞏固ならしむるには、如何にせば可なるか。其は吾人國民各自の心身の發達に俟たざるべからず。されども、往々精神の發達にのみ努めて、身體の發育に務めず。其結果身體衰弱して、遂に無爲に終る者あり。或は、之に反して、身體の發育にのみ心を盡して、精神の發達に心を注がず、爲めに智淺くして、社會の生存競争に堪ふることを得ざる者あり。共に誤れり。大いに將來に活動せんとするには、其の基礎を充分

に鞏固ならしめざるべからず。之が爲めには、精神の發達と身體の發育とをよく調和せしめざるべからず。如何に智識ありとも、又如何に身體健康なりとも、道德修らず、品性劣悪ならんには、社會の排斥を受けて將來に活動せんこと亦難かるべし。かるが故に、吾人は、居常より、其修養に就きて注意を怠るべからず。道德の修養には、種々の手段あるべきも、先づ、友を選びて、互に善を責むるを第一とす。古語にも「水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による」といへり。友を選び徳を磨くこと忽にすべからざるなり。又思ふべし。吾人に不撓不屈の精神の如何に必要なかを。幾度失敗するも、失望落膽することなく、己の成さんと欲する事を遂行するは、此の精神の發現なり。古語に曰く、「大器晩成」と、蓋し、東洋に於ける豊太閤、又西洋に於ける那翁と雖も、生れて直に天下を左右し、且他國を服従せしめしものにあらず、かゝる顯位に登り、かゝる權勢を得しは、幾多の艱難を凌ぎ、此の精神を以て萬事に當りしによるものなり。思ふに、本邦人には、小成に安ずといふ恥づべき缺點あり。吾人は小成に安ずる事なく、大成を期すべきなり。吾人は萩に生る。故に一層の努力奮勵を要す。何となれば、吾縣は維新前後に於て、國家の機務に貢獻せる幾多の先輩を出せり。然るに、現今の長州人士は如何。其後繼者たる青年は如何。吾人不幸にして其の士氣大いに衰へ、風紀大いに亂るゝを見る。嗚呼。實に憤慨に堪へざるなり。吾人は、國家の現状を察して、長州男兒の現今を想ひ、感慨轉た禁ずる能はず。聊か微衷を披瀝して、吾人の覺悟を述べ。

豫習の必要

第三學年 山根正直

頭腦頗る明晰にして、所謂、天才的人に於ては、修學上、豫習の事、或は要とせざらんも、尋常の人に於ては、殊に必要缺く可からざる事とす。

假りに、明日學ぶ可き學科を豫習せずして登校せりとせんか、此の如き場合には、其の受くる所を充分に理解する事能はざるのみならず、教室に在りては常に不安の念に支配せられ、學問の研究上達は決して望む可きにあらざるなり。

いつ、教師より、此の講義をせよと命ぜられんか、或は此の問題を解けと命ぜられんかとの思ひにかられて心常に煩悶し、修學の趣味は次第に薄らぎ、遂に學問を厭ふに至り。是が爲めに、落第の悲運に陥り、或は廢學して、前途の希望を棄つる者あるは、吾人の屢々見聞する所なり。

抑も、學業の益々進んで、其智識の愈々増すは、誰しも欲する所、然も其の學事に従ふ者にして、一教場に。同一の教授を受くるにあたり、優等なる者、劣等なる者を生ずるは、何事に因するか、これ各人の才能の相違に依る所多からむも、他の一大原因は、學事に忠實なると否らざるとに存するなり。即ち學に忠實なる者は、先づ自ら豫習して、教を受くるの故を以て、不明なりし問題も、教師の一言に依りて直ちに之を解し、修學上に面白味を感じ、學問愈々上達して、優等の成績を擧ぐるに至るなり。之に反して學に忠實ならざる者は、豫習せずして教室に出づるを以て、教師の懇篤なる教授も、何等の甲斐無く、己の勤勉ならざるを云はずして、學事を容易ならずとし、自棄して省みざるに依り、遂に劣者の地位に陥るに至る。豈に不幸ならずとせんや。故に、豫習は、復習と相俟ちて、修學上最も緊要の事にして、學問上達の秘訣と云ふも過言にあらず。學生たる者、宜しく茲に注意して、豫習を忽にす可からざるなり。

前號所載「運動を擇ぶべし」の記者に與ふ

第四學年中 村 章

拜啓、君が前號に御提出の、「運動を擇ぶべし」、てふ一記事、誠に、面白く拜讀仕り候。例の、流麗なる御健筆、何時もながら敬服の外これなく候。たゞ其の御論旨に至りては、僕は、大の不賛成に候。其の理由は如何。

優れるものを優れりといひ、劣れるものを劣れりといふは平凡なりとて、優れるものを劣れりと論じ、劣れるものを優れりと論ずるは、辯を好む者の、時に陥る弊害なり。貴論は、其の弊を襲ひ給へる様思はるゝは、僕の僻目に候か。世の所謂、文章家は、時に、行文の便宜上、心にもなき事を喋々する事あり。誌上に於て排斥したる運動を、尙平然として之を行ひて憚り給はざるは、此の類か。君は數年間、種々の運動を試み、野球庭球擊劍柔道器械體操徒歩旅行水泳競漕等あらゆる方面に試腕せられし由。誠に、君の敏活、不屈の精神を以てするにあらざるよりは、誰か能く斯の如きを得ん。唯々、威服驚嘆の外なし、然るに、惜しい哉、君の此の如き大精力を以てして、尙二三の運動に稍成功せられしのみとは聊か残念、物足らぬ感致し候。大方の者は、一事に熱中して、數年後に、初めて其の真相の一端を解する位のものなるに、僅々數年間に、十分に近き運動を試みて、一々其の見解を述べ、其の是非得失を論斷せらる、君の頭腦の明晰と精神の剛健とは、今更感佩仕り候。然れども、かゝる大事が、此の如く容易に斷定結論し得らる可きか、如何。余は、君が、日常、擊劍水泳競漕等の外、猥りに、其他の運動を試みらるゝを目撃したる事なし。然るに、斯くの如

く、野球を非難せらるゝは、偶々君の嗜好が、此方面に適せざるに由るか。さなくば、他の一部排野球連の説に雷同せられしか。又、文中「野球に熱中せる學生には秀才なし」の一節これあり候も、そは餘りに不敬に過ぎたる淺薄なる斷定かと存ぜられ候。抑も、現今の運動法は、其の數頗る多く候へども、其等の一つ一つが、決して人を待つものにはこれなくして、却つて、各人が其の好む所に向つて集ふものなれば、其等の各方面は、賢愚智鈍の別なく、雜多混同せるものなり。然れば、此等の方面中には、或は、賢にして、好む所に熱中するものあり。又、愚にして、欲せざる所には不熱心なるもあらん。故に、除外例として、好むは全部秀才の士なりと論斷する事は不可能なる可く、不熱心は必ず秀才なりとは結論する事能はざる可し。されば、野球に限り、熱中學生に秀才なしてふ此の論旨は、全然不合理にして、實を語らざる結論たる事、識者を待つことなくして明かなり。又、時間の不經濟は、野球に限らず、何れの運動にも伴ふ通弊なり。擊劍も、多人數なれば、從ひて仕合の時間も多くかゝり、野球も、或程度迄は、回数を減少する事を得る規則あるを以て、之に従へば、自然時間は短縮せらる可く候。又君等は、擊劍を爲すに、道具は購ひ給はぬか、野球とても、之を爲す以上は、一通りの道具は入用なり。然るに、地方一二團體の、時に宜しからざる事ありしをとりて、直ちに、野球全部を論難せらるゝは、餘りに早計には之なく候や。其次の「危険多き事」に至りては、僕は、僕輩、殆ど君の心事を解するに苦しみ候。君は我校劍道部の錚々たる者。而して、尙、此語あり。此に至りて、僕は武道の眞價を疑ふものに候。操る劍は竹刀に代へても、振る太刀を眞劍と心得、常の仕合を其眞劍勝負と思惟すれば、君等は、日々、随分、多くの危険事を試みらるゝ筈なり。然るに、今、野球危険多きを口にせらる。君の爲に深く悲しむものに候。若し、今の君にして、斯の如く、他部論難の餘暇あらば、

一篇の武徳誌にても披緝御精讀の上、武道真意の存する所と其の發達とを考究せられては如何。現に君も、劔道部の不振に就きて嘆ぜられつゝあるにあらずや。試に問はむ、君不振の原因を知り給ふか。古來、柔劔道は我國獨特の武技なり。吾人、一度此を修むれば、剛毅果敢の大精神自ら生じ、以て拔山の勇を振ひ、以て倒海の謀を運らすを得べし。危険なり、粗暴なりとして、徒らに懾惧するは、抑も末なるべく候。又問はむ。何故、野球が、學問の勉強と一致不可能に候か。果して、天下多くの教育者は、不勉強なる生徒を養成する爲めに、日夜腐心しつゝあるか。而して、此を默過する所以のものは何故か。貴論は、野球の害のみを列舉して、其の裨益する所は一も陳述せず、徒に撥斥の語を列記せらるゝは何故か。若し、確實なる野球有害の證據を握らるゝならば、何故、最初より、「野球排斥論」と題して、正々堂々思ふ所を述べられざりしか小膽卑屈は、武道修業者の最も忌む所に候はずや。余は右述べし所の外に、更に君に向ひて述べざる可らざる事の候。野球は、之が爲めに、學問上の成績の變らざる秀才の運動としては適當なる様申され候も、そは、全然論とはならず候。然らば、日頃君の崇拜せらるゝ、柔道擊劔に於ては如何。例せば、擊劔の爲めに、學問上の成績の變りし者は如何、其にても、尙、劔道は續行せざる可らざるか。畢竟するに、此の論旨を擴張すれば、總べての運動は、秀才の爲す可き專有物にして、秀才以下の爲す可きものなしと言ふを得べし。而して、此の論が、直に識者の賛成を得て實行せらる可しと思ひ給へるか。又「野球により自己の成績の下りし時云々」、及び、「野球をす可く、新中學生となれるに非ざるを自覺せよ云々」は、何故野球と限られ候か。若し、擊劔に依り自己の成績の下りし者あらば如何。其際、何人も、必ず、擊劔道具は破棄せざる可らず候か。灰燼となさざる可らず候か。又問ふ。君は擊劔修業の目的を以て入學せられしにや。惟ふに此の兩者は

論者折角の心血ならんも、惜しい哉、一篇の空論と化し去るべく候。噫、君は、何故、かく迄野球を敵視せらるゝか、察する所、君が、未だ野球の眞價を知られざるに因するなる可し。今左に、一言、野球大要を述べて御参考の資に供すべく候。若し、君がこれに依りて、聊かにも會得せらるゝ所あらば、余は、君の爲我運動界の爲に、大快事として、双手を舉げて歡呼せん。乞ふ、暫く耳を借せ。抑も、此野球なるものは、近く我國に輸入せられたる世界的國際的の大運動にして、入國以來、時日向淺きにも係らず、今や、全國に傳播して、到る所に此の技の行はれざるなき盛況を呈するに至りぬ。而して、吾人が、此に依りて利益する所のものは何ぞや。先づ、萬事を實行する上に於て、必要缺く可らざる氣合は、實に、此野球に依りて、不知の間に養はれ候なり。即ち、野球は、精神修養上缺く可らざるものに候。共同一致の道徳的美風も亦これに依りて養はれ、其の他、大膽服從敏捷強健等一々枚舉に遑あらざるも、畢竟するに、吾人が後來處世上に缺く可らざる幾多の要素は、野球に依りて養成する事を得候なり。然るに、君の如く、弊害、不利益のみを舉げて、之を非難攻撃せば、社會萬般の事物は、悉く、此を撲滅せざる可らざるに至らん。學校あるが故に、時に墮落生を生じ、教育あるが故に、諸種の弊害を生ず、學校も撲滅す可し、教育も撲滅すべしといはむ、社會は遂に寂滅せむ。柔道、劔道にも多少の害ある如く、野球にも弊害あるは免れぬ事に候。此の弊害は、君等が、親切に且つ忠實に調査の上、務めて之を除き、國家の爲、社會の爲に、利益ある方面に發達せしめらるゝを待つものに候。自己の手に依りて快打せられし熱球が、杳渺際なき鵬路を翔けて、彈丸の如き偉力を示し、又、他よりの強打球がうなりを立て、飛來するものを、隻手に握手する等、實に、人間の力は偉大なるもの哉。柔道、擊劔、勿論可なり。然れども、吾人は、今後、常に大きく、社交的に、團體的に、而し

て、此の國家を基本とする世界的進歩を爲さざる可らず候。野球は、實に、此の大精神を有する國際的世界的、大運動に候。見る可し。今後、野球は、内外共に益々發達すべく、決して衰微滅絶す可きにあらず候。とを。要するに、野球素養の足らざる門外漢が、之を、論難排斥せむと計るは、突飛なりとも申すべく候。然れども、僕もとより野球の大家に非ざれば、其内容に至りては深く之を詳にせず。君が、是を以て、僕に野球の大精神を述べ可き資格なしと、申されるれば、唯、其迄の事に候。頓首。

海上生活の趣味

第四學年 浮里宜也

春風麗かなる一日、歩みを白砂青松の海邊に運ばんか、我眼界に在るは白帆なり島嶼なり。軟風遠く吹き渡りて、渺茫たる蒼海漣波徐に起る。此の時己が精神は醒醒たる俗界を離れ、清く而も崇高なり。此の場合誰か一片の感想を懐かざらんや。予常に是事を經驗して、海上生活の趣味を想起せずんばならず。海上生活。その島帝國男子の鼓膜に響く聲や如何。未來の海の人たるべき若き人の腦裏に感ずる音や如何。年々舉行せらる、海軍諸校の入學志願者の多きに徴してその真相を得よ。これ四面環海の我國にとりては、必然の義なりと云はゞ云へ、されども、海員の生活如何に自由に、如何に壯快なるか、予をして暫く彼等の趣味とする所を想像せしめよ。然れども、漁夫の一生、國家の干城たる武人、東航西走、交通運輸に資する商船の乗組員、皆等しく海上の生活たらずんばならず。予の言はんと欲するは唯その一部分たる商船若しくは帆船に於ける生活のみ。

海上生活の眞味は、陸に頭を病ます驕者輩の知らざる所、安逸放恣にして、虚飾を務むる輩の思ひ當らざる所、板子一枚下は地獄てふ輕舟に一身の安危を托し、終日終夜蒼海を唯一の友として、狂瀾怒濤、死をも辭せざる豪膽兒にして、はじめてよくこの眞味を知るなり。

見よ、船の駛する所、其景從つて變ずるを。今や南洋の美景にあこがれつゝあるかと思へば、身は已にエベレストの峻嶽を仰ぐべし。朝にスエズにレセツプスの偉業をたづね、夕にカルタゴの往時を忍ぶ。朝霧晴るゝ頃、金門灣頭に橋頭高く日章旗を翻へし夕靄バルバライソの群衙を閉ざす頃、漸く我が日章旗を收む。壯又快。萬頃一碧闊き大洋の波は、東より西へ南より北へ、或は高く或は低く、我船邊に碎く。晝は赫々たる紅輪を友とし、夜は皎々たる玉兔の下に、腹心の友と故國を語る、豈詩的ならずとせんや。

一抹の黒雲現はるゝ所、忽ち漲りて滿天を覆へば、暴風颶風瞬時にして至り、電光閃々我目前に煌く、是蟻龍の昇天か將又海若の船人を呪はんとするか。怒濤狂瀾の中、木の葉と紛ふ我帆船は、萬丈の丘に海若を叱咤し、千尋の底に昇天の惡魔を睥睨す。不幸暗礁あつて之に加勢せんか、船體は須臾にして碎け、又如何ともなす能はざらしむ。是時我身の安危は唯一片の板子に懸れり。死の魔神は目前に招きつゝあり、死何ぞ辭せんや、されど我にこの膽あり、幾億の財寶に優る體軀あり、豈徒死するに忍びんや。我瞳孔の黒き時救の神來らずんば即ち息む。我手のこの板手を放るゝ即ち我瞑するの時期と、是船人の安心なり立命なり。何人か大洋の唯中に於けるこの悲劇を知るものぞ。

天祐あり、救の神來つて我身をして此世の者たらしめんか、再び航して、遙かなる地平線に、芙蓉の秀峯を遠望する時、その快や何程ぞその感慨や幾程ぞ。

乃ち知る此等の快味悲劇云ふべからざる感想あつて始めて海上生活の趣味の津々たるを。如上の事その一を缺かん乎、誰か海上生活の趣味を感ずべき。

願くば予をして堅牢輕快迅速なる帆船を得しめんことを、さらば、洋の東西を問はず、極の南北を論ぜず、波濤を蹴て若き活動時否我一生涯を、海上生活に終へんかな。

濱寺に遊ぶ

第五學年 大津 正 一

七月二十五日、今日は、我等の、豫て濱寺に遊ばんと期したりし日なり。早朝、戸外に出て空を仰ぐに、少し曇り勝ちにてはあれど、遊心物々として禁じ難ければ、急ぎ宿を立ち出でて、同行を約せる友二人と、難波停車場に歩を運びぬ。八時濱寺行電車に乗る、電車は、何れも満員の有様にて、多くは濱寺行なり。轟々たる響を立てて快走する電車は、刻一刻と、我等を濱寺に近づかしめつゝあり。「大和川大和川」との車掌の聲に驚きて、窓より見れば、砂洲大部を占めて、水の流るゝ所極めて狭き小川なり。これぞ名高き大和川なるかと、豫想の甚しく違へるに驚きたり。なほ進む程に、右手には、大阪灣近く見ゆ。汽船帆船の往來するものしげく、濱邊の松原の木の間、隠顯出沒するさま風情あり。景轉じ趣遷りて千變萬化する様に、眼を奪はれつゝある中に、早くも濱寺には着きぬ。「濱寺濱寺と叫ぶ車掌の聲も勇し。大阪より此に至る、三十餘分時程なり。下車するもの頗る多し。これより、我等は、濱寺公園にと迎るに、街路の兩側には、飲食店小間物店其他の店舗櫛比して、何れも盛に客を呼べり。市況亦極めて盛にして、活氣満ちたり。これ海水

浴場の設あるが爲めなり。進むこと一二丁にして、やがて一目千本の松原に至る、即ち濱寺公園なり。境内甚だ廣くして、箒目正しく清き道路は、種々に通じて四方に至る。青松白砂相映じて、風光絶佳に、涼氣園内に満ちわたりて、心神爽快を覺え、仙境に遊ぶの感あり。中に、西洋風の一大建築物の、巍然として聳ゆるものは濱寺公會堂なり。又園内には、諸所に機械金棒ブランコ遊木等の運動器具ありて、運動の設備よく整ひ、來遊者の娛樂に供しつゝあり。數多の小供の、樂しげに、これに群れ遊べるも見られたり。又二三の休息所もありて、憩ふ者の便利を計れる等、實に好箇の散策場なり。大阪の如き大都市に在りては、資財の許す限り、かくの如き良公園を數多具へ、閑暇の時これに遊びて、日常空氣不潔の天地に醒寤たる身を保養せば、健康上精神上益すること至大なるを疑はず。我等はこれより、海水浴場に到りて、水と樂しく遊ばんとす。一道に添ひて進めば、やがて海濱に至る。こゝ即ち、大阪毎日新聞社主催の海水浴場なり。毎日新聞社の毎の字を表はせる一大旗、空高く掲げられ、勇ましく風に翻へれり。そを中心として、四方には、數百の赤白青等の小旗かけ列ねられて、美しく飾られたり。傍には、新に小屋を建て、浴者の衣類等を預り、又、游泳着ボート等の貸與するものあるなど、一も間然する所なし。群集無慮六七百に及びて、大に賑ひ、皆衣服脱ぎては海に入る。我元來游泳を好む方なれば、直ちに、衣服打ち捨てて、ざんぶとばかり水中に飛び入る。水中にある者は、皆樂しげに。或は得意氣に泳げるあり、或は救命器によりて、泳げるあり。皆思ひ思ひの遊びをなし、喜色満面に溢れたり。濱邊近き水中に、三四の投水臺あり。これに昇りて憩へるもあれば、或はこれより水中に飛び入りて遊ぶもあり。飛び入る毎に、青藍の水雪花と碎けて、飛沫四散し、壯觀いはん方なし。我もこれに昇りて、四方を眺むるに、前面には、一の小島だになく、眼界豁然として開け、遙の沖に

は、雲か山かと疑はる、淡路島あり。通ふ汽船の笛の音も、涼しく波に響くなり。その間に擁するは大阪灣にして、波頗る穏かに、濱には、白砂長く走り、青松長く連り、且つ、海は淺淺なれば、海水浴場としては最も適當なる地なり。右手には、近く堺港を望み、煙突の競立して、天空を摩せる壯觀も手に取るが如し。左手には、泉州の山々遠く連れり。又海上には、數多の汽船帆船を浮べ、白帆の走るは、さながら白鷗の波間に躍るに似たり。げに一幅の畫圖なり。人一度此處に臨まんか、塵念は頓に去り、神氣は雄大なる景色と冥合して、胸襟の開くを覺え、歸心更に起ることなし。然れども、此日や、天候悪しかりければ、雨の降らざる内にと、惜しき別を告げて、急ぎ歸途に就きたり、あゝ愉快なりしこの日よ。

夏休中の一記事

第五學年 厚 東 四 郎 次

我等一行三人は、阿蘇の登山を企て、八月四日、早朝大分市を發し、途中、沈墮なる水力發電所を觀る。已に夜半なりしかば、止むなく此處の一寺に宿る。翌朝竹田町に出てんとし、山上を通る。左に名だゝる祖母山を見、遙かなる前方に當り阿蘇の噴煙を望むを得。その壯大なる景には今更ながら驚きたり。早朝のことなれば、風なく、烟は眞上に立ち昇り、稍北方に靡く。山上の事など想像を廻らして語り合ひつゝ、行く程に、竹田町に着きたり。この附近は、西南役の際、賊兵の出沒せし所なりといふ。こゝにて晝食を喫して發す。やがて所々に土手を築きたるが如き地勢の所に出づ。而してその間に、恰も隧道の如き孔ありて、内部には燒石現はる。これを潜り入れば、所々に丘陵ありて、多く蕨を栽培せる廣き所を見る。これなん阿蘇平野な

らんと思ひしに、豈圖らんや外輪山の一部ならんとは。忽ち一天掻き曇りて雷鳴甚だしく、微雨亦到る。同行中の佐伯君及余は傘を持ちしかば、他の一人坪井君に雨紙を貸し與へ、これを着せしむ。宛然達磨の姿なり。これを寫眞に撮りたらんにはなど語り合ひつゝ、行く程に、菅生に着きたれば一休みす。雷鳴膽を寒からしむるもの二三あり。暫くにして小降りとなりたれば出て立ち、別格官幣社景行天皇行在所跡なる標札ある所を過ぎたり。此日阿蘇北麓の宮地に着する豫定なりしも、意の如くに抄らず、四里許前なる笹倉に宿る。翌朝八時を過ぐる頃出發し、阿蘇平野の稻田の青色の毛氈を敷けるが如きを打ち眺めつゝ、阪を下る。阪は瀧室阪又は阪梨峠と稱し、外輪山中にありて甚だ峻しく、所々に燒岩突出す。左に小なる瀧あり。その傍に大木ありて蔭をなす。こゝにて少しく涼を取る。初めは氣附かざりしも、白きものゝ上に灰色の點々たるものあれば、何物ならんと熟視するに、皆灰なり。馬夫の曰く、こゝ數日は山の荒ること甚しければ、或は登山は出來ざるやも計られず。平常穩かなる時に於て、噴火口を望めば、七色の水見え甚だ美麗なりと。暫くにして阪梨に着す。民屋は皆竹屋根なり。一人の藥を求めし便に因りて山狀を聞くに、又馬夫の言の如し。余等此言を聞きて、且つは失望落膽し、且つは益々登山の念を盛にし、遙々大分の地より、二日半を費して、山を越へ谷を涉りて來りつゝも、この世界第一の噴火口を有する阿蘇火山を見ずして引き返すは、諸友に見ゆる面目なしとつぶやき、遂には、如何なる辛苦を嘗むとも、必ずや登山の目的を達せんとの決心を爲すに至れり。行くこと一里許にして、正午に宮地に着す。已に平野に入りては、ヨナと稱する灰降りしきり、前日夕立のありしにも係はらず、木の葉屋根等には灰降り積り、風の吹く毎に立散りて、得も云はぬ不快の心地す。今は日露戰爭以來の大噴煙なれば、案内者附添はずしては危険多しとのことなるにより、近傍なる農

家に至り、若者に案内を請ひたり、然るに、今日は噴煙も甚だしく、頂上まで登るには約四時間を要し、又南麓に下るには三時間を要し、且山上にて一時間餘を費さざるべからず。加之、時刻も已に遅ければ、明日にせよと勸告するがまゝに、こゝに一泊することゝなせり。此者の容易く案内を承諾せしに胸撫下し、官幣中社阿蘇神社に詣づ。こは健甞龍命を祀り、規模甚だしくは大ならず。此日社前の蘇門館に宿る。ヨナは座中に入りて心地悪し。我等の居る座よりは、よく山を望むを得たれば、數葉の寫生をなす。現今噴煙するは中岳にして、高さ海拔五千尺、阿蘇山の諸峯中第二の高峯なり。その最も高きは高岳なり。左端に鋸の如くに見ゆるは根子岳にして、右端に見ゆるは杵島岳なり。其他烏帽子岳、楯尾岳、往生岳等の諸峯あり。翌朝六時前。案内者と共に一行四人、登山の路に上る、途中阿蘇谷を過ぐ。松樹繁茂せる間に、牛に乗りたる十數人の一隊の過ぎ行くを見て、奇異の感に打たれたり。その何事をなすかを知らず。又數多の水なき河あり。雨降る時は、水氾濫して渉るべからずと云ふ。道とも川とも見分け難き處を通る。坊中よりはよき道あれども、こは宮地よりの間道なる由なり。又大戦争前には必ず噴煙すとは案内者の言なり。余等の持てる傘の上も灰なり。頭上の木の枝草の葉も亦灰なり。右方に杵島岳を見て登る程に、風漸く強く、道は悪しく、噴煙は低く靡き、余等は、汗の出でたる手面に灰着きて形相甚だ恐ろしく、持ち行きし時計も灰入りて用をなさず。暫くにして草もなく道もなき所に到れば、所々に石を積み重ねて道標となす。一行中余最も歩行に惱み前者との間隔次第に遠ざかり行く。勇を鼓して進まんとすれども、喉は潤れ、聲は出でず、水を求めんとするに亦道なし。加之、登るに従ひ風漸く加はり、傘も吹き飛ばされんとす。辛うじてこれを支へ、前者の足跡を辿り行く。やがて水の湧き出づる所に到り、腰にせる水呑もて、これを掬ひ口に入るれば、異臭鼻を突

く。半飲みて吐き出す。途中急ぎし爲めにや、案内者等の言とは相違し、二時間半許にして山上なる茶店に到る。一休みする間に、案内者なき一群南麓より登り来る。南方には少しも降灰なしといふ。繪葉書を求め紀念のためスタンプを押捺せしめんとするに、こゝの一堂宇の神官これをなし、手数料をとる。其他凡そ物品の高價なるには一驚を喫す。やがて案内者と共に噴火口に向ふ。登ること八町にして達す。噴火口の大なること豫想外なり。その形恰も摺鉢の如く、地層判然として現はる。舊噴火口よりは水蒸氣立ち上り、所謂七色の水など少しも見ることも能はず。新噴火口は、舊噴火口と相並び、僅かの壁を以て限らる。摺鉢形の底に小山出来、これより濃々たる煙を噴出す。一行暫く無言のまゝ打ち見たり。願れば一面の焼野原にして、所々に細長き葉の草生ひたるを見るのみ。双眼鏡を取り出し見るに、阿蘇の平野は廣く連り、所々に人家あり。これを圍めるは、低く水平に連れる外輪山なり。焼野原を所々徘徊して、燒石を拾ひ、或はヨナを壘に入れ持ち歸る。茶店に休む間に、又二群の人々来る。皆南麓より來りし者のみなり。余等はこゝにて案内者と別れ、茶店の晝飯を勸むるをも聽かず、教へられしまゝに湯の谷へ下らんとせしに、途中にて迷ひ、途方に暮れたりしが、やがて山上にある廣き草原に出でたり。これ嘗て耳にせし千里ヶ原ならんとて、これを横斷せしに、遂に道に出でたり。こゝにて晝飯を喫す。飯は宮地より案内者の持ち來りしものにして、包みの裂目より灰入りて、灰團の如くなり居しもをかし。前方に、遠く雲霞の如くに模糊として見ゆるは天草洋の諸島ならん。願れば、濛々たる阿蘇の噴煙。その雄大なる景色、人をして自ら心臓血湧き早鐘を打たしむ。これを噴煙の見納めとして、直下りに下り、湯の谷に着す。さて温泉に浴し、又下りしに、やがて、宮地より熊本に通ずる本道に出でたり。左に當りて大なる瀑布の懸れるを見る。これを數鹿流の瀧と稱す。黒川の水

はこれを下りて白川に合す。其他にも數多の小瀑布の懸れるありて景色佳し。やがて立野に着せり。日漸く傾きて、雨亦降り出したれば、こゝにある彼の有名なる甌穴は見ずして、馬車を驅り、大津に出て、こゝより軌道車に乗り、熊本城下を過ぎて、九時頃上熊本に着しぬ。

拜輦私記

特別會員 安藤 紀 一

余既承乏萩中學校教諭。材疎學淺。身體亦羸弱。顧同僚諸子。皆學識精新。氣力剛健。衆生亦氣日銳。業日進。駸駸乎有可畏者。以區區之身。從事其間。固宜不免濫吹之誹。而諸子衆生不吾遐棄。抑亦何幸。

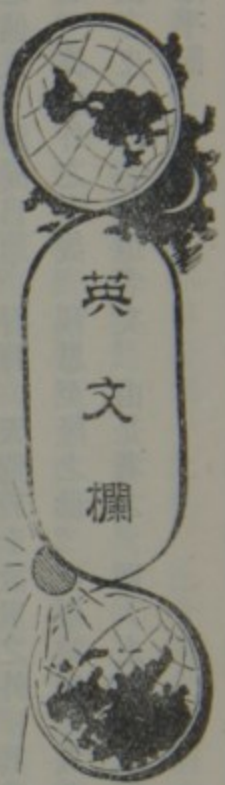
今茲全校員拜 聖駕于防府。余亦參焉。平生之喜。復自觸發。乃錄其顛末。命曰拜 輦私記。

明治辛亥十一月。聖上大閱武于肥筑之野。其七日。駕發東京。八日駐 蹕姫路。九日臨御防府。初是令之下。我縣上下歡抃。有司盡力供張。以公爵毛利氏新邸充 行在所。遠近民庶。舉翹首埃奉迎之日。我校職員生徒以其八日赴之。先發數日。村上校長屢會職員。議事計費。分任定約。集衆生。誨以忠君之禮與旅行耐苦之義。特命第五學年諸生。率部伍。理庶務。用修學旅行之例也。於是衆生預行者三百四十七人。分爲三隊。定旗手一人與護旗四人。旗與隊之事。山本中村二教諭統督之。他職員十一人監之。定先發員三人。田總教諭監之。定會計員二人。藤原教諭監之。別置救護員。約曰。衆以其日午前六時集于金谷。先發員以前一日發。余也體已羸。脚不能與少壯並行。九年前。與校員拜 駕長府。往復長途。既自知吾步之拙。及去歲與俱赴筑前。歸路經山口。步谿風邱雨之中。後衆尤甚。不能督事。特爲失體。故是行欲離衆徐步。請之校長。得許。會金

子教諭亦同憂。乃以午前五時俱發。時曉氣清爽。殘月在天。過大谷暖。四望冲寂。山處處罩薄霧。恍如微雪。入明木。天全明。日出杲杲。沿道茅舍。炊烟浮浮。昇平之象可觀。取路一升谿。古屬國道。今則荒廢不修。拳石礪礪。登躋甚艱。但比之新道。猶爲捷近。故徒步未可遽棄之。不知世有修理之日乎。抑荒廢之極。遂沒捷近之利也。谿盡而險窮。山勢忽開。仰則天放窄晴。秋氣瀟瀟。遠近林巒。飽霜之色可愛。九時半。到佐佐並。入茶店而飯。是地在中。氣候早寒。時日漸近午。山氣猶瑟瑟襲人。不可久留。飯畢。不待衆至而出。午後二時。達山口。先發員來迎。云所定宿舍凡六。其三在豎小路。曰香川。曰金川。曰中川。他在西門前町。曰藤田。曰藤井。曰野村。野村爲本部。金子教諭乃投香川。余投藤田。從其所定也。四時。衆畢至。松本江頭二教諭投本部。粟屋教諭及諸生四十人。與余同宿。浴畢而食。食畢而散步。散步以九時爲限。山口久爲縣治所。又有兵營。文武之士鬱然集。且近開輕便軌道。達于小郡。人物之湊。繁於昔日。二十七年前。余修學于此。暇日觀遊。粗悉勝蹟。爾後每過此。滿目山川。依然舊容。牽思當年師友者。爲不少。是日。余脚不甚痛。即徐步之効也。校長來語余曰。明日之行。從大內經小崎右田到防府。往復可十里。恐子等不能堪。取軌道可也。余亦有所慮。厚謝之。與金子教諭約同車。入夜。一天澄澈。星月皎潔。就寢。衾短而脚冷。不能熟眠。九日。快晴如昨。午前五時皆出纒。六時傳餐。七時結束而發。余告松本教諭以校長言。到龜山車站。意金子教諭已上車。車至則不在。乃獨乘到小郡。待一時許。猶不來。遂到三田尻驛。驛前大道坦然通宮市者。曰惠美須町。地布白沙。兩側田間列榜。示拜迎者位次。曰華族。曰勅奏任官。曰貴衆兩院議員。曰縣郡會議長議員。曰帶勤者。曰褒章佩用者。曰神職。曰僧侶。曰自治教育實業功勞者。曰新聞記者。曰軍資出金者。曰某會員。曰某學校。不可勝紀。道之中央。有大綠門。形狀整美。家家揭日章旗。士女盛裝。往來釋騷。舉欣欣然

有後后之色。相報云。臨御當及午後五時。時過十時。余度衆未至。乃經新橋赴右田。訪親家阿野氏。右田古稱多名人。山縣周南瀧鶴臺亦嘗督學于此邑。邑今有世良源太郎者。其遠祖儀左衛門女爲鶴臺妻者。以淑德聞世所傳以紅白二絲自檢操行者即是也。世良氏與阿野氏家相近。余故得詳之。午後一時。還宮市。遇校生遊步者。曰。正午畢來。飯于松崎小學內。直赴之。適校長與金子教諭亦來會。始詳知教諭微恙不能如約。且來余寓之狀。因與衆休憩久之。防府實爲藤原教諭生地。教諭昨夕先來。約借是校舍。方公私人雜聚。逆旅寺坊大小皆盈。今乃得三百餘人休食之處。教諭周旋之力爲多。四時齊隊。用喇叭而出。到惠美須町。諸學校生徒亦來。整列左右田間。各有號旗。其間金章燦爛。映日射人目者。我之旗也。我之職員生徒已就位。位在諸學校之上。距道十五間。老幼男女。填咽其後。警官屢來制之。既而夕陽沒乎遠嶂。暮色漸合。道上電燈。始放明光。田間又設籌數十。一齊舉火。壯觀不可狀。忽聞空中爆聲。烟火報臨御也。少間。警官三人騎而至。爲先驅也。次近衛將校騎隊至。前衛也。次天皇旗至。近衛騎士奉持之。次玉輦至。侍從長爲陪乘。是時萬衆齊行最敬禮。次近衛將校衛戍司令官騎而隨。次侍從內大臣祕書官宮內大臣侍從武官宮內書記官主馬頭侍醫皆用馬車。次縣知事用腕車而隨。次警官二騎至。爲後驅也。禮畢。還而結束。余與金子教諭先發。過船橋入右田。時日全暮。月未出。暗中求阪路而登。願望防府。燈火星羅。若在天空。空中頻現花炮。光彩陸離。又見海鑑揚燈。光錠萬丈。回射四山。山樹爲之倏明倏滅。金子教諭曰。聞今夜華浦灣陳漁火。以供天覽也。其景亦可想。是路與縣道通新橋者會于勝坂。因憶乙酉歲。車駕之臨山口。實過防府。小休于勝坂及鯖山。時方盛夏矣。聖躬之勞於民政。孰不感泣。今日之至隆。洵帝之力矣哉。八時過洞道。就茶店。店方備飯而待。蓋是日發山口。各帶一次食。乃慮其奉迎入夜。歸途不可堪。豫命是店。爲點心計也。有問。衆至。得食欣然。

舉鼓舌。小憩而去。時月上于龍嶽之巔。清影遠流。山野改觀。自是爲小鯖。一路端平。直通大內。望之若無際。使人殆不堪厭倦。衆生勉強。行歌相慰。余等與之後先。到水上川。橋上遙望。白霧濛々。與水光連。灘聲淙淙。自林薄中來。四顧淒絕。衣袴盡露。水上即屬大內。地有植木氏。其家亦嘗蒙駐輦之榮。當時秋產夏橙實上。天膳云。十一時還山口。衆亦前後歸。終浴食而臥。余脚太痛。然得不甚後而還。即往路取車之効矣。十日。黎明微雨。午前七時舉出。九時結束。上歸途。余與金子教諭先行。比登一阪。雨漸多。步益徐。至夏來原。爲衆所追及。午後一時。到佐佐竝而飯。又先行。五時過鹿脊洞道。雨大至。到大谷。日全暮。歸金谷。已過六時。留校同僚諸子及諸生來迎。尋衆亦歸。喇叭劉亮。隊伍肅肅。止于菅神祠側。校長言於衆曰。三日之行。莫一人訴苦。今而後知吾校諸生之非惰弱子也。爰謹祝唱。大元帥陛下萬歲。於是衆聲齊和二次。次唱萩中學校旅行隊萬歲。即解散。時正七時。抑是行。衆生克遵規而耐苦。下級者亦氣銳略不異平生。豈其忠誠之氣有勝物者。且其長少相扶助使之然與。數演之。則校長之誨。同僚諸子之統督。上級諸生之周旋。相待濟其美。雖謂之善振校風乎。聖代可也。願余何人。蒲柳之質。動不堪事。平生依賴諸子。爲幸已多。今復獲特許。途不必步。步不必與衆馳驅。舉督視之務。一委之他人。游優自適。得拜天駕於十數里之外。其幸榮更大矣。加之同行有人。品山評水。且吟且談。忘路之崎嶇。眞望外之幸哉。竊思至隆之世。百事竝興。人苟有一技。技無巧拙。皆用于時。若此區區之身。亦所謂敗鼓之皮。收蓄無遺者矣。由是考之。則人之不吾遺棄。且眷憐之。亦聖代之餘澤也。既歸家。有感于懷。於是乎記。



AS THE PEN RUNS.

4th year T. Tsubaki.

It was on the cool morning of a summer day that I was called upon by a few friends, who invited me to go to see the famous Ogiotoshi Waterfall. I of course accompanied them presently, and we started off at about nine, one carrying on his shoulder a small hoe, for what purpose I did not know. After walking for some time, we entered a narrow mountain path, through which we groped our way further and further. Cicada welcomed us singing their soft songs on every tree, and streams followed us with their exquisite music.

The sun peeped over the top of a high mountain, and began to throw down hot rays upon the ground, when we reached Torigoe, a very small hamlet, where there are found but four or five hovels of farmers and woodcutters, one of which we visited and asked the way to Goban-ga-dake. We then went forward as we were directed, and passing through a cluster of cypripomerias we began to climb up a very steep and high

mountain, led by a long "hinichi," when dry grasses are burning in spring. As we climbed upwards, mountains and forests came within our view more and more; and the higher we ascended, the hotter and more fatigued we became. For coolness we all bared our shoulders, covered as we were with beads of sweat.

When we reached the summit, the sun had already reached the middle of the sky, and showed us that it was dinner-time. But we forgot hunger and thirst, as who would not in view of this grand sight? As far as we could see, there were in all directions mountains, rising one above another. They were just like waters raging and dashing in the sea, and we sometimes fancied that we were on the shore of a solitary island in mid-ocean.

At length, however, hunger asserted itself and we took out our luncheons; after the meal, we passed through some reeds and on coming on the opposite side of the mountain, we were much delighted to see a waterfall among some pine-trees upon another mountain in the distance. O that I were a poet: The wind brought faintly the roaring of the waterfall harmonised with its own sound, and acquainted us that it was not as it seemed a lying white serpent stretched out on the mountain side.

We soon descended the side of the mountain, but when we came near the foot, we met with a very steep place....the steepest one that ever we had met with. We all were enabled by the hollows dug with that small hoe, whose use had puzzled me at first, to descend without slipping into the rocky valley. At the foot of the mountain we learned from a charcoal-burner the name of the waterfall.

But a near view of Ogiotoshi was no better than that we commanded from the high summit of Goban-ga-dake.

Golden leaves, which adorn all mountains in autumn and please the eyes of men and women, are those that have passed most of their lives and are about to breathe their last; and so we may say that their pleasing colours are of pain of death, and their rustlings, sad cries at the last moment. The impartial Ruler of heaven and earth must be scoffing at man's contradiction that he never feel pity with poor dying leaves.

Of all devices for floating on water a raft is the oldest and the most rudimentary, but for this very reason it is apt to excite the poetic idea of man. It is now-a-days very foolish, tasteful as a raft is, to use it for the purpose of conveyance, instead of a boat or a barge.

As to language, the older it is the more rudimentary and tasteful, for it is by degrees being changed and improved, not artificially but naturally, for the sake of convenience in expressing the meaning and in making tone smooth. So that we must follow the natural improvement of language in speaking and in writing—but in composing poems older words are useful, because the words of the simple-minded ancients are more tasteful than those made with the complexities of civilization.

However, to-day in our country the valuable conversational language, which has been improved from age to age and has become the most convenient one ever we have had, is looked down upon as mere "colloquial" by most people; and in writing books and letters and other things, in spite of their having this very language, they use very hard, old, and unintelligible words that may rather be obsolete, and are proud of themselves as finished writers. They know not that what they write are mere archaic writings and never good ones. Suppose that "colloquial" had no worth being respected, and yet we cannot leave off this and use the other in speaking. This proves indeed that our conversational words are not so useless as

to deserve the epithet "zoku," vulgar.

Of course we know the respect of the present bookish words that had been spoken by our ancestors, but we do not want to become like a foolish man who uses a raft in conveyance instead of a boat. To speak plainly, we want to reject the present bookish works from common books, because it is almost impossible for common people to read them easily and plainly.

We Japanese must be conscious that our own language is destined to be improved sooner or later. But the time when this ideal of rejecting the present bookish words is realised can not be expected in the next twenty or thirty years, for many an obstinate scholar will surely delay it. True, our language has been thrown into disorder, but we are looking for a man who will unify our language anew.

THE HUNTING OF HARES.

4th year T. Kashiwanura.

Perhaps you know that the hunting of hares in winter is one of the most interesting sports for us, who live in such a country as this. Now I wish it to be understood that in general the hare is caught as follows.

Most hares live in fields, on the heath, or in places where small trees grow sparsely. They live on fresh shoots and young roots, but sometimes they will rush into farms to devour young greens, barley, corn, and other plants they like very much. There are no animals that fear dogs as much as hares.

Living in wide places, strange as it may sound, they have proper lanes in which to walk hither and

hither. In winter, hares' flesh becomes nice. So that hunters hunt them eagerly. The amateur, such as I, can hardly find the hare, but hunters do it very easily.

Hunters have a great help in addition to the experience which they have gained in many years, namely a hound.

For this sport, a tame hound or two, and four or five nets are needed. This hound has a wonderful power of smell which I think he has inherited.

As soon as one reaches the hunting ground the helper begins to find the hare, for this discovery is most important. When the hare has been found the nets are prepared—these nets have holes, of which the circumference is enough to admit the hares' head, but not the body; the length of the nets is about 10 or 12 yards and they are spread in fit places. Besides these stands a man whose business is to watch the nets and to know and kill the game, but he must be silent and not pronounce even a word.

When the helper finds a hare he barks at once, Bow-wow, bow-wow this dreadful sound resounds from valley to valley, but this is a signal of success ten to one.

I ought, perhaps, to have told about the hares' legs. The fore-legs, are shorter than the hind-legs, so the hare can run faster up-hill than the hound, but in running down-hill, the hare tumbles down. If you ever witnessed it, you could not help laughing at this funny occurrence.

The hound runs after the game with all his might. As you know, being a wise animal, a dog takes a secret way and approaches a hare. They pass over fields, places where brambles and thorns grow, and cross small valleys and forests.

Thus the poor hare comes nearer and nearer to the net, and as she does not know of its existence, all

at once, she finds herself before it. She stops and thinks, but the dog, her great enemy, comes closely after her so the poor creature makes up her mind to rush over it. But alas, this bold attempt results in her own destruction. The more she strives to run away, the more she is entangled in the meshes of the net. When we catch even one hare, our helper walks at the head of our procession like a triumphant general, but when we fail to snare any game he follows us very meekly, showing his sense of our misfortune.

DANGEROUS MOMENT AT NYOI WATER-FALL.

By U. Watanabe, 5th Year-Class.

On the 29th of July in this summer vacation I could not endure the heat of the climate in my house so I decided go for cool air to Nyoï water-fall with my friend Mr. Kogawa who had come from Fusan a few days before.

This water-fall is situated at Obata, about 1 ri eastward from Hagi, and although it is located in a country not well-known, it impresses every beholder with a sense of its beauty. That day the weather was bad and the sky was clouded over. Rain was pouring down from two or three black clouds in the sky over our heads, and besides the wind blew so hard that our umbrellas were of little use. We crossed Ganjima bridge speaking about the weather, and soon as we came to the foot-hill of Sarayama.

Hereabouts, there were two or three mill-houses with roofs like great slouched hats pulled over their eyes, standing on wooden legs. They crush the stone to make porcelain. From this place the way became

more difficult, some times we jumped over the brook or climbed the rocks clinging to trees and vines. At last we arrived at a valley where one finds the small water-fall hanging like a bamboo-blind. Just at that time a cool breeze washed the perspiration from our bodies. The sound of the rapids echoed along the mountains like rumbling peals of thunder. Mr. Kogawa and I climbed the rock leaning upon our umbrellas and finally we could see the Nyoi-water-fall.

Our joy knew no bounds; we cried out "What a beautiful sight this is!" and it seemed as if the milky-way had fallen down from the sky. The upper one is about 20 feet high and the other is lower than that. With a deep roar their sound is heard for two or three miles, as they raise soft clouds of white spray spanned with rainbows enchanting beauty.

My friend was praising it "Indeed! I have no words to describe a scene of such overpowering grandeur," and he took off his clothes cheerfully and climbed on the upper rock, when he concealed his clothes. I followed him in the shortest cut to the top of the lower one and in an attempt to jump over to the other side, my foot slipped and I fell into the cataract. Ah! what a narrow escape! I lost my presence of mind, but grasped the rock unconsciously or my body would have been as a drop of foam on the river. Fortunately only a towel which was about my neck was lost, and I went down the rock and thanked God earnestly. As Mr. Kogawa did not know of this dangerous sight in my life, he was surprised and glad to hear of my safety when I told him about it. In a short time, as the weather became bad so we hurried home.

THE PINE TREE.

Jun Naganuma.

One inspecting the three most famous views of Japan will at once be struck by the prominence of pine trees in the scene. Suppose they were excluded, what would Matsushima be, or what Hashidate? Indeed, Japan is truly the country of the pine tree—our most typical views are a prominent pine on a lofty summit, a long belt of pines on a white sandy shore, a sinewy pine on a harsh rock, a deep green pine forest in a dark ravine.

Have you ever seen a pine tree on the rough bare rock, swept by the cold north wind and buffeted by mountainous waves? Yet against these great obstacles, firmly, securely he stands there forever, and the waves are broken, the winds go away leaving but a sound. There is none, I think, but is inspired by the sight of a pine tree standing prominently on a majestic pinnacle, with the shrill wind sighing through his branches. We go so far as to wonder if it might not be an angel whispering something to us.

Our greatest men in all ages have been brought up among fine landscapes of pine trees. This goes to show that not only is our nation exceedingly fond of this tree, but is improved by associations with it and contemplation on its characteristics.

I may even say that otherwise beautiful views which are lacking in pine trees cannot be regarded as typical Japanese scenery. Consequently those who visit our country, and neglect or disregard the pine tree, may not be truly said to have seen our country, nor can they be said to understand or to appreciate the distinctive characteristics of our nation.

講壇

七生説略解

特別會員 藤井百輔

七生説は安政三年四月十五日、松陰先生二十七歳の時の作にして、愛國僧默霖が之を評して、是文足觀其忠節。僕輩讀之、壯快正襟。といひしが如く、此文を讀めば、先生憂國の熱情、忠義の至性、烈々燃ゆるが如く、躍々人に迫り、眞に人をして感奮興起せしむ。先生も亦初より未だ嘗て死せざるものなりといふべきか。頃者、村上校長、余に其意解を命ぜらる。其意は、蓋し我校在學諸子が、平生先生を欽仰するに因りて、此等の文を熟讀玩味し、先生の精神主張を了解し、益々感奮興起する所あらしめんといふに在るが如し。諸子請ふ之を察せよ。唯恨むらくは、余が學の謏薄にして、十分に文義を解剖すること能はず、淺處に手の及ばざる感あるを免れざることを。

天之茫々、有一理存焉。父子祖孫之繇々、有一氣屬焉。人之生也、資斯理以爲心、稟斯氣以爲體。體私也、心公也。役私徇公者爲大人、役公徇私者爲小人。故小人者、體滅氣竭、則腐爛潰敗、不可復收矣。君子者、心與理通、體滅氣竭、而理獨亘古今窮天壤、未嘗暫歇也。

○茫々 茫は莫郎の切、音バウ、茫々は廣大なる貌。○繇々 繇は武延の切、音ベン、繇々は長くして絶えざる貌なり。○理はもと玉石のキメの事にて、借りて、何事に限らず、物のスヂメあるをいふに用ゐらる。物理地理道理義理などいふに考合せて覺るべし。理氣と並べていひたる時も、大體右の意は離れぬ事なれども、少し込入りたる意味あり。天の、物を覆ひ、地の、物を載せ、日月の、下土を照臨し晝夜寒暑のかはるゝ往來消長し、人獸草木の生々して盡さざる、是皆かくあるべきわけありて、いつまでもかくの如くなるなり。其然るゆゑんのすぢを理といふなり。○氣にも色々の解あり。自然の事物につきては、火氣水氣空氣暖氣寒氣などいひて、目に見、手に取ることはなりがたけれど、其物は確に存してあるをば、氣の字を以て表すこと多し。又人につきては、勇氣浩然之氣などいひて、志の指圖を受け、耳目鼻口四肢のはたらき即視聽言動の元となりて、之をつかさどる者をいふ。理と對しいふときは、理は本體にして、氣は其用なりともいふべし。先儒も色々の説ありて一致しがたけれど、中庸章句に、天以陰陽五行化生萬物。氣以成形、而理亦賦焉。といへり。此文意を味へば、天陰陽五行のはたらきによりて萬物を作る。形體は氣に因りて成り、性は理を受けて成るといふこと、見えたり。然らば、陰陽五行のはたらき所以は理にして、陰陽五行のはたらきは氣の作用なり。尙いろいろ込入りたる沙汰もあれど、此位の處にて本文の意はさとらるべし。○稟は筆錦の切、音ヒン、ウクと訓ず。○資は即夷の切、音シ、大哉乾元、萬物資始、の資、又資於事父以事母。の資、共にトルと訓じあり。○私公の二字は從主副正といふ程の心持にて通ずべし。○大人は元尊貴の稱なれども、借りて有徳の人を表し、小人は卑賤の者をいふ名なれど、借りて無徳の人をいふに用ゐられ、君子小人といふと同じ事な

り。さて、此段の要旨は次の如し。

天といへば、廣漠にして際限なく、捉へどもなき者なれども、其中に、おのづから一の理といふ者ありて、至大至正、始もなく終もなく、萬古に亘りて已まず竭きざる者なり。又人間に在りては、父祖よりして、子々孫々に至り、古き者はゆき、新しき者出て、世を換へ、代を改むれど、いづれも氣のはたらしきによらずして成れる者なければ、其間には、血肉相分ち、系統相承け、一氣の連屬ありて斷ゆることなし。人の此世に生出づるには、上にいへる所の天の理を受けて心となし、氣を受けて體となす。されば、心は主なり正なり、體は従なり副なり。主なる者の爲に従なる者を使役するは當然にして、君子の爲す所なれど、之に反して、従なる者の爲に主なる者を使役するは小人の爲す所なり。言換ふれば、徳を修め道を行ふを專一とする者は君子にして、肉體の欲を満足せしむるを以て目的となす者は小人なり。故に、小人は一旦活力の休止して死亡する事あらんには、功業の、世に存する者もなく、感化の、人に及ぶ者もなく、形骸の腐朽するとともに、其人の、世に在りし事をすら知られぬ事となるべし。君子は、其心天理と一致すれば、行ふ所も亦悉く正義公道ならずといふ事なく、たとひ其身は死すとも、天地の存せん限り、其人は不滅なるべし。そは天理は萬古に亘りて已まず渝らざるものなればなり。

余聞贈正三位楠公之死也、顧其弟正季曰、死而何爲。曰、願七生人間以滅國賊。公欣然曰、先獲吾心、耦死而死。噫、是有深見于理氣之際也歟。當此時、正行正朝諸子、則理氣並屬者也。新田菊池諸族、氣而理通者也。由是

言之、楠公兄弟、不徒七生、初未嘗死也。自是其後、忠孝節義之人、無不觀乎楠公而興起者焉。則楠公之後、復生楠公者、固不可計數也。何獨七而已哉。

○楠公正季の事は改めて説明するまでもなし。○耦は五口の切、音コウ、對なり、耦刺は互に刺違へて死ぬる事なり。噫は於其の切、音イ、ア、と訓ず。恨聲なりとも、哀痛の聲なりともありて、心に恨み痛みの有る時發する聲なり。○正行、是も説明に及ばず。○正朝は和田賢秀の弟にして、楠氏の一族なり。正行の死せし時、賢秀正朝亦同じく死せり。○新田は、義貞をいひ、菊池は、武光をいへるは勿論なれど、獨義貞武光のみならず、新田氏に在りては、義助義興義宗など、菊池氏に在りては、武時武重武吉武朝など王事に勤めし人々を包括して考ふべし。

余聞く、贈正三位楠公の湊川に死せらるゝ時、其弟正季を顧みていはるゝやう、御身は、死して何を爲さんと願へるぞと。正季對へて、願くは、七たび人間に生出て、此國家に仇なす賊どもを滅さんといはれければ、楠公、吾心もしかなりとて、欣然として、兄弟互に刺違へて失せられけりと。あゝ、右問答の趣を尋ぬるに、尋常人の及ぶべきにあらず。楠公兄弟は天人理氣のことわりをも深く窮められたりを見ゆ、此時、正行正朝などの人々は、楠公忠義の心性を承繼き、又父子骨肉の間柄なれば、理の上よりも、氣の上よりも、共に關係ある者なり。新田菊池などの人々とは、父子骨肉因縁あるにあらざれば、氣の上よりは關係なれど、忠義に盡す真心には變りなく、共に一理を同じくする者なり。仁義忠孝の心

性を同じくして、一理の相通するときは、代を同じくするも、時を異にするも、面貌形體こそかはれ、必竟同一人の如し。然らば、楠公兄弟の如きは、七たび生るゝはおろか、初より死にたる事なしといふとも可なり。是より以後、忠孝節義を以て著れたる程の人には、一人として、楠公兄弟の忠義に勵まされて志を立てたるにあらざるものなく、楠公を生じし事幾人なるを知らず、たゞに七たびのみならざるなり。

余嘗東遊、三經湊川、拜楠公墓、涕淚不禁、及觀其碑陰、勒明徵士朱生之文、則復下淚、噫、余於楠公、非有骨肉父子之恩、非有師友交遊之親、不自知其淚之所由也、至朱生、則海外之人、反悲楠公、而吾亦悲朱生、最無謂也。退而得理氣之說、乃知楠公朱生及余不肖、皆資斯理、以爲心、則雖氣不屬、而心則通矣、是淚之所以不禁也。

○三經湊川、三たびは、初嘉永四年、二十二歳にて、藩主に従ひ江戸に行かれたる時、次は嘉永六年九月、長崎に来れる露艦に投せんとて、江戸より京都を経て長崎に至られたる時、次は同年十一月、長崎より此地に歸り、止ること數日にして東上し、京都伊勢を経て江戸に行かれたる時を指せるなるべし。○碑陰は石碑の裡なり。碑は徳川光圀卿の建てられたる者にて、表に、嗚呼忠臣楠公之墓の八字を刻し裡に朱之瑜の作りし楠公贊を刻せり。楠公贊は、日月麗乎天、忠孝著乎天下、云々といへる者にて、世に名高き文なり。○勒は盧則の切、音ロク、字書に刻也とあり。ホリツクルことなり。徵士、徵は知陵の

切、音チヨウ、メスと訓ず。學問德行などのすぐれたるを以て、官より徵召を蒙れるを徵士といふ。明の徵士とするせるは、清朝に屈從せざる心を明にしたるなり。○朱生は朱之瑜の事なり。之瑜は字を魯與(又楚與)といひ、舜水と號せり。明の浙江省餘姚の人、早く父に離れ、漸く長じて恩貢生に擢てられ、累りに徵されたれども就かず。明末の國運漸く傾くに及びて、之瑜、海外の援兵を得て義旗を擧げんと志あり、頻りに奔走せしが、志を得ず。四たびまで本邦に來り、遂に止りて還らざりしは萬治二年の事なりきといふ。後徳川光圀卿の聘に應じて水戸に往き、十餘年を経て歿したり。不肖、肖はニルなり。不肖とは親に似ぬ愚なる子といふ意にて、こゝは先生謙遜の辭なり。余嘗て東國に遊びし序に、三たび湊川を經過し、楠公の墓を拜し、感極りて、涙のはふり落つるを得とてめざりしが、其碑陰に鐫られたる明の徵士朱之瑜の作れる楠公贊を觀ては、又々涙せきあへざりき。あゝ、余と楠公とは肉身の棄て難き情誼あるにもあらず、又朋友教師などいふ親しきまじらひのあるにもあらざるに、などてかくは悲しみの心深く、涙は落つるぞと我ながら惟しう覺えぬ。特に朱生は外國の人にてありながら、却つて楠公の死を痛み、吾亦異邦の人なる朱生を悲しむといふこといと謂れなきに似て、いぶかしき至りなりしが、さて後、理氣といふ事の解をさとり得て、始めて、楠公朱生も余不肖も、共に此理を受けて心となせば、骨肉父子の關係こそなけれ、忠孝節義の精神は相通してかはることなし。是ぞ、其跡を弔ひ其文を讀み、感極りて涙のせきあへぬ故なるを知れり。

余不肖存聖賢之心、立忠孝之志、以張國威、滅海賊、妄爲己任、一跌再跌、

爲不忠不孝之人、無復面目見世人。然斯心已與楠公諸人同。斯理安得隨氣體而腐爛潰敗哉。必也使後之人亦觀乎余而興起。至于七世而後爲可耳矣。噫是在我也。作七生說。

○海賊、海を越え來りて、我國に寇せんとする外敵の意にして、當時の諸外國を指す。○跌は徒結の切、音ラツ、ツマヅクなり。一跌再跌とは、初は嘉永五年に、許可を待たずして他藩に出でたりとの廉にて罪せられ、次に安政元年、潜に米艦に投せんとせし咎にて投獄せられたるなどをいへるなるべし。余不肖ながら、聖賢の心を以て心となし、忠孝の道に志し、國威を張り、外寇の患を絶つを以て、妄りに己が任となし、奔走盡瘁すれども、事と志と常に齟齬して相合はず、失敗に失敗を重ね、忠孝の道も立ち難く、世人に合せん面目もなし。さはれ、此心は已に楠公諸人と同じく此理を受け得たるからには、たとひ、志す所の事は成らずとも、いかで、身の亡ぶると共に消果つべき。必ずや、後の人をして、余が爲せる所を觀て、忠孝の心をふり起さしめん。余と此心を同じくする者のつきくに世に出て來らば、余は七たび生れかはれりともいふべし。かくてこそ我志は果すべきなれ。是は我任なるぞかし。七生說を作りて、吾志の程を述ぶることしかり。

松陰先生の最後

特別會員 松本喜一

諸君、本日の松陰先生追慕會に於て、先生に關して何か話せといふのが校長の命でありましたが、偉人に非ずんば偉人を解せず、私の如き平凡の徒は先生を語る資格のないことを自覺するのでありますが、小なる主觀に映ずる先生に就いて少しく述べて見たいと思ふのであります。

本日は五十餘年の昔、我等の崇敬する松陰先生の偉大なる靈が靜かなる神となつた日である。先生は天保元年八月この萩城の東郊、松下村に生れ、安政六年十月廿七日、新しき曆に換算すれば本月本日、國事犯罪人として江戸の北郊骨ヶ原の刑場に斷頭臺の露と消えたので、其間僅かに三十年、先生が社會に馳驅したのは嘉永四年藩公に扈從して江戸に赴きたる以來、其の最後に至るまでの七八年に過ぎないのである。其の社會的生活の此の如く短命なるに拘らず、又維新の志士雲の如く集れる中に於て、とりわけ先生の事蹟の益々研究せられ歳と共に愈々光輝を放つに至つたのは、蓋し先生の偉大なるに由らなければならぬと思ふ。

先生は多くの企謀を有して居られたが、自ら之が實行に任ずるの機會を得なかつた。先生の生涯は實に逆境の連鎖で、其一代は實に奮闘の歴史である。人先生を目して難産したる母の如しと云うて居る。先生は實に難産の爲めに死なれたのであるが、其の死は幾多の赤兒を奮起せしめて、先生の宿望たる維新の革新を完成せしめたのである。故に明治維新の大業にして傳ふべくんば、先生は永遠に滅すべからざるものであります。明治維新とは何であるか、封建社會の解體、政權統一の事業である。明治維新の歴史を語るもの或は維新の改革を以て佛蘭西革命と同一視し、徳川幕府の顛倒は幕府の煩取苛求に堪へず、萬民疾苦より免れんが

爲めに、名を尊王に借りて初て反抗の旗を翻へしたのであるとして居るが、之れは一面の觀察に過ぎないのである。駿々乎として開展し來つた世界の氣勢は、我國をして徳川氏の鎖國的政策を許さず、米艦下田に來り、露艦松前に迫れるの時勢は、對外的思想の惹起となり、愛國的精神の發揮となり、國民的精神の自覺となり、對外的思想や敵愾的氣象は國民的統一の鼓吹となつた。國民的統一と封建割據の制度とは元より兩立すべきものではない。蓋し外國といふ思想は日本といふ觀念を刺戟し、日本といふ觀念は尊王愛國の精神と一致した。之れが實に封建制度の破壊、王政復古の大業を成さしめたる所以で、而して松陰先生は實に之れが急先鋒となつたのである。然しながら先生の尊王愛國の精神は先生の所謂至誠より出てたるもので、決して無責任なる空論ではなかつた。内外の形勢を達觀したる先生は始めより殆ど終りに至るまで討幕論者ではなかつた。之は實に先生の偉大なる所以ではありますまいか、只尊王攘夷が幕府に由て實行せられないのを見るに及んで、初て討幕の止むを得ざるを認めたるに過ぎないのである。安政二年三月、月性に與へた書中に「天子に請うて幕府を撃つのことに至つては殆ど不可也」といひ、其理由に、「兄弟牆に鬪ぐも外其侮を防ぐ、大敵外に至り豈に國內相攻むるの時ならんや」とある。先生の所謂攘夷とは護國の謂で、排外の義ではない。かの米艦に投じて海外に赴かんと苦心せるが如きに察すれば、先生は又膨脹的帝國主義の急先鋒であつたことを知ることが出来る。

あゝ百事悉く志と違ひ、安政六年五月廿五日、江戸艦致の命を聽くに及んでも毫も騒ぐ所なく、先生は宛ら勇士の戦陣にのぞむが如く、欣々然として萩を出たといふことである。先生が獄中の生活は、獄中より友に與へた書信に由て詳である。或は唐筆を求め、孫子一卷を求め、金子を求め、郷里の友人の消息を通せざ仕候。平生學問淺薄にして至誠天地を感格する事出來不申、非常の變に立至り申候。嗚々御愁傷も可被遊拜察

親思ふこゝろにまざる親ごゝろ
けふの音づれ何とさくらん

先生は愈々死の旦夕に迫れるを知り、十月廿五日から『留魂録』に筆を染め、廿六日黄昏に至つて稿を擧つた。

七月廿九日に至つて略一死を期す、其後九月五日、十月五日吟味の寛容なるに欺かれ又必生を期す。亦頗る慶幸の心あり。十六日の口書は三奉行の權詐吾を死地に措かんとするを知り、因て更に生を幸ふ心なし。之れ亦平生學問の得か然る也。

死の避くべからざるを知るや、死を待ち死に安んじて居た。廿七日評定所に於て死刑の宣告を受けて午前十時、熱烈なる革新の大精神は、天に昇つて永く護國の神と化したのである。

之れ先生が生涯の終焉である。思ふに先生の偉大なるは、其の事業ではない。先生が自身に感じ、自身に書き遺されたとほり、先生は行年三十年、未だ一事の成るに及ばずして空しく逝き、其の後繼者によつて素志の貫徹を見たのである。而も之れは先生が人格の力である。この偉大なる人格はいかにして形成せられたのであるか、元より先生が天稟と家庭の感化と、其の師佐久間象山の教導とに由つたのではあるが、抑も亦山鹿素行あるを忘れてはならぬのである。素行は先生が未見の師とする所である。嘉永三年、先生廿一才の秋、鎮西旅行の途に就いて、平戸を訪うて山鹿流の家教師範たる山鹿萬介の門に入り、更に山鹿流の兵學家、葉山左内に就いて各種の新知識を得べき書籍を借覽した。由て以て泰西の銃陣、地理、清國の時事に關する知識を得、王陽明及び其の學派の書を涉獵し、其の家學たる武教全書（八卷）の研究に従事した。而して最も先生の心を動かししたのは、思ふに山鹿素行の『配所殘筆』でなければならぬ。此の書は恐く松陰先生の『留魂錄』を生む素因となつたもので、素行が一代の心血悉く此の眇たる小冊子の中に注がれてある。此の如くして先生は、兵學者たる山鹿素行を學んで英雄たる山鹿素行に到來した。先生が一生の主義は實に茲に完成せられたのである。抑も素行とは何ぞ、『配所殘筆』とはいかなるものであるか。

山鹿素行名は高興、素行とは其號で、通稱は甚五左衛門、陸奥會津の人である。三才で江戸に出て、六才で書計を學び、八才の頃までに四書五經、七書詩文を大方讀み覺えて、九才の時、林羅山の門に入つた。又尾畑景憲、北條氏長に就いて兵學を修め、高野光宥、廣田坦齋に就いて神道を學び、共に其の蘊奥を究めたのである。十八才に及んで加州家から祿七百石を以て聘したが謝絶し、後ち數年、承應元年播州赤穂の城主淺野内匠頭に仕へた。二年赤穂に赴き、八年間滞在、致官して江戸に歸へり、文學兵法を教授することとな

つた素行の名聲益々高く殆ど一代を風靡するの概があつて、門弟實に二千人を超え、中には北條安房守、松平越中守、淺野因幡守、丹羽左京大夫、阿部伊勢守、板倉内膳正、松浦紀伊守、本多備前守等の貴紳もあつたのである。

寛文六年十月三十日、北條安房守より突然「可相尋御用の事候間、早々私宅迄可被參候」との書簡が來たので、『追付參上可仕候』と申送つて、さて素行は竊に事或は『聖教要錄』に關するのではあるまいかと思つた兎に角、尋常の事ではないと豫測して大に決心する所があつた。そこで立ち乍ら遺書を認め、早稻田なる菩提寺宗三寺へ參詣し、若黨二人を召し連れて、馬上で安房守の邸へ赴いた。すると安房守は幕府の命を傳へ不届なる書を作つたといふ理由を以て淺野内匠頭に御預けになる事を宣告されたのである。

其の原因を尋ねるのに之れは全く學派の衝突である。素行の書いた『聖教餘錄』は片々たる小冊子に過ぎないのであるが、之れは實に朱子學派の壘壁に向つて發せられた砲丸であつた。朱子學は藤原惺窩の鼓吹した所であつて、林羅山が幕府に用ゐられるに及んで、其の奉ずる所の朱子學は幕府の教育主義となつた。素行は羅山の門に養はれたのであるが、其朱子學に嫌らぬものあつて古學の復興をはかり『聖教要錄』一篇を公にしたのである。羅山に反抗するはやがて幕府の教育主義に反抗するものといはねばならぬ。海内の學者十の八九、朱子學派に屬する時に當つて獨り古學を鼓吹せんとした彼は、其の狀殆ど一州の兵を懸けて天下に抗するの觀があつた。豪快思ふべきである。

越えて六月九日未明に江戸を發して、廿四日配所に到着した。素行が事變の咄嗟に出たのに拘らず、寸毫も狼狽の態度を露はさず、冷靜沈毅にして豫後の計をなすに於ても遺憾のなかつたのは、確かに彼の偉大な

所てなければならぬ。『此節は人間の一大事相究め五十年の事夢の覺め候様に有之時分に候へば、聊心底に取亂し候事無之候』と『配所殘筆』中にあるは、以て其の消息をうかゞふに足ると思ふのであります。配所にあること凡そ十年、彼れ自ら其の間の消息を洩して、同じ書の中に『病中の外、雖一日、朝寝不仕、不作法なる體を不仕候』と書き残してある。

赤穂に在ること前後實に十有九年、其の間力を教育に盡して、君臣の道を説くこと頗る詳密で、殆ど遺憾なしと稱されて居る。後年に至つて、大石良雄を始めとし四十六人の義士、臥薪嘗膽、義によつて死を誓ひ、一擧して吉良上野介を仆し、尋いで皆從容として自刃した事は、吾人の記憶に明かな所である。其の事蹟を追想するに眞に秋霜烈日の如きものがある。世界廣しといへども未だ東西の歴史に其の類例がない。如此非常の行爲は元より偶然に出づるものではない、素行が十有九年の教育。能く赤穂の人心を鎔鑄陶冶して、遂に此の奇異なる結果を生じたことは、復た疑ふべき餘地がないのであります。素行は配所に在ることが十年の久しきに及んで、其の終焉の時期に近づいたことを豫測し、かの『配所殘筆』を作つたのであるが、其の年六月十五日を以て赦されて江戸に歸り、淺草田原町三丁目に餘生を送つて六十有四で逝かれた。例の宗三寺——牛込早稲田榎町の——に葬られた。其の著書には、聖教要録三卷、山鹿語録四十三卷、武教小學一卷、武教全書八卷、配所殘筆一卷、などが主なるものである。

素行が大なる經綸の識を具へ、經綸の才を抱いて、徒らに勢力家の迫害を被り、其の抱負の幾分の一をも伸べ得なかつたのであるが、時代の經過につれて益々惜まれ、近時武士道の重ぜられる様になつてからは、其の特殊の干係からして、名聲の愈々高くなつたのは、恰もわが長藩が明治政府の主なる勢力となり、伊藤

山縣等の諸公が元勳の隨一と目せられるやうになつてから、其の由來を察するに從つて先生の益々顯はれ、愈々欣慕せられるのと、符節を合するが如きは奇と謂つて宜しいのである。

思ふに先生の性行が、素行に由つて多大の影響を受けたことは復た疑ふべき餘地あるを見ぬのである。先生が幾多の艱難に屈せず、一難を経る毎に愈々奮へるが如き、其の蟄居中松下村塾に英才を養つたことの如き、或は其の終焉に臨んで『留魂録』を草したことなどは、素行に私淑したためてはあるまいか。孔夫子が周公に私淑せるが如き、孟子が孔子に學べるが如き、所謂偉人偉人を生むは、古今東西、其の例に乏しくはない。偉人崇拜が吾等の修養に缺くべからざるものとなつたのは、蓋し偶然ではないのである。從つて今日、松陰先生追慕會の開催を見るの意義も亦自ら明かにならざるを得ないのであります。偉人は或る意味に於て國家の代表者である。國民が其の偉人に對する興味を失つた時は、やがて國民的墮落の一徴候と見るべきではあるまいか。

抑も人間の價値は何に由つて定まるのであるか、人々各々觀る所を異にするために、其の標準とする所も元より一定しては居らぬのであるが、概括して稽へみれば後世に傳つた事蹟が、其人の偶然性に係れば、夫れだけ輕んぜられ、必然性に係れば、夫れだけ重ぜられる様である。例へば、人あつて、門を大にし立關を大にし庭園を大にすれば偶々路傍人の尊敬心を惹き起すに少からぬ効力があるが、金殿玉樓の一夜にして化して灰燼となり、名園も荒廢して丘墟となつて、其昔、何人の遊んだものか知れないものが數へきれぬほどである。數百カラットの金剛石は實に一千萬乃至一億圓を値ひして、之を佩ぶれば、人皆驚嘆して能く仰ぎ見るものがないほどであるが、之は其人の光に非ずして物の光である。或は巨大なる財寶の一朝にして失は

れたり、或は體格と腕力の偉大を以て譽高き常陸山も長へに全盛を恣にすることの不可能であるが如く、偶然性は偶然に來り偶然に去るものであつて、到底之れに由つて人の評價をなすことは出來ないといはねばならぬ。其永遠に決定せられたる評價の標準は遂に必然性たる精神力、——換言すれば其人の人格——に據らねばならぬ。而も其人格の價値は往々其最後に於て遺憾なく發揮せられるのである。松陰先生の最後は實に能く其人格の全部を語るものである。

死は人の假面を剥いて其の本色を露はさせるもので、死は蓋し人をして舞臺から移して樂屋に入らしめるものである。先生が死に臨んで、平生學問の淺薄であつた事を嘆じ、從容自若として刑に就かれたのは、正に哲人の境地である。希臘の哲聖ソクラテスが從容として毒を仰いで國法に遵つたのと、偉人の最後は、東西實に其軌を一にして居る。

諸君、太陽の下に在る萬象は必ず終がある。書籍には終の一行があり、演説には終の辭がある。生活には最後の行があり、死に臨んでは最後の言語がある。先生の言に曰く、

身はたとへ武藏の野べに消ゆるとも

と、めおかまし大和魂

と、私は先生が最後の言の壯烈なるを思はざるを得ないのであります。

來 信 一 束

秋天高く澄みて眞に爽快を覺え候折柄、親愛なる校友諸君益々御健全にして御勵精の段不堪欣賀候。我高工の概況は、故田原四郎君が貴紙の第八號に於て、既に諸君に報道せられし所に候へども、小生は茲に重ねて其内容を御紹介可申上候。

隅田の西岸に嚴然と屹立せる赤煉瓦の建築、數本の煙突に盛に黒煙を吐き居候もの、是ぞ一千の藏前健兒を收めたる我高工に有之候。本校の内部は、色彩科紡織科窯業科應用化學科機械科電氣科化學科工業圖案科建築科の九科目に分れ、修業年限は何れも三年に御座候。別に工業教員養成所なるものあり、各科に分屬し、本科生と殆ど同様に候へども、修養年限三年二學期間にて、學資補助の恩典有之候。毎日の授業は七時間にて、午前八時の汽笛に授業始り、午後四時の汽笛に終る。時間は門衛に於て取締り居候へども、一般に嚴正に守り居候。之は將來工業家たる素養の一にして、學校に於ても大に獎勵し、一年間無缺席者には手島賞牌なるものを授與せられ候。

工場實修は、本校の最も重きを置く所にて、各科を通じて毎週平均十六七時間、即一日の課業の半分は工場實修に從事することゝ定り居候。此實修は始は一寸異様に感ぜられ候へども、僅かに三年間にして、一人前のエンジニアとして立つ資格を得るは、實に此の工場實修の間に養成せらるゝものにして、少しく馴るゝ時は、非常に趣味を生じ、中々愉快なるものに候。教室に於ける空論の半解半疑なりしものが、工場の實

修に於て豁然として氷釋するに至りては尙更に候。

本校の入學試験は毎年五月に施行せられ候。又卒業の際、全卒業者の十分の一以上の席次を占めし者は無試験檢定を受くるを得。其許可せらるべき人員は、各科共、其募集人員の約半數にて、之に合格せざるものは、更に入學試験に應ずを得候。試験科目は、各科を通じて英語數學物理化學圖畫(自在畫及用器畫)の五科目に候。是等の科目は、入學後に於ても最も必要なるものに候へば、中學時代に於て特に注意し置くの必要あること、存じ候。

學校に於ては、英語は各科共平均每週三時間有之候へども、參考書始め講義に於ても常に接近する者に候へば、豫め十分學び置く可きこと、存じ候。數學及び物理化學は、殆ど凡ての科の根底を作り居候。九つの科別の中、機械電氣建築紡織等は物理的にして、其他は重に化學的に候。製圖は、圖案科を除き、各部を通じて、一週平均五時間許り有之候。之も中學に於て用器畫の素養十分なる時は甚都合よきこと、存じ候。

校友會は文藝部音樂部端艇部劍道部柔道部弓術部庭球部の七部より成り、文藝部にては淺草文學と稱する文藝雜誌を出し、又雄辯會と稱する辯論會も開かれ、何れも中々盛大に候。音樂部にては時に演奏會開かれ、ハルマの音機械の響の斷間を綴りて樂器の音の聞ゆるもゆかしく候。端艇部は河に近き丈に、校友會の事業中にて最賑ひ居候。九科を青赤白の三部に分ち、毎年五月に、隅田川上に大競漕會を催し申候。其際に於ける劇烈なる應援、無邪氣なるヤジリは、五月二十六七日に於ける盛大なる學校紀念式の眞面目なると相對照して、いよ／＼藏前健兒の特色を發揮し居候。其他劍道部柔道部も、河畔に道場を設け、餘暇を以て練習し居申候。

今や世界の趨勢は工業に向ひ、工業界は社界に於て重要な地位を占むるに至り、我國に於ても、國家的事

業として之が振興を務むるの期に向ひ、着々歩を進め候へども、之を歐米諸國に比すれば、尙未だ兒戯に類する者あるを免れず候。歐米諸國にては、自國の發明製作品に對して之を尊重するの風一種の國粹とまで考へらるゝ程なる由聞及び候に、我國にては、「和製」なる語が、一般に劣等品を意味するを見ては、我國の工業が如何に幼稚なるかを知るべく、從つて我工業界に如何に開拓の餘地多きかを知るに足るべく候。

我校に於ける萩勢も、近來漸く其數を加へ、機械に村田泰君津守完君兒玉一男君、電氣に山根四郎君中村誠君居られ、每學期開催致候山口縣人會にても最も優勢に候。本年夏卒業せらるべかりし田原四郎君を失ひしは惜みても尙餘りあることに候。

學校の事情につき委しき事は規則書につき御覽下され度候。之は學校へ申込みば直に送り可申候。又五年級諸君へは毎年送附申上ぐることに致し居候。御不審の事あらば御問合せ下され度、出來得る限り御答可申上候。終りに臨み、校友會の隆盛と校友諸君の健康とを祈り申候。勿々不盡。

東京高等工業學校電氣科

田中 貢再拜

拜啓、春尙淺く、寒さも中々にさびしき昨今、諸君には益々御強健、日々御研學の段、大賀に存じ候。小生は此に、在京同窓者より成立ち居候指月會を、諸君に御紹介申上候。元來、萩中出身の在京者實に多く、孰れも諸種の方面に活動仕り居候、吾指月會は、此等在京者の親睦を謀り、且又智識の交換を目的となす者にて時々集會を催し、中々盛に有之、今後も益々發展仕るべき見込に有之申候。然るに、吾指月會は、單に之の

みにて満足せず、延いては、在校諸君とも、一縷の連絡を保ち、將來上京、將に爲すあらんと致さる、諸君の爲、多少の御便益に資せん事を希ふものに御座候。尤も、小生等の在學中には、略々此事あるを承知致し居候ひしも、今や、指月會なるもの、漸く諸君の腦裡を去らんずるを見候ては、深く残念に堪へざる次第に御座候。特に、五年生諸君は、既に五箇年螢雪の御いそしみを終られ、前途洋々たる希望を以て、母校を去らんと致さる、時に御座候。従つて、其曉には、御上京益々御修學相成る向も不少と存じ候へば、御不審の事ども有之候はゞ、御遠慮なく御開合せ被下度候、いづれ指月會の内容等は、校友會誌の一隅を借り、委しく御紹介可申上候。學年末最も御多忙の時期なれば、冗言を省き、單に御紹介まで如此に御座候。不乙

指月會幹事

安藤芳彦拜

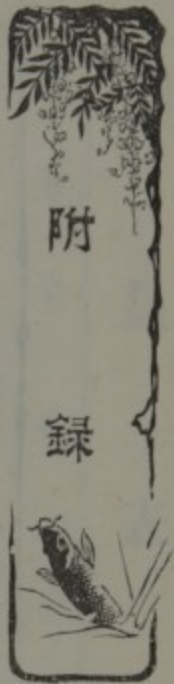
二月二十日

萩中學校生徒諸君

追啓

御開合せ御書翰は、左の中、いづれへなりとも御宛御投函相成度候。

- 東京市本郷區駒込追分町卅番地榮林館
三浦惟一
同 芝區志田町十二 益田直彦
東京府豊多摩郡大久保百人町二四六奥田方 安藤芳彦



山口縣立中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫觴す
○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校とし大に教則を改正す○山口中學の高等中學となり文部省の所管に歸するに及び本校は萩分校と改稱せられ高等中學の豫備校となれり
○二十年四月改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる○同年八月重見氏轉任し線貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり線貫氏校長に任ぜらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月線貫氏萩分校主事を命ぜらる○三十一

附録

年三月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となる○同年四月渡邊盈作氏主事に任ぜらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣命を以て規則を發表し職制並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九拾三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盈作氏校長心得を命ぜらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷羔太郎氏校長に任ぜらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名。是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病沒せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる○同年十二月七日塚本氏校長に任ぜらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名。是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる○同年八月塚本校長

第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務
 取扱を命ぜらる○九月長崎縣立島原中學校長羽石重
 雄氏校長に任せらる○三十九年三月二十七日第六回
 卒業式を行ふ卒業生六十一名○四十年三月二十三日
 第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名○四十一年三月
 二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名○十一
 月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ○四十二年三月
 二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年
 より縣令を以て共通試験を廢せらる○四月三十日羽
 石校長岩國中學校長に轉任せらる○五月七日熊本縣
 立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる。七月七
 日戊申詔書奉讀式を頌つ○四十三年三月二十四日
 第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名○四十二年一月寄
 宿舍の名を定めて誠之學舎といふ○四十四年三月二
 十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名。

國體といふは、神州は神州の體あり、異國は異國の體あり。
 異國の書を讀めば、兎角異國の事のみを善しと思ひ、我國を
 ば却て賤みて、異國を羨む様に成行くこと、學者の通患に
 て、是れ神州の體は、異國の體と異なる譯を知らぬ故也。

松 陰

職 員 表

(明治四十五年二月廿日現在)

受 持 學 科	職 名	就 職 年 月	姓 名	原 籍 地
修 身、英 語、歷 史、 代 數、幾 何、三 角、	校 長	四十二年四月	村上俊江	山口縣
英 語、漢 文、習 字、	全 教 諭	三十二年九月	藤原甚吉	山口縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	頓野多介	山口縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	安藤紀一	山口縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	山田兵吉	山口縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	藤井百輔	山口縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	戶元章次	山口縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	山中元規	滋賀縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	中村宏規	滋賀縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	丸本庄太郎	滋賀縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	田中市郎	佐賀縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	江頭精一	佐賀縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	粟屋周祐	佐賀縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	本保次作	富山縣
英 語、漢 文、	全 教 諭	三十二年九月	田總百合之助	山崎縣

農科大學卒業在清國
新潟縣立能生水産學校教諭
哲學館大學卒業萩泉福寺住職
陸軍輔重兵中尉
未詳
三田尻專賣支局平生出張所在勤
朝鮮仁川小學校
山口縣立萩中學校教諭
石油會社員
法科大學卒業在郷
陸軍步兵中尉(步一八)
在郷
清國陸軍大佐
神戸石炭商會員
陸軍步兵中尉
愛媛縣立西條中學校教諭
愛媛縣立西條中學校教諭
陸軍騎兵少尉
海軍中尉
萩町役場員
死亡
東京帝國大學農科大學卒業
萩中學校教師豫備陸軍步兵少尉
在京
陸軍步兵中尉

栗屋春太郎 早稻田大學卒業
佐伯益豐 陸軍二等軍醫(山口四十二聯隊)
森信丸 門司稅關官吏
中村喜代藏 臺灣協會學校卒業臺灣製糖會社
安江樸生 國學院大學卒業
品川鴻介 死亡
河野安宅 死亡
栗屋周祐 廣島縣立廣島中學校教諭
山根省吾 京都帝國大學助教
菊屋孫輔 京都帝國大學助教
山根孝一 死亡
柿並誠一 海軍大尉
上原多一 東京帝國大學院
三宅彌太彦 陸軍輔重兵中尉
阿川義介 在郷(編重五大廣島) 中島
河野通毅 東京美術學校師範科卒業
佐藤虎介 死亡
和田專三 下關(組事務員)
阿座上長一 海軍三等主計
木村彌三 死亡
渡邊五六 農科大學林學實科卒業
山本百合熊 新潟縣立柏崎中學校教諭
江川暢 根室商業學校教諭
青水英一 陸軍中尉(步四一)

波根良 東京高等商業學校古屋ス
茶川一 長崎郵便局在勤
增野榮三 海軍筆記
岸榮市 東京高等商業學校卒業
原川國介 明治大學卒業
山本慈雲 神戶稅關在勤
兵庫縣技手
門司三井物産會社員
未詳
東京高等商業學校卒業在臺灣
紀藤庄一 妻規一
弘毅太郎
波邊儀賢
三浦國藏
島田八重丸
大多和作太
飯尾平七
赤川省吾

第三回(明治三十六年三月)
(以上四十二名)
玉木正行 未詳
兼常清佐 東京高等商業學校卒業在臺灣
中村文治郎 在郷運送業
佐古良一 海軍中尉
大田明治 海軍機關中尉
木村磯治 在下關實業ニ從事ス
吉田光胤 在神戶實業ニ從事ス
羽根義三 兵庫縣屬
寺田昌市 東京慈惠醫院學校卒業
阿部昌介 在下關商業ニ從事ス
會根昌一 死亡
藤井勉 早稻田大學商科卒業
宇野英一 大阪帝國通運會社
林壽香 在京城商業
片山市太郎 在神戶
白上貫之助 未詳

未詳
慶應義塾大學卒業
東京高等工業學校染織科卒業
農科大學實科卒業
大阪商船會社三ヶ濱支店員
大阪高等醫學學校卒業
遞信省在勤
在朝鮮
陸軍步兵中尉(步四二)
內務省福井縣土木出張所事務員
在郷醬油製造兼米商
以上五十一名
第四回(明治三十七年三月)
東北農科大學 摩托厚東
陸軍砲兵中尉(野砲七)
海軍中尉
神戶高等商業學校銀行在勤
山口高等商業學校卒業
京都帝國大學理工科大學卒業
未詳
未詳
陸軍步兵中尉(二一)
神戶博寸會社
休職陸軍三等主計

中野清 三池炭坑事務員
杉道助 陸軍步兵中尉(步四二)
篠原五郎 陸軍步兵中尉(步四二)
厚東健二郎 海軍中尉
波多野晋平 慶應義塾商工學校卒業
田中唯一 東京帝國大學文科大學
內田贊 京都帝國大學文科大學
八谷俊一 死亡
上田米太郎 東京高等工業學校機械科卒業
片山熊雄 收稅局
永富儀三郎 九州鐵道管理局在勤
陸軍經理學校卒業
死亡

木津谷泰夫 東京商船學校卒業
松尾英一 大阪商船會社役員
乃美忠次 士官候補生
杉山俊亮 東京外國語學校
安間定次 獨語專修科卒業
福田信彦 在郷酒造業
久保田庄作 兵役
三浦九一 陸軍中尉(步四二)
村田發太 山口高等商業學校
兒玉武男 三見高等小學校教員モト小池有
吉見市郎 京釜鐵道在勤
藤井晴一 慶應義塾大學卒業
新庄順一 東京外國語學校獨語科卒業
伊藤傳次 未詳
室田貞一 陸軍工兵少尉(工五廣島)
山本公平 早稻田商業學校卒業
佐古芳次郎 在韓國
能美留壽 以上五十二名
高橋熊太郎 東京高等商業學校卒業
浮里俊道 東京帝國大學法科大學
青原忠一 東京帝國大學法科大學
今井武方 東京高等工業學校
吉武傳一 卒業撫順炭坑在勤
海軍少尉

第五回(明治三十八年三月)
以上五十二名
橫田三介
井山正作
原田信藏
山田俊江
中村敏介
桂木庄市
村橋孫市
和田正敏
和村精男
木村武彦
正木孝介
根來行藏
信國武尙
井田晋一
西村昌一
笹原孝一
山田昌介

陸軍少尉(步四二) 前原四郎 長崎醫學專門學校
 陸軍中尉(臺灣) 大谷卓三 大阪高等工業學校卒業
 陸軍中尉 南方秋亮 未詳
 未詳 中村芳樹 京都佛敎大學卒業蓮生寺住職
 東北農科大學卒業大連水産會社
 陸軍中尉 大田三郎 明治大學
 慶應義塾大學 中村助順 豫備步兵少尉萩中學校教諭
 同 橫地素之進 未詳
 熊本高等工業學校採鐵冶金科 赤川義助 在神戶
 在郷 林 在郷
 死亡 羽崎勝五郎 臺灣銀行支店員
 死亡 下瀬政三 私立東京高等農學校卒業
 同山醫學專門學校卒業 厚東洋 瀬戸崎小學校教員
 八幡製鐵所在勤 野村英一 以上四十三名
 早稻田大學 太田健太郎 第六回(明治三十九年三月)
 岡山醫學專門學校卒業 增野純亮 長崎醫學專門學校
 早稻田大學 佐村武一 慶應義塾大學卒業
 自宅商業 百井盛一 山口高等商業學校卒業
 慶應義塾大學 河野利長 陸軍少尉(砲二二)
 自宅商業 高橋信一 第五高等學校
 神戶市役所在勤 國弘壽 大阪高等工業學校
 早稻田大學 吉富嘉春 東京帝國大學
 死亡 坪井海乘 山口高等商業學校

岡田信太郎 東京帝國大學
 落合兼文 在臺灣
 神崎一郎 東京醫科大學
 河名謙雄 東北農科大學
 田中義雄 宗頭小學校教員
 藤津亮然 死亡
 中村正治 陸軍少尉(步一二)
 堀兼治 奈古小學校教員
 口羽素介 海軍少機關士
 日比豐 東京外國語學校佛語科卒業
 水津貞輔 海軍少機關士
 東谷光亮 慶應義塾大學
 國重照 東京帝國大學
 山田八郎 海軍少尉
 陸軍士官候補生
 兵役(近衛步兵三ノ七)
 神戶ライオンクサン
 石油會社員
 大阪高等工業學校卒業在郷
 東京法科大學
 下ノ關郵便局在勤
 應應義塾大學卒業
 實業(在旅順)
 陸軍少尉(步一二)
 熊本高等工業學校土木工學部松

山口高等商業學校卒業 平島哲郎 山口高等商業學校
 生命保險會社員 堀澤正政 死亡
 在郷 大中正秀次 大阪高等工業學校
 山口高等商業學校卒業 山本爲善 死亡
 紫福小學校訓導 モト渡邊 伊藤幾輔 未詳
 山口高等商業學校卒業 山縣四郎 未詳
 在東京 青野直彦 未詳
 三見小學校教員 宮原道廣 死亡
 東京國民銀行員 永井要輔 未詳
 長崎高等商業學校卒業在佐賀 石原忠亮 東京高等工業學校
 在郷 金子精一 山口高等商業學校
 未詳 藤井龜松 卒業日本銀行員
 三池炭坑 加藤保一 東京高等商業學校卒業
 在郷 杉山判二 東亞同文書院助教授
 榑東小學校教員 山本敏造 山口高等商業學校
 慶應義塾大學 山科元二 京都大學工科
 未詳 奧田又助 第五高等學校
 千葉醫學專門學校 木村六郎 海軍少尉
 早稻田大學商科卒業 松尾民治 陸軍士官候補生
 山口縣師範學校卒業 長澄市衛 陸軍少尉
 西小學校訓導 鹿野政一 陸軍少尉
 未詳 鹿野政一 陸軍少尉
 在郷 神戶電氣鐵道會社員
 兵役

第七回(明治四十年三月)

井山謙輔 死亡
 小田太吉 陸軍少尉(步三五)
 栗栖康生 陸軍少尉
 波根又介 小學校教員
 伊藤八郎 東京商船學校卒業
 陸軍少尉
 第四高等學校
 在郷 田原四郎 東京高等商業學校
 堀田幾太郎 釜山稅務署
 水門義繼 陸軍少尉(步四二)
 善市正三 在東京
 佐藤良文 陸軍少尉(步四二)
 官吏 村田歳一 死亡
 三浦正夫 山口高等商業學校卒業
 在朝鮮 藤井式部 早稻田大學(理工科)
 在東京 厚東芳介 早稻田大學
 岡山醫學專門學校 原田淳一 在米國
 小野梧式 早稻田大學
 神田孝一 在郷商業ニ従事ス
 吉村賴正 中央大學

小林京介
 中村樹介
 林義助
 吉岡恒郷
 長岡忠雄
 山下寬一
 國重孝
 河北一三
 金子雨一
 三村五郎吉
 大谷二郎
 阿川義人
 阿川市熊
 羽倉市熊
 阿川徹亮
 品川庸平
 秋本善五郎
 三戸良一
 伊藤利博
 田村壯介
 大谷壽福
 吉浦緒信
 村崎敏行
 德富周平
 杉山清一

名古屋高等工業學校
兵役
未詳
大津郡深川小學校教員
神戸税關鑑定官補
神戸鐵道廳經理係在勤
在東京
陸軍士官候補生
在東京
關東都督府大連土木出張所員
山口高等商業學校
大阪坂鶴鐵道會社員
在東京
死亡
神戸税關吏員

第八回(明治四十一年三月)
以上五十六名

江原一良 陸軍士官候補生
柳田昇二郎 海軍少尉候補生
長谷川秀一 海軍機關學校
來島元助 東京高等工業學校
橫見莞爾 山口師範學校二部卒業
平川春助 東京高等工業學校
村上欣一 東京高等商業學校
水井精一 大阪高等工業學校卒業
黒瀬白 陸軍士官候補生
福岡四郎 長崎造船所
田中豐 東京高等商業學校
中村誠一 未詳
河野次郎 在朝鮮
奥野眞一 陸軍士官候補生
兒玉忠彦 在朝鮮
陸軍士官候補生

石光憲式 東京商科專門學校
瀨屋七平 河崎造船所
本原直孝 山口師範學校二部卒業
津守完 長崎高等商業學校
波多間靈 未詳
村田泰 死亡
木村生三 未詳
栗屋潔 未詳
小倉誠一 大阪高等工業學校
杉本基良 山口師範學校二部卒業
原純一 在朝鮮
中村信介 未詳
齋藤新一 早稻田大學師範科
田坂榮助 早稻田大學師範科
岩崎利一 第一高等學校
藤田秀八 第三高等學校
吉岡良平 東京高等工業學校
河內通祐 同上
末永一郎 第七高等學校
藤井愛 陸軍士官候補生
上田重 在郷
同德一 山口高等商業學校
早川 在臺灣

第九回(明治四十二年三月)
以上四十四名

竹重頼三
山本顯祐
岡藤又七
松浦純一
伊藤時重
山中喜一
中村道生
西村基助
小倉誠一
野村昇輔
落合實藏
奇藤徹多
白井洗

陸軍士官候補生
東京高等商業學校
在朝鮮
大阪高等工業學校
兵役
大坂高等工業學校
在臺灣
第七高等學校
京都醫學專門學校
陸軍士官候補生
在東京
山口高等商業學校
第五高等學校
在臺灣
在郷實業
山口縣師範學校一部卒業
山口縣師範學校二部卒業
卒業吉部小學校調導
在郷
兵役
未詳
兵役
兵役
士官候補生
山口縣師範學校二部
卒業吉部小學校調導
在郷
兵役

第十回(明治四十三年三月)
以上三十八名

增野雅一 在郷
安藤芳彦 陸軍士官候補生
石川光一 在東京
渡邊迪謙 山口縣師範學校二部
渡邊迪知 卒業仙崎小學校調導
在郷
大谷祇詮 在郷
村田三介 東京高等工業學校
松野十一 第三高等學校
齋藤定一 陸軍士官候補生
黒瀬禎祿 陸軍士官候補生
永松力 神戶高等商業學校
松野信次 陸軍士官候補生
古谷實 大阪高等工業學校
瀧退一 第五高等學校
岡良之 神戶高等商業學校
三村惣一 山口縣高等商業學校
宇野四郎 士官候補生
香積元清 朝鮮釜山郵便局
伊藤義雄 陸軍士官候補生
中西作介 陸軍士官候補生
吉澤正太郎 大阪高等工業學校
武安明 水産講習所
山本傳一 東京高等商業學校
金子勘助 山口高等商業學校

大田良吉 海軍兵學校
桑原雅亮 千葉醫學專門學校
白井曉彦 山口高等商業學校
松浦好輔 慶應大學理財科
窪井隆三 在郷
白木小學校教員
山口高等商業學校
熊本高等工業學校
相島啓祐 陸軍士官候補生
中原吉雄 第八高等學校
平佐幹 在郷
田村孝亮 慶應義塾大學
植村九一 在郷
工藤峻 農科大學實科
善市亥三郎 山口高等商業學校
戶田剛三 京都醫學專門學校
田中敬藏 在郷
梅田吉郎 兵役
玉木正之 山口縣師範學校二部
和智孝任 山口高等商業學校
藤井醇一 岡山醫學專門學校
小野太亮 門司鐵道院
阿部時治 在大阪
山口高等商業學校

驛元三郎
瀧邊寛治
土井武一
村上賢一
上利茂
安達茂作
山田耕作
金子眞一
福田敬二郎
石津美瑠
益田直美
山一源吾
落合健
福島俊一
村井勝
阿武重元
野北重利
朝枝櫻一
橫田秀一
齋藤忠明
柴田信智
三浦嘉七
坂本勝虎

第七高等學校
山口縣師範學校二部
卒業小川小學校調尋
山口高等商業學校

藤井百合松 熊本高等工業學校
高 信 一 慶應義塾大學
前田孝男 兵役

田 邊 礎 在郷
須子伴二 在郷
佐々木四郎 在郷

百二
三好敬一
松浦茂

第十一回(明治四十四年三月)

第一高等學校
第三高等學校
海軍兵學校
陸軍士官候補生
山口縣師範學校第二部
山口高等商業學校
在郷
在東京
山口縣師範學校第二部
第七高等學校
第三高等學校
在郷
陸軍士官學校
東京高等商業學校
山口縣師範學校第二部
在郷

藤村良作
廣兼來藏
大谷雄介
松井隆美
波佐間久
村田新一
矢田篤一
塚本清一
西山彦三
兼谷善二
寺 戶 篤
椋木史朗
齋藤二郎
末成茂
栗栖成
古橋清一

第七高等學校
在東京
山口高等商業學校
百十銀行裁支店
陸軍士官學校
佐々並小學校教員
近衛師團入營
在郷
在東京
淺田小學校教員
在東京
第七高等學校
在郷
熊本高等工業學校
大阪高等醫學校
山口縣師範學校第二部
在東京

上野義清
兼田唯助
山崎秀輔
飯尾三郎
大田荒輔
伊藤道顯
厚東剛四郎
桑原義輔
三浦敬造
小枝義雄
河口百合長
山本直正
富田強吉
津田等
齋藤武文
村橋通
柴田龍三

小野小學校教員
在郷
在郷
在郷
在郷
第五高等學校
在郷
明倫小學校教員
在郷
明倫小學校教員
在郷
明倫小學校教員
在郷
山口縣師範學校第二部
東京齒科醫學校
在郷
在郷
在郷

豐中善實
守永自由平
松崎周一
林 孝 一
原田正三
江原茂
藤原政一
上田嘉一
信國久堅
大野暢夫
蘭野好應
櫻井秀康
高橋藤太郎
伊藤香

以上四十七名



會 告

一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は十月末日までとす。用紙は隨意。但一行二十四字詰にして、假名は平假名たるべく、變體假名は成るべく用ゐざること、句點讀點の下は必ず一字分を缺くこと。

一、會友にして、本誌の寄送を望まるゝ諸君は、郵税共實費金貳拾貳錢(郵券代用妨なし)を豫め送附し置かれたし。本誌の發行は、其年末若は翌年頭たるべし。

明治四十五年三月二十六日 印刷
明治四十五年三月三十日 發行

《非賣品》

發行兼編輯者 益成敏熊

山口縣萩町

印刷者 勝亦省三

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

